第二教室

本間文庫
文庫 14
D 13
2

4

第二帙

第二卷 抽屉

文庫14
D13
2

第二嶺雲搖曳目次

其一

芭蕉……一頁
俳論家としての渡邊支考……十九頁
歸休庵に答ふ……三十六頁
日本文學に於ける新光彩……三十八頁
詩人と厭世觀……四十三頁
禪宗の流行……四十七頁
東洋的の新美學を造れよ……五十三頁
太陽の文學評論記者に答ふ……五十七頁
文學上に於ける西歐崇拜の殘夢……六十四頁
漢學復興の機……七十二頁
莊子逍遙游……八十頁
アムブレッショニズム……八十五頁

詩想と詩形……八十七頁
俳句は主觀詩か……八十九頁
輕浮と沈着……九十一頁
達者の言……九十二頁
大文學者を得ん乎……九十三頁
詩想の涵養……九十四頁
禪學と俳句……九十六頁
文學と民心……九十八頁
偉人の追想……百　頁
罵時嘲俗の風……百二頁
批評家と作家……百三頁
俳句の題詠……百四頁
餘韻と印象の明瞭と……百五頁
漢字廢止を排す……百七頁
古學を學ぶの要……百九頁

一葉女史の濁江……百十頁

其　二

露伴……百二十五頁
鷗外と逍遙……百三十二頁
篁村……百三十九頁
正直正太夫……百四十頁
紅葉……百四十二頁
柳浪……百四十四頁
水蔭……百四十七頁
一葉……百四十八頁
弦齋……百五十一頁
泉鏡花……百五十三頁
德富蘇峯……百五十四頁
多慨の詩人中野逍遙……百五十七頁

「嶺雲搖曳」を出して漸く半歳、一版つき二版つき、三版四版忽ちにしてつき、今や第五版亦將に市に絶えんとす。人は稱して近時の出版界稀に看る所となす。

首尾を通ずるものは熱罵の辭也、一卷を掩ふものは慷慨の言也。誨淫媚俗の書にあらざれば、歡迎せられざるの今日、計らざりき天下の青年趨走して皆之を求め、世に數くと二萬の多きに及ばんとは。混濁の世尚ほ一道の光明ある乎。

嶺雲子の清國に赴く前一月、計るに續卷發行の事を以てす。子曰く疎放の性曾て一枚の稿をとゞめず。編輯を一任せんのみと。即ち新古の新聞雜誌につきて、若干の論文を集め、列れて此一書のうちに收む。編輯の序を失し、躰裁の雜然ふるは罪編者に在り。

第二嶺雲搖曳

田岡嶺雲著

其一

芭蕉

茲夏都門の喧囂に厭て、暫く身を湘南の僧舍に寓す、山深からずと雖とも自ら人間に別に、松密にして常に俗埃を絶つ、晝靜に鳥は苔痕を啄て驚かず、境幽に雲は後岑を抱て閑なり、磬韻響て妄念自ら滅し、讀經を聽けば思の彌〻玄なるを覺ゆ、襟を披ひて修竹に向ひ、足を踞して青風に坐す、終日一事なし、逍遙自適、心私かに之れを樂めり。一夜更闌け人定まりて後、獨り眠る能はず、起て戸を推せば、月既に落ちて、乾坤一黑、四顧聞然、唯星の寂しけにきらめくをみるのみ、大空、大寂、嗒然として忘るゝあるか如く、茫然として失ふ所あるか如し、忽然潑溂一聲響き闇を衝破して聞

ゐ、再び闇に埋まれぬ、蓋し是れ前池の跳魚か、於是蕉翁か古池の吟を想起して、みたりにこれか眞意を探らむとを思ふ、摸索百端得るあるか如く得るなきか如く、終に氣餒ゐ神勞れて、昏々として夢幻に入る、翁の簑笠の姿、十德着たる姿、千草八千草自かじゝ生繁りたる庭、佛壇に出山の釋迦の像を安置したる庵のさまなど、現はれて消ゐ、消ゐては現はれ、終宵つひに華胥の境に入るを得ず。明日筆を援て其猶眼前に髣髴たる者をとつて、試に翁を寫さむとするに、參錯紊亂としてもと綱の提くへきものなければ、論して修理の整然を得る能はす、左思右考終に能はすして筆を抛てやめり、爾來幾たびか筆を執て幾たびか抛ち、こゝに新たに此稿を起す。夫れ偉人は猶自然界の大觀の如し、みる所に由て其觀を仝うせず、眼孔豆小予の如き者、豈に能く翁の全相を識り得たりとはいはむや、予の寫す所は予か蕉翁のみ、大方の嗤笑は豫め期する所なり、

さま〳〵に聞くや芭蕉に夜の雨。

子華子曰く撞二釣石之鐘一、六樂合二奏於一庭、所二以寫一樂也、而隱憂者臨一之而逾悲、不一主一乎一樂故也、鬱搖而行歌、促絃而急彈、所二以寫一憂也、而安恬者得一之而逾歡、不一主一乎一憂故也、然則憂樂在一外也、所二以主一之者內也、內之所一感、赭蒼互一色、東西貿一區、而味者則

不二之知一也、故曰觀二流水一者、與一水俱流、其目運而心逝者歟と、客觀の象が主觀の境遇に從て變ずるをいへるなり。もとより客觀の存在は疑ふ可きにあらず、客觀の存在あればこそ、吾人の感官に印象をも受くるなれ、されども、感官か此印象を受くると同時に、其客觀として存在せし者は我主觀としての存在と變ずるなり。空氣の動き耳に入て聲となり、灝氣の動き目に入て光となる、光と聲とは、客觀其物に非らすして主觀的の現象なり、されば主觀の狀態によりて、客觀の認識に相違を生ずべきことは爭ふ可らず。春の夜の朧月を、若く者ぞなさとあくがるゝあれば、秋の夜の望の月に、千々に物思ふ涙をそゝぐもあり、春の月も、秋の月も、月は冷然として其軌道を過り行くのみ、何の悲歡かあらむや、唯觀る者の、これにあくがれ、これに泣くのみ。詩人が一般に多情多恨あるは、その想像力に富み一想、連想を抽き感觸以外に主觀的の觀念を描くが故なり、されば庸人には、些の感興をも惹起さゝる微細の動緣にも、其心を痛く動かさるゝ事あり。庸人の眼には些細に瞑するとも、猶黃疸を病む者には何者も黃色と感するが如く、偉人の眼中には凡ての物に意味あらざるとなし（カーライルのいひし如く）。私は松尾宗房が、其主藤堂良忠の死に遇うて、忽然として其仕を捨てゝ逃れたるを怪しまず、其感じ易き所、即ち詩人たる所以を見るに足ればあり。

夫れ生ある者は必ず死あり、人は墳墓に入らむが爲めに、母胎を出て來る者なれば、死てふことは、もとより人生の常にして、駭くに足るなき者なり。然れども、人既に生を享くれば、ひたすらに生きむと欲するの一念に驅られて、また死といふ者あることを顧みるに遑なきなり。榮華を朝顏の露のひぬ間の盛りと悟らずして、富貴を百年の後に續けむと欲し、遑々役々名利の街に狂奔して、殊に知らず、三寸息絶ゆれば、萬事休す、妻子珍寶及王位、つひに泉下に從はずして、四肢五躰壞るればもとの土に歸ることを。人若し一旦、我身の必す死せざる可らざる者なるに思到らば、誰かまた慄然として粟立するを覺えさらむや、死は見る可らざるの陷穽なり、人は刹那も其上を放れ去ることを能はずして、而して一度は其永遠の暗黑に葬られざる可らざる者なり、明日の生あるを賴む莫れ、次瞬間の事必すしも測る可らず、夜半にも嵐の吹かぬ物ならねば、人生の五十は逆旅の夢、夢の裡に怒り、夢の裡に笑ひ、靑蠅の營み、蝸角の爭ひに、貪瞋痴慢の迷ひを盡す、觀すれば果敢なき人の命、迷うて暮らす淺ましさよ。されはショッペンハウァーが語にも、死てふとなくむば人に哲學の觀念或は起るとなかるべしともいへり、釋迦が金殿玉樓の安逸をすてゝ、雪山七年の苦行に大覺の眼を開きしも、老病死の苦に感して、之か解脫を求めしに外ならず。宗房か主の死に遇うて既に人生の

無常を觀、更に其遺髮を奉して、高野の山深く分上りて、法の嵐に煩惱の塵を拂ひ、眞如の月に無明の闇をてらして、再ひ塵界の擾々に下り見し時は、如何斗り浮世のさまの厭ふべきを覺えけむ。その

雲とへたつ友かや雁の生別れ

の一句を遺し、夜に紛れて伊賀の故郷を立去りしは、寛文六年七月半ば、梧桐の一葉に秋立そめし頃にして、歳未た二十三なりしと聞けは、血氣方さに滿溢して、世に憂きてふとありといふ事しも知らぬ年輩なるを、嗚呼詩人は早く人生の苦を味ふ者か。

昨日の發句は今日の辭世、けふの發句は明日の辭世、吾生涯いひすてし句は、一句として辭世ならざるはなし、わが辭世如何にと問ふ人あらば、此の年頃いひ捨てし句、いつれなりとも辭世なりと申給はれかし、

深く人生の無常を味ひしの言、芭蕉の常住坐臥、其念頭に常に死といふの觀念を忘れざりしを見るなり。されはその觀相の常に物を憐れむの點に存したりしは怪しむに足らず、

俳諧は物を憐れむを要領とす、自他の觀相は更なり、物を憐むとは、草木の霜にあひ、鳥獸の寒暑にくるしむ也、されは道に臥したる乞食に向ひ、さたなしとれもふ

念起らは、一句にむすぶ事能はず、不便と思ふ心は、則ち風雅の一句なり、

此不便と思ふ心起るは、同情の感起れはなり、此同情の眼を以て萬物に對るか故に、萬物皆活動してまた我に向ふ也、一微草の戰き、一細流の囁き、悉く我と同しく生命あらざる事なきなり、晋子か猿蓑の序に、

只俳諧に魂の入たらむにことゝて、我翁行脚の頃、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑をきせて、俳諧の神を入れたまひければ、たちまち斷腸のおもひ叫ひけむ、あたに懼るべき幻術なり、

この魂の入るとは、芭蕉の主觀的の觀念か同情の働きによりて、客觀を活躍するか如く感したるを云へるに外ならず。凡て詩人か、非情の景物をも、其筆端に上せて、目睹するか如く感せしむる者は、此同情に外ならず、近松か

某若き時、大内の草紙を見侍る中に、節會の折ふし、雪いとう積りけるに、衛士に仰せて、橘の雪拂はせられけれは、傍なる松か枝も、たはゝなるか、恨めしけに刎ね返りて、と書けり、是れ心なき草木を開眼したる筆勢なり、其故は、橘の雪を拂はせらるゝを、松か羨やみて、おのれと枝を刎ね返して、たはゝなる雪をはねをとして、恨みたる景色、さなから活きて働く心地ならすや、

といへる語中の、非情の草木を開眼せしむるとは、其角か魂を入るゝといへると同一義なるのみ。此非情の物をも活かして觀ると、有生の物をも死なして觀るとは、詩人と科學者とが取る所の進路の相違なりとす。蓋し科學者の萬有に對するや、常に其相互の關係を討究し、これより概念を抽き出たし、此概念を比較推度してその相通の性質を求めむとす、故に其訴ふる所は推理の能力なり、即ち抽象的なり、成るべく萬有の現實に遠らむとする者なり。反レ之、詩人は直覺的なり、具象的なり、萬有を其現はれたるまゝに觀るなり、情の力を以て直ちに之を攫むなり、即ちバイロンが

I live not in myself, but I become
Portion of that around me; and to me
High mountains are a feeling

つく〳〵と獨りむかへば我身さへ
月の中なる心地こそすれ　樂翁公

と歌へる如く、我と萬有とを一致融合するなり。故に詩人には非情の草木さへ活躍するが如く感し、熱情を以て之を對するに、科學者は、冷々氷の如きの頭腦を以て、(ウオーヅウオースが嘲けりしか如く)、其生母の墳墓の上をもあさりて、植物の採集をな

すなり。

宗房は擾々たる眠俗に混して面白可笑く此世を過さむには餘りに多感なり、擧世皆醉はゞ、其醢を啜り、其醨をなめて、天下の人と倶に狂舞せむには餘りに眞面目に過きたり、此故に彼は世に堪へすして世を捨てぬ。然れとも、彼は離世異俗、意を刻く行を尚くして、山谷非世の士とならむには寧ろ摯實に過きたり、船錢茶代をもゆるかせにせざれと、敎へたり。彼は超然脫俗、散髮箕踞、白眼にして世に對せしには餘りに細心なり、好て酒を飲む可らず、固辭しかたくとも微醉にして止めよ、と戒めたり。さらは、彼は頭圓く剃こはちて、身に纏ふ墨染の心ふかく行ひすまし、永く寂寞の苦の扉を閉ちて、觀心の床に寒岩死灰を學はむか、捨てはてゝ、身はなきものと思へとも、雪の降る日は、さむくこそあれ、花のちる日は、うかれこそすれ、一點の情火つひに滅し得ざる者あり。嗚呼畢竟、何に隱れむとする。

彼は世途の嶮巇を知れり、人生の無常を味へり、彼は世に交ることを能くせず、生を樂むと能はず、彼は到底當時浮華の社會に於ての繼子たらざるを得す、これ多感なる彼に於て痛き刺擊なり、彼は最早人間なる虛僞多き、浮薄なる動物に向て同感を表する能はずして、去て天地の平靜なる、永久なる、自然なる風光に向て、その慰藉を求めたり、彼は天地を友とし、山川と語れり、あらゆる同情を以て、此一途に注きぬ。その

倩年月の移りこし、拙き身の私をおもふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一たひは佛離祖室の扉に入らむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計さへなれは、終に無能無才にして此一筋につなかる、

といへるもこれなり、彼は終に自然界の風光の裡にかくれて、其美を歌ふの詩人となりぬ、其軀は俗界に其心は天上に。

寛文十二年九月、宗房は東武に下て、遠く浪華の宗因に對して、新たに詩壇に一旗幟を翻しぬ。時に元和偃武よりまさに六十年、家康か政畧的として、文物の興隆を謀りしの效驗、漸く現はれ、天下は泰平に、文化も殆むと其極盛に達しぬ、されとも文化の極盛に達したるときは、風俗漸く浮華に傾ける時なり、今や天正慶長の武骨の風、また見る可らず、花見る人の長刀をさへ訝かる華奢の風は、人心を腐敗せしめて、一時の趣味を艶靡卑猥に導きしは疑ふ可らず、彼の宗因が檀林の一派が、天下を風靡せしも實に、當時の好尙に適合したりしに由れはあり、然れとも詩神は、永く其の美天地を塵俗兒の蹂躙に任す者に非す、宗房は其天職を自覺せり、進むて此汚風を一掃し去らむとを期せり。

然れども、芭蕉も其初年に在ては、當時の風潮に卷き込まれて、談林の風を學びたりしは、

口すべれ油月夜の時鳥、
内裡雛人形天皇の御宇とかや、

等の句を以ても證すべきなり、此を以て彼の宗因は

頓て見よ棒くらはせむそばの花、
郭公いかに鬼神もたしかにきけ、

等の句に比するに、其輕快に於て、其豪放に於て、たしかに一籌を輸する者なり、されども天才者は竟に他人の摸倣者たるとを以て甘ずる者に非ず、其内必ずや自ら負む所ありて、能く自からを知り、また能く其自らなる所に向て進むなり。

宗因は才思煥發語々皆滑稽を弄し詼諧を縱まゝにして傍若無人、芭蕉は即ち不然、沈重誠意寧靜自ら守り恬澹自ら居る者あり、芭蕉は世の中を寂しき方より觀察し、宗因は樂しき方より觀る、寂しきを寂しとみて樂む者は芭蕉あり、れもしろきを面白しとみて浮かるゝ者は宗因なり、其性質の相違如此なれば其句に現るゝ所もつゐに相異ならざるを得ず、

他門の句は彩色の如し、我門の句は墨繪の如くすべし、折にふれては彩色のなきにしもあらず、心他門にかはりて、寂寞を第一とす、

蓋し檀林の句は其句躰の巧に力を費し、强て滑稽を求め奇を衒ひたるの痕ありて一誦すれば頗ぶる奇峭を感ずるも、再三誦するに及むでは索然として興味の求むべき者なし、芭蕉の句は反之、再三誦にして蠟を嚼むが如き者も咀嚼漸く久ふして、味彌々多く、閉目澄心味はふと彌々深くして、宛然として光景の眼前に浮び出るを覺ゆ。隨齋諧話に曰ふ、

芭蕉の句の中、初心には聞き得ざる者少からず、是にさま〳〵の論辯を設けて、解なす者あれども、多く其意に歸當せず、唯自から勤めて深く味ひぬれば、多年の後、自然に豁然として眼の開くる時あり、

大詩人の詩、玲瓏透徹理路に涉らず、言筌に落ちず、唯味ふ可くして辨ず可らず、會す可くして說く可らざる所以の者は、其自然なるが爲なり、自然なりとは何ぞ、大詩人の天地の美に對するや、全く其一身を以てその神來の裡に沒了す。夫れ欲する所あるが故に念ふことあり、念あるが故に識あり、識あるが故に我あり、我あるが故に萬境我が爲めに現はる、我が爲めに現はるゝの萬境なるが故に、此萬境は吾意志の影像なり、

取舍揀擇、胸中に存して見解を生ずるが故に、萬境に於て違順憎愛生ず、違順憎愛生するが故に、計較擬議あり、自から計度し、自ら較量して、可憐生寛平の大道に獨り自ら忙亂す。若し萬有を齊一に觀、平等に觀るを得ば、彼此融泯して常に自ら虛寂ならむ、萬有を齊觀せむには、先づ意志の葛藤を斷たざる可らず、能く意志の葛藤を斷てば、六欲動かず、五官各其職を忘れ、忘然として我を失し、嗒然として偶を喪はむ、我を失し偶を喪はゞ、萬境差別なし、差別なきが故に不異、不異なるが故に不動、常光現前して萬境一如、到る處淨躰に、露堂々に、八萬の塵勞一切拂除し盡さて、取捨なく、憎愛なく、擧非なく、得失なからむ、美は何人をも能く一時此境界に達せしむ（人が美感を有する限りは）れども、唯詩人に別才有りといふは、此直覺的の觀相に由りて、よく意志の金剛圈を超出し、而してその無念無欲の狀態を或時の間之を保續し、或は想像の力によりて、其狀態を記憶中より喚起して、其ありのまゝの觀相を、ありのまゝに語り得るにあり、則ち大詩人は、凡ての人の前に露呈されなから、何人も視得ざる "The open secret." の鍵を專有する者なり、觀面によく其秘密に接するを得るが故に、其語る所は毫も巧みを加へざるの自然なり、自然なるが故に見解理屈の跡の尋ぬべき者なければ、其詩を味はむには、少く共、詩人と同樣の觀相をなし得る狀態な

らざる可らず、宋の嚴羽が、詩を以て禪に比して、禪道惟在二妙悟一、詩道亦在二妙悟一と云、看レ詩須レ着二金剛眼睛一と云るも、此意に外ならず、芭蕉の詩が禪の修養に藉る所の者あるも茲に存し、其餘韻嫋々彌々味うて彌々味ある所以も亦茲にあり、されは其語に

此身天地と配合し、乾坤の變は風雅の種なり、靜なる者は不變の姿なり、動る者は變なり、時としてとめされはとゝまらす、止るといふは見とめ聞とむるなり、飛花落葉の散みたるゝも、其中にして見とめ聞とめされはおさまるとなし、其活きたる物たに消て跡なし、又句作りに、物の見へたる光りいまた消さる中にいひとむへし、又趣向を、句のふりにふり出すと云ふとあり、是其境に入るものゝ、さめさる内に取て、姿を究るなり、句作りに、なるとするとあり、内を常に勉めて物に應すれは、其心の色句となる、内を常に勉めさる者はならざるが故に私意にかけてする也。

といへるは、無念無心にして天地の風光に對するか故に、其間に些の見解を挾むとかければ、物現はるれば、直ちに其まゝに之に應するとの事なるべし。又『句と身と一枚に成て案すべし』と敎へたるも、士芳が

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞の折しも、私意を離れよとといふ事

あり、此習へと云處を、れのかまゝにとりて、終に習はさるなり、習といふは、物に入て其微にあらはれて情感するや句となる處なり、たとへ物あらはに云出ても、其物より自然に出る情に非らされば、物と我と二つに成て、其情誠ならす、私意のなす作意なり、

と說のはしたるも、亦仝一義なるのみ。

宗房既に東都に來りて、深川に庵を結ひつ、一株の芭蕉に、ふりそゝぐ秋の雨の寂しきを味うて、ものをもいはす、ひとり酒のみて、心にとひ、心に語り、庵の戸おしあけて、雪をながめ、又は盃を取て、筆をそめ、筆をすつる、閑適の日月を送りぬ、その自ら桃靑と號し又芭蕉と呼ひそめしも、此程の事にして、その禪に佛頂に參したるも亦此時なりき。

蒲團の上に趺跏趺坐して公案三昧に入るのみが禪に非らず、常住臥坐皆禪なり、森羅萬象皆公案なり、芭蕉は天地を以て其公案とし行脚を以て其修道としたりき、彼は天地の美と融合して現實を脫せむとせり、意との羈絆を脫却せむとせり、是によりて無欲無念想の大解脫門に入らむとせり、而して彼は行脚によりて、なるべく市塵の擾々を逃れて、なるべく覿面に自然に接せむとせり、されは腰に寸鐵を帶ひす、襟に一嚢

を掛けて、一枝の枯枝をその瘦脚に代へて、馬駕にも乘るとなく、樹下石上を、暖めたる莚として、あやしき貧家の宿りをもいとはず、寒暑に曝され、風雪に惱けつり、險阻を涉り、瘴癘を侵して、ある時は晴れて笠輕く、或時は、時雨れて袂重し、或は心さびしき秋の暮に死もせぬ旅寐の果を歎ち、或は蓑着て草鞋はきながら暮れ行く年を送り、或は野さらしを心に風を身にしめて門出する時もあれは、或は夏衣虱をとり盡さで旅歸する折もあり、或時は灯もなき破家に、終夜もる雨に夢を結はぬ事もあれは、或時は病起りて、覺束なくも馬に身をまかせて、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なむも天の命なりと慰むる折もあり。其辛慘刻苦、彼の學道の衲子が勇猛の信心を憤發し、不退の道情を激起し、牙關を咬定し、双眼睛を瞪開して、寢食ともに廢して、捨身淸苦するに劣るへくもあらず。『東海道の一筋も知らぬ人、風雅に覺束なし』といへるはカーライルが几席の間に兀々たる者は決して有價なる詩を爲る能はずといへるにも似て、その自から天地の美を探らむとて、如何斗り行脚に其身心を勞せしかを想ふに足るなり。貞享三年に

古池や蛙飛込む水の音

の一句を得たる時は、彼の因緣正に熟して、大悟の眼の開けたる時なり、緣を忘れ、

境を忘れ、無念無想にして、應ずる者を躰となしたる境界なり。その一生の俳風、此一句に定りたる事は、其臨終の終に

古池や蛙飛込む水の音、此句に我一風を興せしよりはじめて辭世なり、

と、いへるを以てするも、芭蕉が詩の本領は禪にありしといふを得べし。丈草嘗て幻住庵にて、芭蕉と相語ると終日、正秀側にありて解せず、歸て丈草に問ふ、丈草云ふ我問ふ所は言語の俳諧に非ず、禪の俳諧なり、はせをは實に當世の達磨なりと、夫れ雪舟が畫に於ける、利久が茶に於ける、或は澤庵が不動智を以て劍道を說ける、西行が歌道を偏へに禪定修行の道なりといへる、技の奧秘いづれか禪に非らざりける、

西行の和歌に於ける、宗祇の連歌にれける、雪舟の繪に於ける、利久の茶に於ける、其貫通する所は一なり、

と芭蕉のいへるもこれをいへるなり、自ら其境に到る者に非らざれば、道破し得ざるの語也。

此古池の一句ゐ眼を開きてより、芭蕉が眞面目はたしかに現はれたり、彼は遂に摸擬者を以て終るべきの材に非ず、『假にも古人の涎をなむる事勿れ、此道に古人なし』と絕叫して、新たに正風の新福音を唱へ出しぬ。彼は檀林の一時流行の風を卑しとして、

千載下易の躰を見とめたり、それ一時の風潮に乘せむと欲してたくみを弄する者は、時の古今により、人情の異なるに從て盛衰あれども、大詩人が直覺に會得せる物の極致は、念想意志を離れたる、そのまゝの躰にして、もとより、眞僞是非なければ、時と處とによりて、變化を生ずべくもあらず、去來が

能く不易を知人は往として推遷らずといふとなし、たゞ〳〵一時の流行に秀たるものは、只己が口質の時にあふのみにて、他日流行の場に至りて一歩も歩むと能はず、

といへるは是なり。嗚呼芭蕉歿して今に二百歲、其流風、時に盛衰を免れずと雖ども、綿々として今に絕にず、俳諧を言へば必ず芭蕉を稱する者、豈に偶然ならむや、今の人芭蕉をいへば必ず平民文學の祖と稱す、殊に知らず、其形に於てこそ俗談平話の平民的なれ、其想の高きに至ては決して擾々流俗の徒の窺ふを許さゞるの所あり、されば

俳諧を中人以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覺たる故なり、俗談平話を正さむが爲めなり、拙さとばかり云を、俳諧と覺たるは、淺ましき事なり、俳諧は萬葉集の心なり、

ともいへり、予は俳諧は平民文學と曉々する者に云はむ、禪に於て何人も佛性を具足

せりといへるの意味に於て其平民的たりといふを許さむと、今や俳諧下俗の手に落ちて、風雅地を拂うて空し、芭蕉已に之を百歳の前に洞見して、

歎かはしきは俳諧の俚言ある故に、文盲愚昧の者はやく口なれて、自己に俳諧を知れりとれもふ者の多く出來侍らむ、

と歎せり、再び芭蕉を地下に喚起し來らば、彼はつひに何とか言はむ。

嗚呼、芭蕉世をすて、自然に歸し、俗を脱して風雅に遊べり、一筇飄々身を雲水のさだめなきに任して、心を天地の美に馳せたる所、西行に似たり、然れども亦其沈鬱重厚、風骨蒼然たる所、子美に似たる者あり、莊周が道味を得て莊周が豁達なく、樂天が平淡を慕うて樂天が卑凡なし、身を俗界に寄せて、神を天上に遊ばしめ、竟に喧囂を遯れ去る能はざりしも、常に孤寂を樂み、清貧を甘じて芳野行脚に二歩の路用に困すれども、矯飾を悅ばざれば、北國の行脚に金城の萬子が一兩の餞を受けず、茅根を咬むて百事をなすの清苦を守て、席上の饗應を制して白露の寂しさ味を忘るゝなと戒め、せり賣の十錢それにも似たる輕き生涯を送りて、蜘蛛の網の風のまに〳〵と、足の止る所を思ふ、天地を逆旅とみて、浮無雲住の境界を安しとし、道に入てより二十餘年、暫しも東西の漂泊を止めず、終に元祿七年十月十二日病むで浪華の客舍に死するをりも、

旅に病で夢を枯野をかけ廻る

と辭世の一句にも猶漂泊捨身の一念見ゐて尊としや。

稿を草し了る、客あり嘲て曰く、子も亦子か所謂主觀的に芭蕉を觀たるのみにして無念無想にその眞相を透視し得たる者に非ず、予曰く唯々。

此稿去年十一月に成る、故に文中茲夏及芭蕉死して二百歳の語あり、今敢て改めず讀者諒焉、甲午二月。

俳論家としての渡邊支考

俊鶻天を劈いてのぼる、羈の以て繫くべきに非さるなり。神駒血を汗して騁す、豈に櫪に伏することをせんや。古より天才の士の、往々にして卓落不羈、尋常規矩の外に馳する洵に所以あり矣。李白酒を被て長安市中に眠り、天子喚來れとも船に上らす、芭蕉仕を捨て、夜逃れ、一生を一簑一笠雲水の行脚に終へ、ハイネ墳墓の地を去て巴里に來る、病に轗軻の中に死して憾みす、此數者の然る所以のもの、渠等は實に拘々たる羈束を欲せされはなり。不羈の精神、吾人は之を以て天才者に於ける一の通有性とす

るに難からず。

人或は支考の自尊傲岸を嫌ふ、吾人は寧ろ是によりて支考の天才たるを知る、渠か學は儒佛老をこのね、彼か識は千古を空うす、彼か眼よりして當時芭蕉三千の弟子をみる、實に蠢々たる愚衆のみ、句に巧みなると彼に超ゆるもの或はこれあらむ、德に高きこと彼に勝るもの或はこれあらむ、然れとも氣魄豪宕、識見卓邁彼に似たるもの何そ一人あらむや、『蓮の葉に小便すれはお舍利かな』と放笑して佛門を去りたる彼か不羈の氣象、何そ此等瑣々たる儕輩に伍するを屑しとせんや、彼か縱横に其筆鋒を揮て儕輩を罵倒したる怪しむに足らさる也、彼豈に漫りに罵ることを欲するに非す、その爲す所を見る、愍笑を禁する能はさりしあり、堂々たる大人國の人をして眇然たる侏儒の爲す所を見せしむ、その蠢々蠕々豈に一笑に値せさらんや、かの口を極めてフイヒテを罵り、ヘーゲルを罵れるショーペンハウアーを見すや、かれ豈に唯自らを高うせんが爲めに他を罵れるならんや、彼は唯他の瑣々たるをみて罵るを禁する能はさりしのみ。試みに支考が十論、續五論、葛の松原等を披き來れよ。字々句々所謂風霜を挾めるの文、一個の俳諧をかり來て自己が胸中の鬱勃を傾倒し來る、之を儒、佛、老三教に得て、而して三教の外に出て、三教をとり來てこれを自己の獨創に融和して化鐵點金、

堂々たる大見識大文章を爲し來る、一部の論語、八千の經卷、老や莊や、悉く來て渠か立論の注脚と爲る、而してその孔子を論し、釋迦を論し、老莊を論する、別に一副の心眼を具ゐて俗を駭かすに足るものあり。

今の佛教は世法の用にたゝす、四民をそこなひ五倫をやふらむ、さるは理不盡の坊主衆が釋迦の眞假を知らさる故に、今の儒法は實學に打ち入て、世法の變にさばきかたし、さるは無風雅の注者達か孔子の虛實を知らさる故に、今の老家は世界をさけ過て、虛實に今日の禮を失へり、さるは書物の曠莫を學びて老子の道德を知らざる故にて、三道の理を能く知りて、三道の非をあらためは、それを聖賢の論といふべし、本より我門の俳諧師は、儒にも佛にもはれさるより、釋迦孔子の非を見出して言語の褒貶に游はむとすれは、たとひ聖經賢典といふとも古風に卑下の詞をつくろはす、れり〳〵は助言をいふ合點なり。

と放言し更にまた

儒書も、佛經も、註する人あれは、講する人あれとも、釋迦は何故にかくしめし、孔子は何故にかくをしへ給ふと、其問をとかめ、其答をかむかへて、其日其人の用を見とゝけされは、或は故事古語に紙筆を費し、或は何偏の何冠のと文字穿鑿に日を

寡して、たゞ〳〵字外の味をいふ時は、我好の聖人をこしらへて、我胸の論語を注し、我胸の法華を講す、

と痛罵す、才鋭に識高し、洵に凡庸迂儒者、僻緇衣の倫に非さるなり。

顧みて今日をみる、今の書を讀む者、書を讀むと多からさるに非す、事を識ると多からさるに非す、而かも渠等の書を讀むは肉眼之を讀むのみ、彼等の事を知るは皮相をこれ知るのみ、誰れか支考か此識見あり、此眼光あるものそ、いふとを見すや、『釋迦孔子の非を見出して、言語の褒貶に遊はんとすれは、たとひ聖經賢典といふとも、古風に卑下の詞をつくろはす』と、これ胸中先つ獨創の見地ありて、所謂六經を以て注脚とする底の一大見識あるに非らさるよりは安むそ之を得むや、折衷といひ、歴史的研究といふ、其名や美なり、其言やよし、而かも書を讀むに紙背に徹するの眼光なけれは、徒らに剪裁繕縫、思想の柳原物たるを免れさるなり、外見徒らに美なるも、檻樓のツギハギに過ぎさるのみ。

傍題姑措、吾人は今支考か俳をかりて說き來れる議論を一々に解剖し來らんとするに非す、唯其審美的觀察の如何に精緻に、如何に奇警なるかを視て、俳論家としての彼が手腕を窺はんとするのみ。

借問す俳諧とは何そ、風雅是のみ、風雅に遊ふといふ、何の理、何の目的ありてか之を爲す、支考は則ち應へていふ、無用の用のみと、嗚呼無用の用、無用の用、此一言俗界塵中の人の解する所に非さるなり。

吾人は屢々世俗の人の、文學の何の用たるを問ふとを耳にしたり、實に彼等俗中の人、天下無用の用なるものあるとを知らさるなり。

それ美なるものは、或目的を有し、此目的を達すへき方法たるものに非す、語を換へて之を言へは、美なるものは世俗百般の物と異なりて、實利的實用的の物に非す、抑も吾人の一擧手一投足、悉く或目的のためにせられさるとなきなり、即ち是非利害の動搖によりて動かさるゝに非さるはなきなり、是非利害の動搖によりて動かさるものは、其事以外にその目的を有して、其事は其目的に對して利害是非の關係あるものなり、而して美感なるものはひとり之に異なり、吾人は美を感する時に當て別にためにする所あるに非す、美感なるものは美感そのものか即ち目的にして、これによりて或利害是非の念慮を動かすべきものに非す、ショーペンハウアー氏の所謂純覺(ライネ、アンシャウング)ある者にして、吾人は寧ろ之を意志の爲めに制せられさる純粹の情感といはんとす、ショッペンハウアー氏は意志を以て根本的なりとし、意志不動の時を指して之を純覺といへ

とも、吾人は意志を以て第二位とし、純粹の情感あるもの之に先つて存するを信すれはなり。

既に美感は純粹の情感にして、意志の動像以外に立つものなりといふ、然らは美感はまた智能的思辯分別の外に立たさる可らす、蓋し智能の思辯分別は必す意志の發動に伴ひ、或目的を有する心理的活動とは決して相離るゝ能はさるの關係を有するものたり、されは美を感得せんか爲めには、吾人は智能的の心理活動に訴ふるとをさけて、之を直覺的に感せさる可からす、而して吾人の感官中にありて、視は直覺的なれとも、聽は推理的即ち智能的なり、視は頭腦の積極的作用を起すとなくしてそのものゝみにて其職をなすを得れとも、聽は是を爲すと共に腦の活動之に伴ふを免るゝ能はす、即ち視は受動的にして之を得れとも、聽は必す腦の自動的積極作用を惹起す、故に目は直覺し得れとも、耳は區別是非の智能的推理的作用を爲すとを免れす、自動的なるか故に耳官は意志の活動を促し、受動的なるか故に眼官は意志を離れて立つを得、故に吾人の美を感するや、眼よりし易く、耳よりし難し、されは人に美感を興さしめんには寧ろ是を目に訴ふへくして、耳に訴ふ可からす、支考か

俳諧は目に見て耳に聞かすとは我家の發明なり、耳は物を隔てゝきけは、我情をはこひて推するか故に、其理か此理かと思ひ過して、我は明に聞ゆると思へと、人の耳へはとゝかぬなり、例の鹽梅とは此いひなり、目はよし我も人も見れは、沙彌も長老も目は二つありて、花を鼻とも取ちかへす。

と云へる、當に之をいへるなるべき而已。即ち視は純粹の感覺となりて現はれたるものそのまゝにみるか故に、花と鼻とも取ちかへすといへとも、聽は推理區別のものなれは、我情をはこひて推するを免れす、故に支考は斷して云ふ、『俳諧は目に見て耳に聞かすとは我家の發明なりと、』而れともこれ豈にたゞ俳諧にとゞまらんや、一切の詩、また目に見て耳に聽かさらんことを要す。

蓋し詩の主とする所は、詩人の直覺的に感得したる美を、言語の媒介によりて之を讀む者の頭腦に印象し、之をして想像力によりて、其美を再現せしめ、これに依りて詩人の直覺的に感得したる美を間接にこれに感得せしむるにあり、されは詩に用ゆべき言語は、最も容易に、そか詩人か感得したる美の觀念を讀む者に印象せしむるに足るへきものたるを要す、既に然り、詩人は其用ゆる言語の直覺的、無意志作用の眼覺に訴ふるものたるをつとめて、我情をはこひて、理を推す理窟的の聽覺に訴ふるをさけさるべからす。

耳に聞くは、支考か所謂事の情、(情は情由の情なりコトワケあり情感の情に非す)にして、目に見るはその所謂物の姿なり。されは詩人の詩に入るべき語は事の情をことはるものに非すして、物の姿を現はすものなるを要す、何をか事の情をことはるの語とし、何をか物の姿を現はすの語とする、試みに支考か擧せる例證をかりて之をいはむ乎、等しく流水の清徹をいへば、

ちくま川春行水は澄にけり

さえて幾日の峯の白雪

の澄にけりの語は事の情なり、されとも

水青し消ねて幾日の春の雪

の青しは物の姿なり、姿なるか故に此は讀者の眼に入てそのまゝにその光景を現前せしめ、情なるか故に彼は耳に入て推理區別のものとなり、姿を現すものは直ちに之を讀むものゝ純感に訴ふるか故に、讀者は直ちに其語か表せる美の觀念を感受するを得れとも情をことわれるものは讀む者の智能に訴ふるか故に、是非分別の念を喚起して直下に美の觀念を運ふこと難し。蓋し純粹の情感は能く意志繫縛の外に立とも、智能は必す意志願使の下に作用するものたれは、美を感得せむには些毫の推理的智能をも

其間に混するを容す可からす、支考か

思ふも、見るも心なから、そこを一念の前後にて、千里を隔つる大事なりとそ

といへる、こゝに所謂思ふは智能的推理にして、見るとは純粹の情感をいへるものにして、智能情感共に心理的活動たるも、一は直ちに意志の發動を促すと、一はよく意志を離れて存し得るとにより、二者の美感の上に天壤の差を來たすを說けるに外ならさるなり。

此故に吾翁は、耳をもて俳諧を聞く可らす、目もて俳諧を見るべしといへる、耳目の姿情のつかひ者にして、彼には明暗のさかひあれはなり。

實にや、芭蕉かその俳諧に於て眼を尙むて耳を卑めるはその俳風か從來を蹋倒して其上に立ちたる所以にして、彼か古風の俳諧をして、貞享三年『古池や』の一吟に大悟の眼を開き、此道に古人なしと絕叫して、新たに正風の一派を興せる實に此にあり。所謂

古風は耳に其情を聞て、言語の上の姿をとゝのへす、今樣は目に其姿を見て、言語の外の情を含む、

なるもの是にして、抑も從來流行の俳諧なるものは

貞德より宗因の比までは、附合はすへて情をはこへる故に、全く連歌にかはらねは、一句〳〵に誹言の論あり、殊に宗因は發句も、附句も、皆々詞の拍子のみにして、意に學ふへき道なけれは、之を輕口とも檀林はなしともいひて、其時に風雅の心を失ふ。

なるものにして、單に言語の理窟拍子に止まり、一時の機智を弄せるものにして、所謂耳に其情をきくもの。蕉門の俳風は則ち之に異なり、所謂言語上に姿をとゝのへて目に其姿を見るもの、

今や我門の俳諧には、俳諧の心といふものはあれと、俳諧の詞といふものはなし、といふ。詞なきにあらす、然れとも其詞や理を表せすして、直に姿を表す、詞たりといへとも耳にきかすして眼にみる、詞なしといふも便ち可なり、さらは何をか言語上の姿といひ、何をか言語上の機智といふ。

言語上の姿とは、即ち其言語を一の具体的標章として之を讀むものをして、宛然として、其表彰せられたる姿の眼界に浮み來るを覺ゑしむるもの是、言語上の機智とは詞のかゝり、いひかけ、拍子等に巧を弄したるものにして、其訴ふる處は耳にあり、されは言語の機智を弄するものは、耳に訴へて理窟を離るゝ能はすと雖、其姿といふものは、之を直ちに目に訴へて、其言語なるものは唯讀者をして其姿を其眼前に再現せしむへき一の徽號に過きされは、讀者は其言語以外に無量の情味ありて存するを覺ゑむ、假令へは月出て〻一江の煙波縹緲たるか如けんのみ。

試みに芭蕉以前の俳風と、蕉門の俳風とを兩々相對較し來れ。二者の差違の何の處に存するかは、瞭々として自ら明ならむ、支考はかの中古の俳風を罵て云ふ

中古の俳諧は、双六な世の歳旦といへは、目出たしと詞をむすひ、五畿内の雪にはつめた飯とつゝけたるを、これさへ情のみにして風なきを、風姿は夢にたも見さるならむ。

然り然り、此の如く双六といひ、歳旦といへる語意に着して双六の賽目の出てたるに、歳旦の祝すへきをいひかけたる、或は五畿内を五器椀に響かして、五畿内の雪を五器椀中の冷飯に見做したる、興趣索然として所謂風姿なるもの何くにか存せんや。

蕉門の俳風は之に異なり、風姿を先にして情を後にす、故に讀む者の情感に訴へて智能に訴へす、故に

今の俳諧といふは、古池の蛙に姿を見さためて、情は全くなきに似たれとも、さひしき風情をその中に含める、風雅の餘情とは此いひ也。

なるものにして、智能的、推理的のものゝ如く理窟ならざるか故に、餘情嫋々、曲絶にて碧天高く、餘音秋草に散するか如きものあり。

何か故に情をいふものは沒趣にして、姿をいふものは餘韻を存する。

之れ事の情をいふものは智能に訴へて推理するものなり、是非し分別す、決定して遺漏あからんを要す、何の處にか興趣を着くるの閑地あらんや、物の姿をいふものは、理窟を離れて情感に訴ふ、故に推理的のものゝ如く是非分別の決着あるなし、故に能く綽々として讀む者の想像を其間に游はしむるを得。

既に決着なし、故に物の姿をいふものは其詞必すしも仔細あるを要せす、既に決定あり、故に事の情をいふものは其詞必す遺漏なきを欲す。故に曰く

されはむかしの俳諧は、始、中、終の三をもて鼎の足の如く尻をすへたれは、例の俗にして雅ならす、今の俳諧は始、終の二をもて中に風雅の情を殘せり。

と、即ち芭蕉以前の俳風にありては『五幾内に降る白雪やつめた飯』といへるか如く、五幾内の語に五器椀をいひかけたるより、白雪に飯の理ありて、つひに冷飯と一体の理をつめたるは、耳にきくべき言語上の作意を弄したるか故に、事の情をことわり、從て詞の遺漏なからんように三段論法樣の始中終の三段を用ゆるの已むを得されと

も『古池や蛙飛込む水の音』といへは、眼前の光景そのまゝをいへるなれば、單に直覺的の情感のみに訴へて、推理的智能を假るを要せねは、唯始と終との段をそなふ。

五幾内に、（始）降る白雪や、（中）つめた飯（終）

古池や、（始）蛙とひこむ水のおと（終）

既に三段なり、故に事理言ひ盡して餘蘊なし。唯二段なり、既に三段の推理的方法の一を省されは、こゝに是非區別の決定なく、從て讀む者は其想像を自在に遊はしむへき餘地を此裡に有す。蓋し推理の力は區別のものたり、此は此、彼は彼と決定するか故に、かの天外奇想を降し來るの想像力と相並立するを得さるものなり。

既に以上論し來るか如く、詩人い純粹の情感に訴ふる樣に其觀念を表出せさる可らすとせは、詩人自らも亦宇宙の美に對して、純粹情感的の直覺によりて之を感得するなかる可からす。何をか無意志にして宇宙に對するといふ、蓋し既にいへるか如く、美は利害得失の性質を有せさるものたるか故に、覿面に之を感得せんと欲せは、先つ自らの取捨揀擇の意志を泯はさゝる可からす、もし自己の胸中猶ほ取捨揀擇の念を存せん乎、彼は宇宙に對して唯實利的、世俗的の宇宙をみむのみ、宇宙の万象は、皆彼に對して

利害得失相關はるの万象たらむのみ、人此の如くならは、『天地何れの地にか風雅の道遙地を見む、青山白水彼に對してたゞ沒趣落寞の土封たり流水たらむのみ。唯詩人よく意志の繫縛を脱して純粹情感の天に游ふ、胸中一毫の取捨揀擇なく、一点の是非分別なし、意志既に泯ふ、意志の隷屬たる智も亦泯ひん、こゝに於て乎、宇宙に對し、万境に對し、その今の眼界に、その今の姿のまゝを感するのみ、それ意志あるか故に取捨揀擇の發動あり、智能あるか故に眞僞是非の分別あり、もしそれ意志なく、智能なく、純粹の情感のみとならは、宇宙如々万境如々、眞僞もなく、是非もなく、取捨もなく、撰擇もなく、直下に物そのまゝを感得せん、此時に當て既に自動的の我なるものあるなり、我は唯感受するのみ、六欲内に動かねは五官は各其職を忘れ、嗒然として我、我を失し、恍惚として天地の美中に融化せられん、此時之を詩人が神來にうたるゝとはいふあり。

故に詩人の神來に接せんとする、必す無心無念の無我なるとを要す、無我の境界に遊ふことを得て、初めて、たゞ今の眼界に、たゞ今の姿そのまゝに感ずるを得べし。無我とは我なきに非さるなり、自動的の我なきなり、我執なきなり、我執なきの我なり、無心といひ、無念といふ、心なきにあらさるなり、私理なきなり、私意なきなり、既

に私意なく、私理なく、我執の我なく、自動の我なし、於是乎、其物に對するや自然なり、既に自然なり、故に万境に應して澁滯せす、玲瓏自在、變通無方、莊子は之を逍遙といひ、支考は之を『虛實の變に游ふ』とも、『虛に居て實を行ふ』ともいふ。

そも〳〵虛實の變といふは、天地自然の道理にして、儒、釋、老の三道より、揚、墨、孫、吳はましていはす、風雅に詩、歌、畫、俳の道もすへて此變にあつからすといふ物なし、是を知るものを聖人といひ、是を知らさるものを愚人といふ、知ていはさるも道の建派にして、是をいふものは禪法と莊老なり。それを我家の俳諧には、禪家莊門の意地を塩梅して、諷諫の和をむねとすれば、變は世法のつねにして、それか先後を去るにはしかず。

支考虛實の二字を道の建派として、儒佛老莊一切の教相を判釋し畢る。彼の烱眼炬の如き處を見すや。

既に之を名つけて虛實といふ、虛あり、實あり、或は恐る、庸者、虛を以て實に對するの虛となし、實を以て虛に對するの實となし、虛實の名に執して變を知らす、所謂言端の虛實に尻をすへて、實はよき物と思ひ、虛はあしき物なりと信して、應無所住の優游自在を得さらんことを、故に支考は更に一歩を進めて、

虛實の虛實といふことを、俳諧の道の一大事と知るべしと喝破す、所謂虛實の虛實とは、虛實の虛にも執せず、實にも執せず、更に虛實を虛實として、其虛實の變に游へとなり。芭蕉か『我家の俳諧は無分別にあり』といへるものこれの謂にして、胸に一点の我理、一毫の私意なく緣を忘れ、境を忘れ、無念無想にして應するものを体となしたる自在の逍遙地、風雅茲にあり、俳諧此にあり、倘夫れ我執の實をとめて、私意を離るゝ能はされは、虛實不自在の人と爲り、其詩は理路に渉り、言筌に落ちてたゞ今の眼界にたゞ今の姿そのまゝを、いひ出すと難からむ。

故翁はたゞ今の眼現にたゝ今の姿浮ひて、それをそのまゝに作れる故に、明暮の咄の古からぬ如く、其句は日に新たなり、我輩の目をふたけは、唐高麗の書物にれほへたる詩の体の、歌のさまと、むかしよりいひ傳へし上手の發句の邪摩になりて、一字のたゝ今の姿は見へすゝかくても人のせかみ立れは、詞の切屑を取あつめて、上手の細工は論に及はさらん。

語を寄す、天下の利口才子、汝か臟腑を吐き盡くし、汝か腦漿を空盡し、汝が才と智とをすて盡くし、汝か衒ふ所の博識を泯盡し、百尺險崖汝か身を掀翻し來れ、而る後はじめて詩をいふへきのみ、詩は才に非す　智に非す、將た識に非す、將たゝ今の眼界に、たゝ今の姿浮ひて、之れをそのまゝに作るにあるのみ。

俳諧の門に入るものは、第一に意の鹽梅をはなれ、第二に耳の學問をすつべし、

嗚呼詩人、純粹の情感となりて無意志の境界に游ふにあらされは以て神來に接し難く、以て宇宙の美に接し難し、意志と智能との世界は彼擾々たる名利の地是のみ、美妙の天高く塵俗の外にあり、身を俗界によせて日常利害の間に齷齪するもの、彼等何をかよくせむや、彼等何をかよくせむや。

之を要するに、支考か俳論、禪に入て禪に出で、儒佛老の三道を說きて、彼か滿腔の見地を吐露し來る、その云ふを見すや。

いざさらは、我道は釋氏の無爲の恩愛たもすてす、老子の虛無の高擧をもたのまし、孔門に此世法あれは、論語の言行を鑑にして、文章はその虛實にならひ、敎戒はその表裏を察せは、誰れか公道にあらすといはむ、されと柳下惠を學ふ人の、其跡を師とせさるは、道に家々の意地ならむとそ、

また十論に云はすや、

十論は儒佛の二用より、遠く老敎の方外を知り、近く神道の理外を知りて、聖賢の意地にまとはねは言語自在の媒とはいふべし。

實にや儒といはす、佛といはす、老といはす、死といはす、一切の教旨をもち來て、之を自己の藥籠中に籠絡し俳を假りて其滿肚の鬱勃を吐き來る所、其才其識洵に是れ舊門下唯一の談理家、彼か自ら稱して

東花坊は師命を忘れす、難波の遺狀を笈にして、古今に俳諧の名を說破して、天下の舌頭を座斷せんとす。

といへるもの、豈誇揚の言ならんや、豈に誇揚の言ならんや。

嗚呼東花坊逝て茲に三百年近し、俳諧今また盛に行る、擾々紛々末節に拘し、枝葉を爭ふ、誰れか今日に出て、天下の舌頭を座斷するものそ。噫。（明治廿九年三月）

歸休庵に答ふ

（俳論家としての支考の評に就て）

芭蕉が夏爐冬扇といひたるに、支考が俳諧を無用の用といひたればとて爲之支考が俳論家たるに何の害かある。芭蕉が無分別に取ることありたるに、支考が俳諧は耳の情を卑み目の姿を尊むといひたればとて、その談理家たるに何の妨かある。吾人は未だ支考が語の悉く前人未道なることをいひたることあし、否寧ろ支考が蕉翁の俳に於ける見地を祖述したるものとせり。即ち蕉翁か語にすがり、燃犀の眼光を以て審美根柢の

典則を觀破したるものなりとせり。支考は芭蕉が俳諧の理の側を得て更に之を敷衍祖述したるものなり。蓋し芭蕉は純然たる詩人にして談理家にあらず、故に常に具象的なり、綜合的なり。支考は寧ろ談理家なり、故に分析的なり抽象的なり、それ詩人哲人は直覺的に或見地を觀取す、故にその之をいふや具象的なり、綜合的あり故に理窟ならず、理窟ならず故にその之をいふや簡あり、而して意を盡くす。談理家は之に異あり、直觀する能はずして思索す、故に理路をたどり言筌に落つ、故に仔細あり、故に委曲なり。詩人哲人は直に天に戻る、談理家は階を躡み磴を拾うて昇る。孔子一字、の仁朱子之を談じて數萬言を費す。辯を費すと此の如く多き所以の者は唯直覺するとと思索するとの別あるによる。然れども直觀せるものは直覺せるもの唯よくこれに悟入すべし、冷暖自知の境のみ、唯上根の人これをよくすべきのみ。之を人に說き人に敎へんとす、輒ち談理の方途にあらざれば不可。支考は談理の法を以て芭蕉が直觀せる見地の迷を闡き微を發せんとせしものゝみ、支考の論中の語が芭蕉の既說と合せしとて何をかいたまん。こゝによりて以て支考が談理家たる所以の價値を品騭するに足らざるなり。

歸休庵はまた支考の冗漫を嫌ひ誇張を嫌ふといふ。愛憎は感情なり我の好む所必ずし

も以て人に强ゆ可らず、好惡はたゞ其人の欲するがまゝなり。然れども吾人の見を以てすれば冗漫は仔細委曲を尙ぶ、談理家に免れ得ざる所たるべし。

假令支考の文をして冗漫たらしむるも、以て支考の談理家たるに害なきなり、況んや支考の文もとより詩的の簡淨なしと雖ども、雄渾勁拔奇矯峭拔の氣溢るゝが如き、果してこれを冗漫なりといふべき歟。又之を誇張なりといふと雖も、これ寧ろ以て彼が見識卓邁をみるべきものにして、抱負は天才に伴ひ、而して抱負なるもの逸氣橫溢す。逸氣は誇張に非ず、抱負は驕慢に非ず、吾人は寧ろ支考の文を以て逸氣なりとす、誇張なりとせず、抱負ありとす。驕慢なりと信せず。

予が支考の一篇或は過賞ならむ、然れども寧ろ吾れ他の酒盃を奪つて自己の磊塊にそゝぐ底の爲めにせしもの。支考の俳論として非難ならば、寧ろこれを嶺雲の俳に對する一私見とみるも即ち可。

日本文學に於ける新光彩

日本文學の特色は和樂にあり、輕快にあり、嫻雅にあり、婉柔にあり。

東瀛の島、山秀て水淸し、不二の山八朶の芙蓉何ぞ玲瓏たる。琵琶の湖一面の明鏡何

ぞ瀲灩たる。節順に地腴たり、櫻花白雲を抹して吉野の春を罩め、紅葉唐紅を纈して立田の秋を染む。優なる哉風光、美なる哉山川、此美なる山川と優なる風光とは、その間に栖息する日本國民を靈化して、其思想を和樂に、輕快に、優美に、婉柔にしたり。吾國民は、一天雲常に密に、滿地霧常に凝る慘憺の風色を知らず、唯長へに風日秀麗の間に處る、故に英國的の沈重を欠く、沈重ならざるが故に能く忍ふ能はず、故に英國的の刻忍を有せず。既に刻忍なる能はず、故に能く泣き能く笑へとも、皮相に泣き皮相に笑ふのみ、深く韜み、深く晦にして、深く謀る能はず、故に猶太的の熱烈を欠く。吾國民は深樹鬱蒼瘴煙濕蒸の陰鬱なる風色を知らず、その天地は花常に匂ひ、松常に綠、故に印度人に似て厭世悲觀のものたる能はず。吾國民は眼はよく自然の美を觀得すれとも、天地の歸宿を釋ぬる能はず、能く感ずるの國民たれとも、沈思瞑想宇宙の秘密を闢き、眞理の奧底に觸るゝ獨逸的思索の民たる能はず。峭蠱の山、湍瀨の水、吾國民の目睹する所其景奇ならざるに非す、而れとも大陸的傀偉宏壯の風光を知らず、故に支那人的の崇重と雄大とは有する能はず。實にや吾國民の特質はその情感に富めるにありし、否寧ろ感情的たるに過く。寧ろ嬰兒の如き乎、具象を見得れとも抽象を知る能はず。哭泣すれとも心底より絞り出せるの哭泣に非す、倏ち動かされ

て忽ちにやむのみ、眞の悲酸はその知る所に非ず、また堪ゑ得る所に非ず、純潔は則ちあり、深刻は則ち無し、嬰兒乎、嬰兒乎、吾國民は實に嬰兒に似て感情に富めり。此嬰兒に似たる情感に富めるの資を以て、此優美和樂の風土の裡に養はる、其思想優美ならざる能はず、和樂ならざる能はず。輕快ならざる能はず、婉柔ならざる能はず。而して此等の思想を懷いて、三千載を挑源の仙窟に眠りて、鎖國の安きに甘れ、未た曾て世界大勢の風潮に撞觸せず。吹きすさぶ浮世の風には當りたるともなき所謂お坊チャマ育、未た人世行路の難を知らず、世海の險を知らず、何ぞ辛苦と悲酸となるものを知らむや。吾國民は實に自然（ネチユーア）の溫かき懷に抱かれて、常に和樂平易の生活を經來りたるもの。情感の資を以て優美の風土中に養はれ、而して和樂の發達をおし來る、宜なり宏大雄偉深刻悲痛の思想に欠けるは。此思想に反影せる文學の、又宜なり、和樂輕快雅潤流麗等の特色に富みて、而かも宏大雄偉深刻悲痛の筆なきを。

みよや、從來日本文學中果して眞の悲劇と稱すへきものありて存するや。從來の小說戲曲等の中所謂心中物と稱するもの若干を除きては大破裂を以て終りたるもの果して幾何かある。假令其篇中幾何の悲哀の色彩を帶ひたるものも、其團圓に至ては千篇一律、目出度し〳〵の歡聲を以て局を結べること、猶兒童の啼泣が嘻〳〵の笑聲を以てや

むと相似たるには非すや。それ悲劇の眞味を解するは深く自ら悲酸を味へるの人にして初めて得べし、蓋し悲哀の快感は同情に本つく、自ら悲酸を嘗めしもの、他の悲酸中の人物に對して同情の感油然として湧き出つ、同情には人間がその無我の倫理的大理想に向て一歩を近け得たるを感する滿足の快味を帶ふ、悲哀の快感なるものは、此同情の快感のみ。故に自ら悲酸中の人に非すむは悲劇の眞味を解す可からず、未た世海の風波に觸れしとなき嬰兒の如き吾國民、豈に眞に悲痛の快感を知らむや。吾國文學の喜劇的和樂の文字に富みて悲劇樣の趣味を欠く、實にこれに職由す。既に其思想を欠き、また其趣味を解せず、吾國に悲哀文字なきは其所のみ。

吾國もとより既に早く支那印度の思想を輸入せるありて、文學上に悲哀と崇重との分子を加へざりしに非ず。然れとも其影響は甚た大ならず、未た其根底よりして吾國特有の思想を振ふに足らずして其皮相上に些少の異彩を覺えたるのみ、蓋し吾國家を以て未た世界大勢の大渦中に投せず、故に吾國の境遇未た嘗て他に簸弄翻倒せらるゝの事なく、從て眞に悲酸の境を踐なず、依然として白金の目貫の大刀はき櫻かざして、昨日も今日もと戲れ暮らせし熙々泰平の民たりしのみ、是れ即ち支那印度の思想か深く吾國の文學中に浸潤する能はさりし所以なりとす。然れとも今の日本は昔の日本に

非す。東洋の一隅に離群索居せし日本に非ずして、世界列國の一としての日本なり。靈龜背上に安在せる蓬萊島は今や世界急潮の大渦中に投せられぬ。吾國民は最早安穩の眠を貪る能はず、世界を敵として戰ふの大覺悟を有せさる可からす。吾國の境遇は一變せり、吾國民の思想豈に依然たるを得むや、思想既に一轉す、文學豈に舊套を脫せざらむ。ペルリ來りて茲に五十年、今日に及むて吾文學新に一色彩を加へたるを見る。吾國文學は果然悲哀の調を帶ひ來れり。

西洋との交通は吾國の境遇に一大打擊を加へて、吾國民の思想は其根抵に於て震動せしめぬ。吾國の思想は一轉せさる可からさるの趨勢となりぬ。加之吾國民の好奇心に富めるや。忽にして西歐の文學に眼を注きて、其同化力に强き、其觀察の精緻、理想の雄大痛刻の致、悲惋の調を取り將ち來て吾に渾融せんとす。其思想は一轉せさる可からさるの勢にありて、而してその思想は更に一新印象を被る。大石猶絕崖にあれは一彈指能く之を千仞の溪に轉すへし、勢は止む可らず、吾國の文學變せさらむと欲するも能はず。機正に熟す、吾文學は方に一轉機せんとす。

吾人は頃日の文界中に悲酸文字の出つるもの漸く多きを見て、吾人の言の誤らさるを知る。かの泉鏡花の夜行巡査、前田曙山の蝗賣、三宅青軒の奔馬、廣津柳浪の黑蜥蜴の類に於て確にその吾文學が昔日の喜劇的和樂の舊分子に加ふるに、悲劇的分子を以てしたるを見る。嗚呼轉せすむば進まず、吾文學は更に一大步武を進めんとするなり。吾人は此等深刻の悲哀文字の出つるに至りたるを以て、吾國文學の上に於て喜ふへきの新現象なりとして之を歡迎す。來れ、來れ、益〻來れ。吾文學の新光彩よ。

吾國民由來同化の大胃腑を有す、已に吾國固有の文學に支那印度思想を同化せり、而して今やまた西歐文學の趣味を同化せんとす。東亞思想と西歐思想と二者を一洪爐の中に鑄冶融渾して、文學の一大生面を開くは豈に吾邦文學者の大任には非すや。（廿八年七月稿）

詩人と厭世觀

詩人、彼等何か故に世を悲觀するもの衆きか。彼はハルトマンの如く統計的に世上の快樂と苦患とを打算し來てしかするに非す、ショッペンハウァーの如く意志なる第一原理より演繹し來りてしかするにもあらす、或は來世に欣求する宗教的の觀念よりしかするにもあらす、哲學的にもあらずして詩的なり、彼は彼が自然の美を感するが如く厭世を感するのみ、彼は深く思はす篤く信せず、唯

だ直下に感するのみ、理然らざる可らざるの情由もなく、然る所以の緣故もなし、唯感するのまゝに然り態故あるなし。

詩なるものは純情の文のみ、詩人なるものは感情の人のみ、故に詩人なるものは動かされ易く激され易し、彼が眼には一小野花にも猶意義あるか如く、あらゆる事物に對して深く感し深く動かさる、故に庸衆には冷々に見過さるゝ事にも深くうたれ太甚しく激す、彼は寧ろ神經に過敏なり、些少の刺激も彼には太甚しき衝動を與ふ、而して彼は感情の人たるか故に寧ろ純潔なり正直なり、彼は智的の人の如く多巧なる能はず、意的の人の如く刻忍なる能はず、純潔なり正直なるか故に、此虛僞の世界矯飾の社會はその能く堪ゆる所に非す、堪ゆる能はざるの境に處するに、感し易きの資を以てす、詩人の世を非觀する亦宜ならすや。

詩に在ては大古蒙昧の世こそ寧ろ其黃金世界なれ、太古の時は猶小兒の時の如し、其皆民情に富むて智と意との太甚しく發達せるなし、朴訥の素樸に安むして井を鑿つて飲むを知る而已、此時世界に何の虛僞かあり社會に何の矯飾かあらむや、太古の民は自ら皆無文の詩人也、太古の天地は自らに詩的の天地なり、詩人にして此間に處らしめは、彼等は世を悲觀せよと强ゆるも能くせむや。

十九世紀は唯物の世なり、十九世紀は智巧の世なり、十九世紀は詩を殺し詩人を殺せり。

夫れ詩人は既にいへる如く感情の人なり、故に直覺の力に富む、而して十九世紀は分析を貴ふ、事々物々は叮嚀に剔抉し、仔細に點檢す、階を經、層を逐ふに非されは達するを得す、其智的の遲疑は情的直覺の一躍を許す能はず。

詩人は既に直覺の力に富む、故に萬有は神秘的に解釋し去る、而して十九世紀は唯物の時代なり、此宇宙は器械視され、自然は散文視さる、個〻皆所謂自然法なるもの、律する所となりて活動する萬有を視るのみ、何ぞ神秘の玄妙を解せむや。詩人の眼には此天地は玄妙なり、從て美妙なり、山青く水白き好光景好風色にみてる天地なり、而して看よ十九世紀の理學者や博物學者、彼等生母の墳墓の上に在て植物採集を敢てする徒には、滿目唯死天地あるのみ、死萬有あるのみ、岩石に對しては何の地質たるを思ひ、樹林に對しては何の綱目に屬し何の種屬に當たるかを思ふのみ、而して科學的の十九世紀は此等沒風流の徒の跋扈するあるのみにして多趣なる詩人を容るゝ能はず。詩人は既に直覺的なり故に演繹的ならざるを得す、而して經驗的の十九世紀は歸納的なり、演繹は杜撰なりとして之を輕むす。嗚呼十九世紀は科學的世紀なり、百

般の事孰れか多少其色彩を帶ひさるものぞ、哲學にポシチヰズム出て、宗教すら尙所謂科學的方法なるもの丶巨手に觸れらる、其他のもの知るへきのみ。科學的、此三文字は如何に今世紀の流行語たりしぞ、これと共に今世紀の如何に俗了せられたるぞ、從て果して幾許の詩を殺し、幾多の詩人を殺したるぞ。

實に十九世紀は科學に福して詩に厄す、詩人の此間に生れしもの果して當さに何をか悅ふへき。世に處らむ乎、唯物的の風潮は社會の民を黃金崇拜とし、輕佻となし、浮靡となせり、世を逃れむ乎、機關の響さと烟筒の烟は器械的文明の徵號として山翠りに水淸き邊をも俗化せしめぬ。世は逃るゝも得ず、世に處るも得ず、彼は當さに何の地にか其安慰をもとむへき。

バイロンや、ハイネや、彼は其安慰の地を得す、彼は世を悲しみ、世を墳り、世を罵り、世を嘲り、狂ひに狂ふて狂死に死せりき、彼等二人は眞に詩人的なりき、彼は深く思ふ能はす、信する能はす、唯其情の激するに任せ情の奔逸に任せたりき、二人者は實に十九世紀の初頭に立て、詩人として此十九世紀と戰ひぬ。シエリー、彼も亦厭世の人のみ、然れとも彼は哲理を信す、彼は其哲理を以てやゝ其憤りを靜めぬ、故に二人者に比すれは稍ゝ平靜の傾ありとす、テニソン彼か敢て悲哀の調をなさゞるものは、彼は宗教を假て强て此世を樂觀するなり、後の二人にして哲學と宗教との安慰なくば彼等も亦バイロンたらむのみハイネたらむのみ。

哲學者の如く推理的に世を哀觀するものは、其起點の異なるに因て亦其觀を變せしむるに足る。宗教者の如く信仰的に世を厭離せんとするものは、亦其信仰を强ひて其所信を易ゝしむへし。唯詩人は感す、理によらす、信によらす、唯其感するまゝに感するのみ、四圍の境遇の彼に影響するもの實に多し。十九世紀の詩人に厭世觀あるを怪むを休めよ、十九世紀の詩人に厭世觀なからしめは寧ろ怪むへきに非すや（二十八年七月）

禪宗の流行を論して今日の思想界の趨勢に及ふ

嗚呼禪宗々々、汝は如何に今日の流行兒なるよ、靜閑なる圓覺寺は參禪の居士の爲めに賑はしく、雜誌屋の塵頭禪宗の雜誌賣行き頗るよしといふ。嗚呼舐犢の愛由來人の兒を害すること多し、今日の流行果して汝の幸か不幸か。

回顧すれは五十年前、鎖國の關鍵一たひ破れて外邦との交通開けて以來、西歐主義の潮流は滔々として吾國に注き來り、其浸漸する所唯に有形なる政治風俗等の上にのみ

止まらず、更に無形なる思想界に及ぼして吾國を擧げて唯物的文明の奴隷となしぬ。封建の制打破され、王制は復古し、廢刀の令布かれ、散髮の風行はるゝと共に、覇束の枷は弛められ、自由の精神は吹込まれ、舊信仰はあらゆる幕府時代の遺物と共に固陋なりとして棄却されて僅に迷信の翁媼中に其威力を繫けるのみ。明治維新後十年は寧ろ舊文物の破壞時代なりき、舊物の破壞は新物の建設を須つ、爾來十年は建設の時代にして、吾國民は其材料を一に西歐にとり、西歐文物の摸倣盛に行はれて電信なり、鐵道あり、滊船なり、到る處に通せさるなく、其服は歐にせさるものは流行に後るゝの無粹漢として指笑され、其食を歐にせざるものは紳士の流に非すとせられ、舞踏行はれ、假裝舞踏行はれ、鹿鳴館中燈光日を欺むき、盛裝綺羅花の如きの士女其間に緩歌長舞して夜を以て晝に代へたりき。此間に在てや、人心徒らに他の文明を吸收するに急なる、外に馳せて內に省みるに遑あらす、されは此時に當て行はれたる哲學は英國的皮相の功利唯物の哲學のみにして、ベンザム、ミル、スペンサー等の名は嘖々として我國學者間に唱道されたり（もとより英語の盛に行はれて、佛語獨語の未た甚だしく講習されざりしも亦其一因たるには相違なきも）と雖とも、而かも嚴肅謹嚴なる清教的教義は吾國民の輕快濶達なる氣風に合する能はず、舊信仰既に亡ひて新信仰未

た立たす、實驗學に伴ふ懷疑の思想は不知不識吾國士人の間に浸漸して殆むと無信仰無宗教の狀態を呈したりき。その徒に器械的文明の陸離たる光彩に眩惑せられて、茫々として其精神の歸宿する所を求むるを忘れたるや、猶孩兒の山中に途を失ひつゝも、猶兩崖上に咲ける草花の色よきに欺かれて嬉々として其の迷へるを忘れたるに似たりしも、人は常に信なくして立ち得へきにあらず、人間なるものは案外に臆病なるもの、何時までも懷疑の闇黑中に安むする能はず、暗夜に彷徨するものが北斗星の指導を恃むか如く、人は必ず一道の光を安心立命の地に求めさる可らす。歐化主義其頂上に達し國粹保存の叫喚漸く盛むに、外馳せるの人心稍〻內を省みるに至りしと共に、人は人生の何の處にか歸宿し、何の所にか其立脚の地を得へきかを懷ふて、爾來茲に十年に垂むとして、佛教復興して再び舊時の勢力を張らむとし、特に西歐崇拜の弊に陷りし耶蘇教すらも、漸く應化せられて日本の新耶蘇教たらむとし、宗教として極めて威望を繫くに足るなのりし神道すらも亦大に活氣を帶ひ來れり。此間に於て英國的唯物功利の淺薄皮相なる哲學は人間神靈の渴望を滿たすに足らすして、政治上に在て獨逸的國家主義の行はるゝと共に哲學上に於ては深奥幽玄なる獨逸の唯心論漸く吾國民の玩味せらるゝに至る。

人心此の如く漸く其眼を人生の問題に注きて、更に深く其秘密に徹するに及むてや、先つ其瞳子に映し來るものは人世の虚僞なり、人生の苦痛なり、人世の如何に惡むへき、人生の如何に寧ろ憐むへきか。人心の外に浮れし時は花は唯美はしく月は唯麗はしからむ。されとも心少しくひきしまりて思に沈むに至れは、盛りなる花には散行くを思ひ、くまなき月には缺けなむとを思ふ、近時に於ける思想界の趨勢が厭世に傾くは自然の勢ならすや。今日の文學の如何に悲哀の調を帶ひ來りたるかを看よ、青年詩人の如何に厭世に傾けるを看よ、厭世に關するの議論か漸く學者間の口に上りたるを看よ、樂天旨義のヘーゲルが哲學今や說く者寡なくショッペンハウアーハルトマン氏等の厭世論の如何に今日に嘖々せらるゝを着よ。嗚呼舊信仰既に去て新信仰未た來らす、既に懷疑なる能はすして而かも未た安慰に就く能はず徒らに苦悶輾轉して人世を厭て人生を哀む。

近時に於ける禪宗の流行また此思想の趨勢に伴へる一現象に非さるなきを得むや。抽象的に之を思想發達の順序より稽へ、具体的に之を哲學史蹟の證する所より推すも、唯物的懷疑的禮文的の思想其極點に達せば必す一轉振神秘的思想の新勾欄を現出し來る。希臘哲學に於て懷疑派の哲學に次て起りしは新プラン派の神秘說ありしに非すや、

スコラスチック哲學の名言文詞の末に相爭ふの後には頓悟によりて神光に接し得へしと說く獨逸神秘派の興りたりしには非すや。夫れ其心既に內に省みて思に沈むに及むてや、懷疑なるものは其胸中に於ける一種の苦悶なり、一種の擔荷なり、安むせむと欲して安むへきなく、慰めんと欲するに慰むるに足るへきものなし、輾轉反側切に其立命の地を求めんと欲す。然れとも既に懷疑す、物のこれに信し憑むへきものを得す疑うて之を疑ひ更に之を疑ふの極や飜て終に自己によりて自己を信せんとす、吾人の論辯も思索も、理屈も、都て不確なりとせば吾人は何によりて何をか信せん、唯此疑ふ可らさるの自己によりて此疑ふ可らさるの自己を信せんには若かず、理屈も非なり思辯も非なり、頓悟によりて直覺す、覿面に對し得へきもの自己を除て何者かある、自己の外に神を求む可らす、自性の外に佛を求む可らす、自力によりて自性を求む何の所にか懷疑を容れむ、唯物懷疑の思想に次て神秘的傾向を生し來るは蓋し是か爲めのみ、即心即佛是性成佛を說く禪宗の今日に流行せんとするは豈に曩日唯物懷疑的思想の反抗にして、而して人心の漸く人生の問題に向ひ宗教を欣求するに至りたるの徵にあらさるなきを得むや。

吾人は近時思想界の趨勢を見て、吾國民か漸く眞面目の國民たらむとするに至りたる

を賀するものなり、然れとも習性容易に除き難し、禪宗の流行そのものかまた吾國民輕佻に流れ易きの氣質を表出せんとするを見る。流行を趁うて狂奔する彌次馬の徒が有爲の時間を空費し、內に滿したる煩惱を懷きなから、外、徒らに木佛の態度を擬して、殊勝氣にて坐禪の名の下に坐睡を營むか如き。或は面々相授して文字を立てざるといふ此宗の教義を、紛々擾々たる名言文句の末に解せんとする雜誌講義錄の類の、利を貪り名を好む似而非緇徒奸商人の徒によりて出さるゝ、嗚呼禪宗なるものは寧ろ此等のものゝ掌中に弄され褻瀆せられむとす、吾人は此の如きの流行の寧ろ禪宗の眞面目を汚すものたるを思うて禪宗の爲めに之を慨す。

然れとも翻て之を思ふ、唯物的懷疑的の十九世紀はまさに逝くに殆むとして、西歐の天地また神秘的神靈的思想の興起を見る、吾人は二十世紀の初期か新神秘哲學の新勾欄たるを信し、而して其新神秘論か少くとも哲學的の新衣粧を纏うて上場するを信すると共に吾日本か此由來東洋的なる神秘的思想に施すに西歐的哲學推究の新方法を以てすへき好地位に立つものたるを確信するか故に、吾人は禪宗の今少しく眞面目に研究されむとを期望するもの也。

吾人は今日禪宗研究の流行を賀す、而かも一時の流行は吾人の欲する所にあらず、眞面目なれ大に眞面目なれ、而して哲學上に於ける吾國民の天職として、神秘哲學に施すに私學的考究の方法を以てし、二十世紀の學界に大に吾國民の光彩を發揮せよ。(廿八年九月)

東洋的の新美學を造れよ

國粹保存猶足らず、國粹發揮猶足らす、東亞文明の發揮猶足らす、吾人は日本の國民として世界的新文明の建設者たるべき大任を有す。

由來東西兩洋の文明は其淵源を異にし、其發達を異にす、故に二者亦特色を全うせす。彼の文明は器械的に、唯物的に、實驗的に、歸納的に、分析的に、數學的に、有形的に、散文的に、世俗的に、進步的なり。此の文明は標彰的なり、天才的なり、自然的なり、演繹的なり、總合的なり、具象的なり、形而上的なり、詩歌的なり、神韻的なり、靜止的なり。二者各其一を得て相偏倚す、二者を渾融して始めて完全の世界的文明出て來らむ。嗚呼誰れか二者をとり將ち來て之を同化の洪爐中に投するものぞ。

東亞の文明は其一部を印度に、一部を支那に淵源し、東流して朝鮮に入り、更に朝宗して吾日本に注き來りき。而して西歐の文明は猶太に發し、希臘に發し、共に流れて

羅馬に入り、歐大陸に溢れて更に英に入り、更に西して、亞米利加に入り、米は之を以て吾日本に注きぬ、實に吾日本は二文明の潮流が會滙の所たり、東洋に在て最もよく西歐の文明を味ひ得たるものは日本に非すや、而して西歐の文明は味ひ得さるものゝ中に就て最もよく印度支那の文明を咀嚼し得たるものは吾日本に非すや。既に然り東西兩文明の稟禀たるもの吾日本を措てそれ何者ぞや。

吾日本は今や不知不識此針路をとりて走馳しつゝあるなり。看よや西歐文物崇拜は既に過去に飯し、國粹保存の論も亦事古りて、今や將に國粹發揮より東亞文明發揮に入らむとする也。今日に於て吾人のなすへき所は、最早西歐文物の意味もなき崇拜と嫌惡とにあるべからす、吾人は二文明を計量比較し、採るべきは採り、捨つへきを捨てゝ、新らしき衣裳を製し出さゝる可らす。而る後、世界的新文明は成らむ。

此觀念の衝動の隱約として既に吾國民の腦中を刺激するあり、吾人は近時の裸体畫問題に於て之を證す。此裸体畫をして出るに早きと十五年ならしめば喝采の裡に迎へられたりしを疑はず、十年ならしめば無二無三の排斥を被りたるや亦疑ふ可からず。然れども今日の吾人は漫りに之を崇ばさると共に、又之を斥けざるなり。長短得失の論難の如何に譁しかりしを見すや、此論は則ち東西二文明抵觸の聲にして、抵觸在て後

に調和の來るべきを知らば、此論難は確に二文明渾融の唱道の職に非らさらむや。

何か故にか之をいふ。

夫れ裸体畫に於て二思想の抵觸せし所以のものは、要するに二者各其偏する所に倚て相爭ひしに外ならす。之を是とするものは直ちに西洋の美學をとり來りて東洋的觀念を其下に壓し去らむとし、之を非とするものは美學としての城壁の據るへきものなきか故に、道德の盾の下に躲れて之を拒かむとせり。而して二者各一に偏して相是非し一是一非、紛々として窮已するを得さるは何ぞや、二思想渾融の新明文の未た成るなく、二思想の上に駕して之を勸解裁斷するに足るものあるなければなり。西歐の美學は西歐特殊の思想を反暎せる美術より歸納せる一特殊の典則のみ、特殊の思想を有するか故に特殊の典則あり、此特殊の典則を以て直ちに之を唯一普徧的のもの視して、之を以て相異なれる思想を有せる國民の美術を律せんとは、これ根抵に於て既に謬れるものなり。吾人は吾東亞特殊の思想を反暎せる美術より其特殊の典則を歸納し來て東洋特殊の新美學を建設し、更に二者の長短得失を計較比量して普徧的世界的の一新美學を造り出さむとを要す、彼裸体を以て美の極致なりして其前に隨喜の涙を垂るゝものは西歐崇拜の殘夢猶瞻々たるの徒のみ。而してまた之を倫理上より立論して之

を排斥せんとするものは美の何者たるを解せざる徒の神風連過去の囈言を操返すに過ぎざるのみ。二者共にいふに足らず。嗚呼誰れか東洋新美學をたて吾東洋美術の爲めに其光彩を發揮せん、誰れか更に東西兩洋美學の精髄を拔いて普徧の世界的新美學を建立して吾日東の名を天下の學界に轟かさむ。

顧みて吾人は今日吾國學界の風潮を見て慨嘆に禁えざるものあり。今日の書を讀むもの死文死語を見るのみ、博く讀まむとを思うて深く思ふとをなさず、別に一隻眼を具ふるにもあらず、特得の見地を有するにもあらず、徒らに其讀み得たる死語と死文とを剪裁して其識を衒ふの要に供ふるに過ぎざるのみ。拆衷といひ考證といふ其名や美なり、そのいふやよし。然れども此の如くにしてやまばこれ六尺の身を以て糊と剪刀との用をなすのみ、嗚呼人にして獨創なし鸚鵡と何ぞ擇まむ、猿猴と何ぞ擇まむ、嗚呼吾學界の風潮それ此の如くむは何の日か吾國民は世界的新文明建立の大任を成さむ。天下の學徒に寄語す、徒らに鎖細の末節に拘々するをやめて、更に眼を大局に注き、奮て世界的文明の基礎を築けよ、同化は模倣に非す、獨創は折衷に非す、嗚呼今日の學風を打破するに非すむは學界の前途また思ふへき哉。（廿八年九月）

太陽記者並に帝國文學記者に答ふ

予は劈頭先つ博覽博識、識者々々とはのめかさるゝ太陽の文學評論記者が、予か日本人第五號に揭けし所謂一知半解輕佻杜撰淺膚なる一文に向つて、其貴重なる紙白を二頁足らずまで割愛せられたるの叮嚀を謝し、而して併せて淺膚なる一派の評論家なりとして暗に予を指摘せられたる帝國文學雜錄記者に對しても、亦此少年氣鋭被酒一場の氣焰に過ぎざるに似たるものに示教を垂れられたるを深く謝し奉る。吾人は此二者をもとより同人の手に出てたりとはせざれども、其所論の相似たるを以て吾人は各別に答ふるの煩を避けて、茲には重に太陽記者に答へて傍ら帝國文學記者に及ぶ、敢て答ふるとは云はず、聊か以て垂示の恩を謝するのみ。

吾人か嚮きに東洋の新美學を作れよといひしものは、吾等の如き所謂淺膚輕佻なる知識を有するものか敢て自ら進むて所謂分外千萬の事たる東西兩洋文明抵觸の勸解裁斷をなさんとには非ず、吾人は唯吾人の信する所をいふて以て、東西兩洋の學に通曉し殊に西歐美學に於ける十二分の知識を有せらるゝ識者、記者其人の如きものに向つて待つ所ありしのみ、吾人は分外千萬の事を敢てせんとは申さざりき。

吾人不肖と雖とも原理あるものか平等普遍のものたるべきを知る、然れとも人間知に限あり、限あるの知を以て限りなきの事を知曉し得可からず、所謂平等普遍といふもの、また限りあるの知に依て知曉し得られたる知識中より、それに平等普遍のものを歸納し來りたるに非さるなき乎、たるへきもの必すしもたる能はず、唯だたりと信するのみに非ざる乎、既に平等普遍なりといふ、歸納の法によるに非すして果して何によりて平等普遍なるへしといふを證し得る乎、而して既に歸納の法による、果して絶對的に其正確を保證し得へき乎、歸納の法によりて知り得へきものは猶一の蓋然たるに止まらさる乎。

吾人は美學の原理が平等普遍なる人間の好尚に根據せざる可からさるを知る、苟くも平等普遍の好尚に根據し得ば其原理の牢として拔く可からさるや勿論なり、然れとも好尚は物質の如く動學的のものに非ず、物、好尚より一定し難きものはあらず、東西國を異にし俗を異にす、好尚の同しきを得可からさるや瞭々として明かなり、されは西歐の好尚に平等普遍にして原理とせられたるもの、必らすしも東亞の好尚に於て其然る能はさるものなきを知らむや、然らさるものを移して然らさるものを律せんとす、是れもと根抵に於て謬るもの、吾人は唯東洋の好尚か西歐と相同しからさるか故に、

更に東洋の好尚を根據とせる、其東洋の好尚に平等普遍なる原理を發見して、東洋の好尚を律すへき新美學を作れといひしのみ、記者は美學の原理とは平等普遍の人心に根據すといふ人心とは何ぞ、平等普遍なる人心とは何をかいふ、人心とは思索の謂ひか、然らは哲學の原理も平等普遍の人心に根據せさる乎、倫理然らさる乎、あらゆる科學皆然らさる乎、何ぞ人心の語の漠として摸稜なるや、吾人淺識、記者か人心の語を用ゐたるを解する能はず、淺膚予の如きものを教ゆる、一層剴切の語を以てせられんことを欲す、天下は皆識者たると記者の如くならず。

吾人は既に東西好尚の同しからさるを信す、試みに思へ、吾東洋の好尚たる幽玄即ちさびの美は、果して西洋美學の二大キャテゴリースたる婉美(ビューティフル)と美壯とのいつれかに律するを得へきや、西歐の人婉美の美たるを知る、壯美の美たるを知る、幽寂の美の美たるに至ては果してその能く玩味し得へき所なる乎、支那及日本に禪の影響を受けて發達せる幽寂の美に至ては、これ寧ろ東洋特殊の好尚にあらざる可き乎、西洋の美學を移し來りて直ちに猶これをも其下に律し得へき乎、得るとは則ち得む、而かも猶牽強の跡を免るゝを得へき乎、吾人は記者に向つて更に一番の熟慮を煩はされんとを望む、かの俗に好尚のシブシと稱せらるるもの、果して婉美なりといふへき乎、壯美なりと

いふ可き乎。

說明の學なれはこそ吾人は東洋の新美學を作れといひたれ、既に相異なるの好尙を根據とせるものを以て相異なるの好尙を說明し得へき乎、東洋に於ける幽寂の美、猶これを直ちに西洋の美學そのまゝにて說明し得へしといふ乎。

嗚呼記者は既に東西の文明は調和されざる可からすといふ、而かも記者は猶西歐崇拜の弊に陷れるに非さるなき乎、記者も猶其學ふ所に偏するなき乎、記者は口に東西文明の調和を說いて、心猶東洋の文明を歐化せんとするに非さる乎。吾人は吾人の東亞に國する者の任として、寧ろ西歐の文明を東亞化するの、調和の第一着たるを信す、これをしも猶一時無謀の客氣といふ乎、足下の輩は猶西洋崇拜の宿夢に昏々す、起て曉鐘を鳴らすものを指して漫りに騷狂すといふ、吾人は東西文明の抵觸に向つて適當なる準備を懈らされといふに非すや、言者たるの責に於て吾人のなす所は聊か盡したるあるを思ふ、騷と叫へ、狂と叫へ、吾人は唯吾人の信する所をなすのみ。

太陽及帝國文學の記者は我が今日に獨創の見を立つるものなく、徒らに折衷考證の末に馳するを慨したるに對して、恰かもれのれか事を罵られたらむやうに哮りて哮りて我を辯難し給へり、吾人は此一節がかくまで、かく言ひ合はせたらむやうに二者より

一齊に辯難せられしほど重要なるとなりともれもはさりき、吾人は唯當世の學風に慨してこれをいひしのみ、而して二記者ともに吾人の意を誤解せられたるが如し、吾人は敢て書を讀む勿れとはいはず、書にくわるゝなといふのみ、吾人は敢て古文を死文なりとはいはず、古書を死書なりとはいはず、別に一隻眼を有し定見を有して書を讀むに非らされは其讀む所は皮相に流れて唯其死したる言句のみを讀むに等しきをいへるのみ、吾人は敢て先哲の思想を斥け古典の研究を忽にせよとはいはず、唯先哲の言語を剪裁し古典の文學を剽竊し、更に其眞意に參することなくして徒らに死文死語を駢列するの、六尺の身を以て糊と剪刀の用をなすものたるをいひしのみ、吾人が所謂獨創とは敢て世界的思想の外に身を拔かんとには非す、記者かいふ如く普く古今東西の思潮を尋究して而かも一頭地を其上に嶄出し世界歷史的發達の上に更に一着力せよといふのみ、獨創とは豈に必すしも歷史的發達の外に出て去るの謂ひならむ、發達の上に一分の大きさを加へんとす、もと豈に徒らに先哲の死語と死文とを臚列してこれを得むや、吾人は古今東西先哲の思想を尋究し、之を咀嚼し、之を玩味しこれを自己の思想中に容融渾化し、而してこれによりて更に其獨造の見地を作り、以て過去の思想に一分の大を加へて將來の發達に一分を益せよといふのみ吾人は敢て世界の思想を

連續にあらすとはいはず、而れともいつれの時にか獨造の見地の出つるなかりせば、其連續は則ち單に連續にして發達にはあらず、舊時に一分の大きさを加ふるものあれはこそ、所謂生ける發達もあらむ、加ふるとなくして之を發達といふ可き乎、獨創の見地出つるなくして猶發達といふを得る乎、吾人は敢てプラトン、アリストテレスの思想を死したりとはいはず、而れとも、プラトン、アリストテレスの思想の猶凛々として生氣あるの故に、吾人は其以外に一も獨創の見地を出す能はさる可き乎、何そそれ怯懦なる、臆病なる、先哲の思想は後生大事に之を株守せさる可らさる乎、而れとも吾人は敢て歴史的研究を無用なりとはいはず、而かも歴史的研究なるものを唯歴史的研究のためにするのみにして其能事畢れりとせは、吾人は何の所にか將來の歴史的發達を望むへき。吾人は唯書を活讀せよといふのみ、自己獨創の見地を作るへき素養として書を讀めよといふのみ、書を讀むは衒識のために非すといふのみ、糊と剪刀の用をなさむか爲めに非すといふのみ、記者は歴史的發達を外にして獨創の意見なるものあらすといふ、而かも獨創の意見出てすして果して歴史的發達なるもの猶存し得へき乎、嗚呼書を讀むて徒らに其死文死語の皮相のみを讀得て歴史的研究なりと得々たると書を讀て其眞意に徹透し、以て自己の獨創を造るへき素養とすると、何れか淺膚、

何れか輕佻、先哲の思想は千古凛々として活く、而かも思想に直參せすんば其文は死文のみ、其語は死語のみ

記者は、我邦は西洋の思想を理會するを得す、西洋の文明を綜合し得るの位置に達せすといふ、果して然る乎、果して然るも、猶その然らざる可らざるをいふに於て何をか急遽といひ、狼狽といふや、記者は東西文明の抵觸に對して適當の準備を懈らさるを吾人か日本文學に對する當然の責務なりといへるに非さる乎、既に準備を要す、未た然る能はさるとするもその當さに然らさる可らさるを說くは、猶急遽といひ狼狽といふ乎、嗚呼其然らさる可からさるを知て、尙然かすへきの時に非すといふてやむ、此の如くにして、然かすへきの時は何れにか來らむや。これをしも寧ろ弱志薄行といふ可らさる乎、近眼者流といふ可らさる乎、吾人は東西文明の調和の事の、忍耐と精勤と遠大の目的とを要するを知る、而かも猶、これか爲めに今日に於て東西文明の調和を說くとなし得可らさるの理ある可き乎。

吾人か東洋の新美學を造れといふは、必すしも己れの知らさる國語を惡むか爲めに然るに非す、小膽猜忌異を立てゝ人に誇らむとにもあらず、實に東西文明の調和の大任のかゝりて吾日本國民の上にあるを信すれば也、刺々の言豈に他あらむや、豈に他あ

らむや。

予か偶爾の一言の、たま〳〵或は實學に益なくして徒らに後生を誤るといはれ、世界を誤り後進を毒すといはるゝの甚たしく予か素志に違ふものあり、一言以て辯すること爾り。

予か文に嫻はさる、言の禮に失するものある往々にして免れさらむ歟。而して讀者にして、一たび太陽記者帝國文學記者の予に對する攻擊の文を讀まるれば二者が口調の毫も其尊大ならず、倨傲あらさるに比して予か文の漫りに大言を弄するの更に大に不遜たるをみるを免れ得さらむ歟、呵。（廿八年十月）

文學上に於ける西歐崇拜の殘夢

吾人は敢て國粹保存といはず、吾人は敢て國粹發揮といはず、吾人は吾國民の其島國的の狹量を捨てゝ世界的智識の修養をなさんを欲するとも敢て人後に落ちじ。されは內村氏が世界的文學の修養を以て吾國に大文學者を得へき一大要素に數へたる吾人も亦雙手を抗げて之に賛するもの也。而れども既に之を世界的知識といふ、何が故に其擧し來るの人物書卷の悉く西歐のものゝみにして、之に東洋の一人物一書冊をも加ふ

ることをなさゞりし歟、氏は果して西歐を以て世界の代表的と信せる乎、將た西歐以外吾人の涵養に資す可き大人物大書冊あしと信せる乎、氏は希伯利の聖書、以太利のダンテ、英吉利のシエクスピーア、日耳曼のギヨエテの四者にして世界的の思想をつくせりと信せる乎、氏は果して東洋の支那印度等また此四者に匹敵すべき大作なしとせる乎。將た、また〳〵之を忘れたる乎、そも〳〵亦西歐崇拜の殘夢未だ覺めざる乎。

吾人は氏が嘗て北越の基督教の一黌舍の長として、斷々として西人宣教師の說を排して其修身課書を論語を用ゐたるをきけり。氏はかの惛々たる西歐崇拜者流に非るや明けし、而るに今單に四者を擧げて其他に及ふなかりしものは、其學ぶ所に偏せしに非るなき乎、また是れ一種の偏見に非ざるなきを得る乎。

吾人は敢て聖書や、フアウストや、ダンテや、シエクスピーアを一書卷大人物ならずとはいはず、之が思想を玩味し其智識を同化するの吾國文學者の修卷に必須ならずとはいはず。而れども既に聖書をいふ、波羅門のウパニシヤッドの迷言また以て世界的智識の修養に資す可らざる可き乎、釋尊所說の般若法華等の窈冥また之あるに足らざる可き乎、聖書を以て世界唯一の經典なりとするはこれ西歐基督教國民の一迷執にあ

らざるなき歟、既にシエクスピーアをあげ、ダンテをあげ、ギヨエテをあぐ、東洋詩人文人果して、これと肩を比ぶべき一人のあるなき歟、詩三百篇の簡遠、楚辭の悲惋、若くは長卿が詞賦の瑰麗、若くば李白が飄逸、杜甫が沈痛、若くば西廂の靈筆、琵琶の數奇、一句に抹殺了して到底此等西洋の四者に追逐するに足らずといふ乎、國を異にすれば好尚自ら異なり、彼と此と其趣味の相同じからざるは則ち之有らむ、而れども趣味の異るが爲めに斷じて此を以て彼にまさる能はずといふを得可き乎。嗚呼氏は西歐の學に耽り、日常目覩する所の西歐の文にあるが爲め、不知不識、其習に偏して、一種の西歐崇拜の觀念腦底に印し牢として拔くべからざるものあるには非るなき乎。更に一歩を進めて之を論せん乎、所謂彼の世界的智識の修養なるもの、もと何が爲めにか之を要するといふ乎、即ち吾國民の眼界を濶大にし、吾國民中にまたかの所謂世界的大文學者を出さんが爲めといふにはあらざるや。既に然り、彼の世界的文學の修養なるものは之を我に化して我思想一分の營養にせんとするにあるのみ、我を以て彼を化するもの彼を以て我を化するに非らざるなり、既に彼を以て我を化するに非ずして我を以て彼を化するにあり、即ち我は主にして彼は客なり、我は本にして彼は末なり、主客本末歴然として自ら別あり、冠履を顚倒して客を以て主となし、末を以て本

とせば則ち如何。而して今の世界的文學の修養をいふや、世界的というて實は西歐文學を以て我を化せんとするもの也。夫れ我よりして彼を化せんとす、必ず這の我なるものに一個の主張本領あつて輙ち得可し、這の我なるものにして主張なく本領なからしめばこれ這は我なるものなきなり、我なるものはありといへども、我なる所以のものなきなり、我にして我たる所以のものなくむば之を稱して我なるものなしといふも則ち不可なき也、既に我なるものなし、この何を將ち來つて彼を化し去らんとすべき歟、火熱なきに鐵鎔けず、型なきに鈇は鎔られず、這の我をすてゝなにをかせんや。玄かるに西歐文學を以て直に世界的文學なりと信ずるものは這の我をすてたるなり、這の我の我たる所以の本領主張を蔑にしたるものなり、我文學の大基礎をなせる東洋支那印度等の思想あるを顧みざるものなり、之を西歐崇拜といふ便ち不可なる所ある乎。吾國の文學はその思想の大本よりいふも、一種セミチック、アリアンニ思想を根本的に殊別なる蒙古種の思想を遺傳し、而して其の發達の歴史より之をいふも、支那文學の感化を被むり印度思想の影響を受けて今日をなせるもの、故に今に於て吾國の文學を大にせんとす、その何の思想を假り來り、何の智識を加へ來るもとより妨なしと雖も、而も之を假り來り、之に加へ來るの前に於て、一度回顧して更に先づ我地盤を固め我

基礎を堅ふせんことを要す。地盤と基礎とにして牢固ならざらん乎、砂上の樓閣假り來るもの愈多く、加へ來るもの彌々多きと共に傾覆せずんば則ち崩壞せん。此の如くにして猶吾國の文學を大にしたるといふを得可き乎。故に吾人はいふ、西歐の文學もとより假て以て吾國の文學を大にする能はざるにあらずといへども、而れともこれ猶第二着力の所のみ、吾人は先吾人が一たび胃中にうつりたる東亞の文學を反芻し來つて、更に再び之を咀嚼し之を玩味せよと。これ地盤を固うするの法なり。基礎を牢うするの法なり。陳套なりといふ勿れ、陳腐なりといふ勿れ。往日の吾は今の我に非らず、今の我の觀る所、豈往日の我の觀る所に比して一段の進歩をなさざらんや。同一書卷、同一文字、而も其裡自ら別樣の津味あらむ。Renais is anci naisance 思想は凜々として千古に活く。

此の如くにして我たるものゝ主張始めて定まる、我たる所以の本領始めて定まる。東洋の天地に固有せる東洋の思想、東洋の思想に生長せる東洋の文學、これ即ち我が國民の本領たり、主張たり。この地盤にして既に固く、この基礎にして既に堅く。而る後に西歐文學の同化をいふべし世界文學の修養をいふべきのみ。此に是れば我輙ち彼を化するを得可し、我の彼に化せられざるを得可し。これ吾國民の文學上に於ける着

力の順序なり、着手の次第なり。更に新なる眼光を以て東洋の古學を照らし、延て西歐の文學に及ぶ、而して後はじめて之を世界的文學の修養といふ可し。我をすてゝ彼に化し本末主客を誤るは則ち不可也。

然れども吾人は敢て西歐文學を輕んじて東洋の文學を重んするにはあらず、吾人は唯吾日本の東洋に國し、吾國民の蒙古の同一族たるが故に、先づ此を先にして而して彼を後にせよといふのみ、而して之を先後といふ必ずしも時間的に然れとは曰はず、唯關係のなきに然るべきを体せよといふのみ。我を以て歐化するとなく、彼を以て亞化せすといふのみ。聖書可なり、フアウスト可なり、ダンテ、セエクスピーア皆可也、而してウバニシャッド、佛典、詩經、楚辭、李杜の詩、長卿の賦、西廂琵琶の記、また更に可也。たゞ此を讀むとなくして、而して彼のみを讀んで世界的文學の保養便ち得たりとする莫らんを欲するのみ、彼を讀むと共に此を讀み、此を讀むと共に彼を讀み、參酌回互長を採り短を補ひ茲に以て吾國の文學を大にするに足らん歟。

それ人、神にあらず、聖にあらず、學ぶ所に偏し、習ふ所に偏す、もと數の免れ難き所。吾國維新一たび舊來の陋習を擊破して西歐との交通を開くに及びてや、燦爛たる形而下文明の光彩の爲めに一時吾國民の眼は眩耀せられ、一も西歐、二も西歐、此も

制を西歐にとりかれも準を西歐にもとむ、於是乎一時に横溢し來りたる歐化の潮流は沼々として其間に取捨棟擇を容るゝ暇なく、其間に教育され、其の間に董陶され來りたるものは、其學ぶ所、其の習ふ所、悉く制を西歐にとり、準を西歐にもとめたるものならざるはなく、從つて一種西歐崇拜の觀念は深く吾人の腦裏に印象され、此の最も深く印象されたる觀念は牢として漸く成心となり、其成心によりて事に對するが故に、自ら西歐を崇拜せずと稱するものにして、猶深く徹して之をみれば、其根抵西洋崇拜の念の蟠らざる者少なし、今日に在つて沼々たるもの皆隱約自ら識らざるの裡に西洋崇拜の成心を有す、吾人豈たゞに西歐文學を以て直に世界文學とするを咎めんや、看よ看よ今の文士の筆を把て論を立つる、其所論立派ならざるに非らず、其文辞華々しからざるに非るも、而も其の論ずるところは西人の論を憑據として之に因りて立論したるに非ざれば、其章句文學を剪裁拔萃して之を敷衍し之を繹釋したるに過ぎざる者なり。西歐の學は定成無欽容喙すべきなしと妄信して、(假令容喙すべきものなからしむるも、猶一度之を試驗の熱火にかけんこと學者たるもの〻本分なるべきに)之に頂禮するものあり。その希臘の古哲學を說くや喋々として口角沫を飛ばして、而して却て支那周代の哲學の價値の如何を問はざるものあり。英譯に因りて羅甸希臘の斷句

をさがし當てゝ、誇り顏に文章に挾めども、手近き支那古聖賢の語を知らんともせず。ギョエテ、シラーの生年月日詳に之を知るも、蘇軻と蘇徹とを別ち得ざるものあり。西歐の音樂に心醉してハーモニーのメロヂーのと騷げど、支那の宮の徵の何たるを知らざるものあり。よく希臘の美術をとき復興期の技藝を云々すれども、支那の書や畫やの南北の別の何によりて生じ、如何なる點に在つて異れるかを知らざるものもあらむ。嗚呼歐化主義は明治二十二年條約改正の失敗と共に仆れたりといふ莫れ、今日の文界は西歐崇拜の熱猶衰へず、之を要するに、維新以來薫習せる西歐拜の成心に加ふるに、衒識の學風、青年誇揚の客氣を煽てゝ、新に鶩せ、奇に馳せしめて、沈靜徐ろに古きを温ぬるを迂愚と感じ、陣套と信せしめしの決果たらずんばあらず。吾人は烏帽子直垂に神代の昔を慕ふ神風連にはあらねど、豈に今日學界の狀勢に對して長大息せざるを得んや。

飜て之を想ふ、今や世界の大勢は一變せんとす。十九世紀に於て黃人種は白人種の壓する所となりて其の下に雌伏せり。而れども來るべき二十世紀は則ち如何、依然として白人種勝つ可き乎、將たまた黃人種彼に勝たむ乎。大勢は默移潛運す、之を今日に豫知す可らずと雖ども、而かも黃人種が決起の機まさに闌りたる實に吾征清の擧之を

証す、不幸中道にして其事沮せりと雖も、吾人は猶將來の希望の吾日本帝國の前途を照らすものあるを想うて來世紀に於ける世界の覇權の吾人黄人種の手に歸すべきを信ずると共に吾人は吾學界に於ても亦かの憎々たる西歐崇拜の殘夢を覺醒し、決起して東洋文物の新光彩を八紘に耀かして併せて學界の覇權を握らんことを翹望に堪へざるなり。(明治廿八年十二月)

漢學復興の機

長繩は以て日を繫ぎ難し。烏兎匆々春去り秋來り、一歳また一歳、花は落ちて花はひらく、花は年々に新なりと雖も、人は歳々に老ゆ。紅顏頼み難し、忽ち鏡裏の秋霜に驚く、人生倏忽、百年夢の如し。元、明治に入てより、早く既に二十九年、若溪當年蓬髪短褐の少壯措大、今や髪華に齒豁に、秋風其の人老ひぬ。凋落するもの漸くつゞ。去一歳を以てするも、猶ほ三洲(長)逝き、甕谷(岡松)逝き、聽秋(伊藤)また逝く。今の漢學界の耆宿百年の壽を以てするも、餘年果して幾何ぞ。ァ、十年を出でずして、漢學界の耆宿一掃せられん。而して、之を紹ぎ、之を述ぶる、果してその人ありや。

明治維新は舊物の打壞なり、革命の鐵腕は打壞するを知て建設を知らず。西歐の文物混々として氾濫し來ると共に、舊來の思想文物悉く高閣に束ねられて廢物視さる。吾國々民の輕佻にして奇を好むや、新に趨りて舊を顧みず。二千年來吾國に因襲し來れる漢學を目するに固陋を以てし幽僻を以てし、人々之を口にするすら猶耻づ況むや之を學ぶものをや。且世人の利に趨り名に趨り易きや、少しく西歐の事を解する者の社會に重寶せられて利を攫み名を攫むの得易きが爲め、人皆汲々として歐語を學ばんとし漢學を度外視す、加之當世の實用を尚ひ力を一藝に專にする能はざるや、修むるに志あらしむるも猶僅に餘力をこれに用ゆるを得るのみ、是に於て乎維新以後の人物は殆んど全く漢學を知らず、之を知るは僅に維新を溯ると十年以前の人あるのみ。而して當時少壯二十左右の措大を以てするも、今や乃ち齡まさに知命を超ゆべし。老衰もとより其の所。而して此等を除けば他は維新來の教育によりて薫育せられたるもの、此等の人に紹ぐの一人あるなきなり。今の耆宿一旦不祥の事あらば、一人は一人を減じ、減ずるのみにして補ふものあるなく、終には日本の天地漢學地を掃うて空しからむ。

それ漢學の吾國思想上に於ける關係、猶拉丁希臘の古學の西歐諸國に於けるが如さの

み。吾國民の思想文物等、其淵源濫觴を繹ぬれば、悉く本を茲に歸せざるはなし、斯學の滅ぶるは即ち吾國民思想文物の川源涸るゝなり。幹根を培養して枝葉榮ふべしとせば、吾國民は第一番に漢學を修せざる可らざること論を待たず、而れども吾人は敢て或頑迷の徒の如く漫りに西歐の文物を一句に抹殺擯斥せんとするにはあらず、吾人は唯西歐の文物を採るに先て一たび其源根に顧みて漢學を修めよといふのみ。西歐の長をとるは最もよし、而れどもまた我の長を忘却す可らず、我の長を忘れざらんとせば、其源に顧みざる可らず。其源に顧む、故によく我を知るを得、故によく我を知る、我の長短炳然、我の長短既に明、故によく他の長短を明め得、他の長短を知得す、故によく其長をとり短を捨つるを得、長をとり短をすつ乃ち以て我に補ふべし。抑も我の他の思想文物を學ふ所以のものは以て我を大にせんとすればなり、我を以て他に化せんとにはあらす、他を以て我に化するにあるのみ、故に先つ我たる所以のものをたてゝ而して後他に及ふへし。我既にたつ故によく他をとつて我に補ふを得るなり。もしそれ我にしてたつあるなく我の長あるを知らざれば、便ち他の長短を見る能はず、他の皮相に眩せられて他を崇拜するに至らずむばやまず。故に私に之を思ふ、漢學は吾國民歴史上の關係よりしても第一に着力せざる可らざると、猶西歐の學者が第一着

力の拉丁希臘の古學にあるが如くならざる可らざるを。

更に之を坤輿地理の上より考ふ、支那はこれ我と全しく東亞の一列國、我と人種を同ふし、我と文字を同ふす。而して支那の文明我を感化したること既に遠く且深し。我は世界中にありて最もよく支那の思想を咀嚼し、最もよく支那の文字を解し得へき者。西歐の文物もとより學はざる可らずと雖ども、同文の國、同種の民にして、同しく東亞の列國たる支那の文物を學ぶと最も先ぜざる可らざずしてまた最も學ぶに容易たるや明けし矣。大にして之を觀る、乾坤一洲のみ四海一家のみ、何ぞ其間に彼此の差別を要せんや。而れども近きよりして遠きに及び、易きよりして難きに及ぶ、是れ秩序なり、是れ順序なり、支那我に最も近く、支那の思想我に最も解され易し、先づ支那の文物を學で而して後に彼の西歐の學術に及ぶは秩序のみ順序のみ。

更に世界の大勢よりして之をいふ、東洋西洋各其特殊の思想を有し、特殊の文明を有す。從來二洋相隔離して相識らず、故に其發達各其偏する所に傾き、各其長あり、各其短あり。我私に思ふ、此二洋の特殊なるものを打成して一團となし一躰となし、之を同化の洪爐に投し、之を融かし之を鑄ば世界的の完成なる文明茲に成らんと。而してまた思ふ、誰れか之れを爲すべきやと。支那は東洋の文明の代表者なり、而かも自

らは古に僻し舊に泥みて以て此大任に膺り難し、今日世界に於て最もよく支那の思想を同化し得るものは吾日本に若くものなく、而して東洋に在てまた最もよく西歐の思想を同化し得たるもの、また吾日本に若くはなし。既に然り此世界的の文明を大成するの任、吾國民を措て誰れか之を爲さんや。

更に之を思ふ、十八世紀以前は東西兩洋文明、單獨の發達をなしたるの時なり、十九世紀は東西兩洋文明衝突の時なり。而して二十世紀以後は東西文明渾融同化新文明出來るの時代なりと。而して十九世紀、今や年を餘すこと僅に四年に過ぎざる而已、東西二文明渾融の大任を負へる日本國民たるもの今日につとめざる可らず。吾人私に之を信ず、吾帝國は實に此使命を天に授けられたるものと。見ずや、一昨年より昨年に渉れる征清の事は、吾帝國をして東洋列國に超絶せしめたるに非ずや、吾帝國は實に東洋列國の盟主たるべきの地歩を占めんとす、既に東洋の盟主たり、東洋文明の光彩を發揮する豈に其任に非ずや而て更に進むで世界の中原に騁馳して其司命者たるべきの國民として、東西文明の渾融者たり更に世界的文明の大成者たらざる可らざるに非ずや。嗚呼、前途の希望洋々たる哉。

而して顧みてまた思ふ。今や漢學は地を掃ふて吾學界に空しからんとす、今にして之

を復興せすんば彼の洋々たる希望、安んか之を充たさむ。漢學にして我に滅びば、我は所謂東洋の文明を發揮するに由なきなり、東洋文明の發揮既に得ず、如何んの世界の文明を大成せん。吾國民にして其天職を曠ふせざらんを欲せば、漢學大に之を今日に振はざる可からず。之を今日に振はずんば、耆老一空し去るの後、何人にか漢學の傳燈を紹がん。

二十世紀は四たび曆を更へて即ち來るべし、耆老の一空また猶十年を出てさらんとす、漢學の復興、機、實に今日にあり。機一たび失す、漢學の復興これをなすこと難し、漢學の復興、之を得ず、吾帝國の前途茫々。

吾人は漢學の吾國民として第一着力すべきをいふ、然れども必ずしも時間的に然れとはいはず、唯順序のまさに然るべきをいふのみ、空間的に之をいふのみ、漢學を學ばすんば以て西歐の學を修する莫れとはいはず、共に之を學ぶも可なり、後れて之を學ぶも亦可なり。要は唯之が本たるを忘れて枝に趨るなからんをいふのみ、吾人は特に西洋心醉者を提醒せんが爲めにかくいふのみ、其先後は問ふ所にあらず、其精神の然らんを欲するのみ。

吾人は漢學を復興せよといふ、而れども必ずしも尋章摘句、文字の穿鑿に髮を皤ふす

るを學べよとはいはず。唯吾人は東洋文明の發揮者たるものゝ任として之をなせよといふのみ。また必ずしも西歐の學を夷狄の學なりとして之を擯斥せよとはいはず。彼を採らんが爲めに先づ此を知れといふのみ、彼此を打成せんが爲めに此をも學べよといふのみ。而してたゞ之を學ぶの着力の第一にあることを忘るゝ莫れといふのみ。

また更に之を思ふ、支那古學の復興すべき唯に其文學のみならざるなり、只に其哲學のみにあらざるなり。もとより支那の文字の國たるはいふを待たず、其文華の燦爛豈に茲に贅するを須ゐんや、文學に在ては秦漢の簡遠、六朝の典麗、唐代の逸宕。哲學に在ては周末の諸子百家、老莊の虛無、孔孟の仁義、其他楊墨韓申等の諸說より程朱の理氣陽明良知の說等に至る蔚然として盛なる哉。之を學ぶ、もとより然るべきなり。而れども支那は形而上學のみにして實驗的科學の發達なしといふ莫れ。茫々として極目際なき大陸の大平野は其國民に喚起するに天文の智識を以てしたり、堯典をみるものは誰が當時曆數の既に進步したるを駭かざらむ、其他算數の學の如き醫藥の學の如き、昔日に在て既に其發達またみるべきものあり。いふ莫れ古舊いふに足らずと。これを西歐中世に於ける古學の復興に見ずやトレミーの天文說はコーペルニカスの徒を提醒して西歐今日の天文學の起源を開かしめしに非らずや。イユークリッドの算數學は猶今

日の幾何學に於ける基礎たるを得るに非ずや。ヒポクラテーズは醫祖として今日に仰がるゝを見ずや。支那に於ける天文や、算數や、醫學や、其他の實驗的學術、もとより疎笨ならむ、もとより迂遠いふに足らざらん。而れども更に深く之を研究し、之を考索す、新しき眼光を以てみる。必す新しき光采あらむ。その中また幾多の眞理を含蓄せざるにもあらじ、よし眞理ならずとするも、また吾人を提醒して新發明の端緒たるを得んもまた知る可らず、蛤蚌の中猶眞珠あり、鑛土金を混す、溶かさずむば金を認難く、碎かずんば眞珠を得難し。之を鎔かせよ、之を碎けよ、支那幾多の實驗學中豈にまた幾許の金と眞珠とあからむや。

有巢氏燧人氏は其事逸焉たり、書契ありてより大淸の今日に至る、劉興羸敗、興亡極まらずといへども、上下四千年、其文明の起源新なりといふ可らず。北は北海の濱より南は印度に至り、西は崑崙より東は日本海に至る、廣袤百五十万里、小なりといふ可らず。南北風氣を異にすれば發達もまた同じからず、古今時を異にすれば特徵も亦必ず相異なるを致す。古今と南北と縱橫交錯、此の如きの廣且久しきに涉れるもの、世界それ支那の文明を除て他に一あらむや。而して今日に在て研究の穿鑿猶至らざるもの、また支那文明に過ぐるものあらむや。實に支那の文明は學界の滄海なり、手に

從ふて遺珠拾ふべし。而して我日本國は實に此撈拾者たるに最も好地位を占めて、而してまた之をおさゞる可らざるの大任を有す。吾國民たるもの豈に奮はざる可けんや、奮て來るべき二十世紀に於て、政治上に於て世界列國の盟主たると共に、學界に於てまた世界文明の大成者たらざる可けんや。

然るに今や此寶庫は秘鍵を有する吾邦人の手によりて開かれずして、却て彼等西歐人の手によりてなされんとす。見よ西歐人の如何に孜々として東洋文物の研鑽に熱心なるやを、亞細亞協會は到る處に其支部を有するにあらずや、東方聖書は今や刊行して數十卷の多きに達せるに非ずや。嗚呼吾國民たるもの今にも努力せずんば何の面目ありて彼等紅髯の異人種に對せんや。況んや二十世紀來ること既に近く、漢學界の耆老空しきに及ぶことまた遠きに非ざるをや、嗚呼今日は實に漢學復興の機なり矣。

新年に當て前途を想へば希望洋々たり、今日にみれば戚々として憂に禁へず、噫。（廿九年一月）

莊子逍遙游

莊子名は周蒙人なりといふ戰國の時の人也著として今に傳ふる所莊子一卷あり今評釋

せんとする逍遙游は莊子開卷第一の篇にして其說く所荒蕩茫洋を極む然れとも千古の奇文一あつて二なき者莊子の面目を悉せる者此篇に若くはなし齊物論玄妙の理を說くに多趣の筆を以てす亦絕代の神品たるを失はずと雖も然れとも其理窟を具体的に荒唐の話說に寓せ渾然玲瓏一語一句の露骨を見ざるは竟に逍遙游に及ふ能はず逍遙游表より之をみれば興趣多き傳說の敍事なり而して裏よりして之をみれば玄妙なる哲學的見地の論議なり故に齊物論の其文字行文既に佶屈なるに比して逍遙游は甚た解し易きが如く而かも甚た解し易からず一種の寓言の如く然り解して肯綮に中らんには先つよく莊子其人の哲學上の見地の何の邊にあるを知らざる可らず而して支那諸子中最も解し難きものは莊子の見地也蓋し齊物論の難解を極むるものは啻に行文の佶屈なるによるにあらざる也莊子の見地の玄妙如是の文にあらされば說き出すを得ざりし也莊子の見地は言を絕し句を絕せる而上の理を說く也老子に於ては虛無を說くと雖とも其說く所猶全く人間の實際を離れず足猶地に跟く者也莊子に至つては天馬空を行く縹緲として測量の外にある也故に老子よりも更に解し易からざる也離騷は奇文最も解し難しと稱せらるゝ者也、然れども離騷の解し難きは其文字の奇古と其行文承接の間とにあるのみ其字句を解し其段落を明かにせば離騷は甚た解し難きの文に非さる也其說く所の主

旨は其文の如く錯雜のものにも非ざる也然るに莊子に至ては其文は却つて解し易きに似て而して其意容易に捕捉す可らず從つて文の模稜を來たして竟に之を解し能はざるものある也故に莊子の一書を解せんには先つ莊子の哲學的見地を識るを要して而して莊子の哲學的見地亦甚だ解し易からず然とも略々之を解かずんば以て莊子の文を解く可らず而かも之を說くも其玄妙の理恐らくは容易に讀者の理解を得難からんことを知る且哲學の理窟を說かんは此誌の目的とする所に非ざるを以て詳に此を說くの要も非ざるべし唯一言を以て莊子一卷の意を蔽ひ言へば則ち執を離るゝにあり即ち執著を離れて佛者の所謂解脫に入らんとする者也、莊子の所謂虛無は解脫の境をいへる者也其說甚た佛者の說く所と相似たりと雖とも吾人は必ず其說の所謂西方の聖人（列子に西方に聖人ありと說く後世の佛者之を牽强して是れ釋迦牟尼の謂也當時既に此語あり佛の傳來既に此時に於てしたりといふ）に出でたりといふを信せず蓋し時勢と風土との如何によつては必ずしも同樣の說相異れるの地に相期せずして暗合して起るものあるを見ること往々にして之あれば也此は茲に論ずべきの限にあらねば略しつ可し更に此佛者の語を假りて言之へば老子は小乘也莊子は大乘也老子は無を無として無に執する者也莊子は有無を渾融して亦無にも執せざる者也莊子は一切を不二とし無差別としたる

平等觀を有す故に莊子は儒者の禮文に仁義を小とし笑ふを禁じ得ざる也蓋し儒者の禮文仁義は差別の上に立つ者也父子を相別つか故に孝の道ある也忠孝を相別つか故に忠の道ある也彼我を別つか故に仁義ある也儒敎は即ち人間の現實に察して其現實の差別を整へんがために敎を立てたる者也人間より橫にみたる者也莊子は上より見たる者也上より見たるが故に一切平等也橫より見たるが故に凡て差別ある也差別を存して差別を整へんとしたるは儒敎也此差別の羈縛を脫して平等の自由に游はんとするは莊子也此差別を存じ差別を整へんことは身を修め家を齊へ天下國家を治平にせんには必要の事也故に儒敎は修身齊家よりして治國平天下に及ぶの敎也寧ろ積極的のものともいひ得可し差別の羈縛を捨てゝ其心を平等の自由に游はさんとするは寧ろ消極的也一身を安んじ其心を愉ばしむる所以の途也寧ろ消極的也孔子は周末の衰世を文武周公の古に回さんとして仁義を說けり忠孝を說けり儒敎を立てたり即ち周末道德の衰を振はんとしたる也、老莊は意を周末の衰に絕ち天下の事亦爲す可からず寧ろ高擧して寂靜を樂まんには若かずとせる也孔子は動かんとせる也、動いて天下に爲すあらんとする也老莊は靜ならんと欲する也靜にして人間と相避けんとする也更に一方より言之へば孔子は周末の衰を以て周初の禮文頹れたるに歸して盛んに仁義を說いて再ひ周初文質彬々

の盛に回さんとする也老莊は周末の衰を以て周初の文質に勝ちたるの致す所となし智功の天下を亂れるを慨して無爲の古に復さんとする也即ち孔子は禮文の德を懷ひ老莊は禮文の弊に慨する也是に由て孔子は仁義を說けり而して老莊は是の故に禮文を賤めり智巧を賤む即ち無爲を懷はざる能はず禮文を厭ふ即ち平等を懷はざるを得ず老莊の說是に於て乎起らざるを得ざる也而して老子に於ては猶其無爲と寂靜とによつて天下國家を治平にせんとするの理想を懷いて一味腥膻の氣を脫する能はざるものありと雖とも莊子に至りては純乎たる超脫論也一點の塵氣をも其衣袂の上に留めず予が前に老を小乘なりと說けるも畢竟は此所以あればなりし也

周末の如き亂れたる時代に老莊の如き一種の解脫論を說くとは必すしも特殊の事實にはあらざる也希臘に於て世漸く亂れたるアリストテレス以後の諸哲學が假令其說く所に途を同ふせざるものはあれ其歸嚮する所のいづれも解脫(フライハート)問題に非ざりしはなかりしを見ても知る可きにあらずや盡し人の情は安を懷ふ者也世亂るれば即ち身に反して其己人の安なるへき所以を考ふ進んで爲すあらんとすれば即ち其身を危ふす若かず退いて爲すなく一身の安を得んには而して其安を得べき所以に於て悶々し是に於て幾多の思索は當時の哲學者によりて提供さる而かも竟に人間を離脫して浮世の紛擾に雜はら

ざる所以に歸着せざる能はず是れ希臘の末運に於てアリストテレス以後の哲學が悉く此間解脫問題に嚮つて馳せたる所以にして又周末に於て老莊が寂靜を說き無爲を說き人間の差別を脫すべき平等觀をなすに至りたる所以なりとす莊子か執を離るゝを說くは此執を離るゝに於て人間の繫縛を脫して心を平等の大虛に游はしめんとする也夫れ差別あるが故に幾多の葛藤あり紛擾あり即ち有なり平等すれば一切即ち空し即ち無也有の執を離れて無の虛に入る既に心を無に游はしむれば一切無碍也行くとして可ならざるなく之くとして適ならざるなし即ち是れ逍遙游也莊子の逍遙游は即ち之を說ける也

逍遙游一篇は主として執を絕つことを說くなり執を絕つて而して平等の虛無に入ることを說くものなり（卅二年四月）

アムプレッシヨニズム

黑田、久米二氏が歸朝と共に、我國に輸入せられたる油繪の一新派アムプレッシヨニズムの如何に美術界に勢力を得つゝあるかは、まさに上野公園に開かれたる油繪展覽會を見て乃ちトす可し。アムプレッシヨニズムのかく勢力を得たるは、單に其新奇あるが

故に人の好奇心に投じたるが爲めに然るなるべき乎、將たまた別に理由の存するあるべき乎。吾人は畫家に非ず、然れども吾人の見る所を以てすれば、此派の畫風が、從來の東洋的畫風と相似れるは、之を致せし一大理由には非ざるなかるべき乎。東洋の畫風が、從來風韻を尙び性靈を重むじ、神を絹染の外に索めて區々として似を形像の末に較せざる、酷だかのアムプレッショニズムの畫派が、濃淡疎密草々に揮灑し去て、而かも自ら風趣を帶ぶると相似るなき乎。從來西洋の畫に於ては、人物に重きを置きたるに、今アムプレッショニズム畫派の、題を重に造化の光景に撰むは、東洋の畫家が山水に重きを置くと相似るなき乎。聞くアムプレッショニズムの畫風は、彼邦に在ても猶賛否の聲相半するの間にありと。これ豈に精緻を喜び形似を喜び寫生を喜ぶ彼等西歐人の眼には、標彰的神韻的なる所謂無筆迹底の畫風の目に慣れざるが爲めに、其津味を解する能はざるに非ざるなき歟。而かも自然の美に接するに慣れ、風趣神韻の餘情を掬するに慣れ、落筆疎鬆の畫に慣れたる吾邦人士は、這種の畫風を喜び、其流行の早き寧ろ此爲めに非ざるなからむや。吾人は敢へて玆に美術界中の新舊二派の優劣を論ずるにあらねど、吾人は後來に於いて此派が彌〻弘く吾邦に行はれんとを喜ぶもの、吾人は今回の展覽會に於て、彼の濃厚緻密餘韻もなく餘味もなく唯形似寫實を專らとしたる舊派の繪畫が減じて、此派の畫工の早く多きを加へ來りたるを見て欣躍に禁へず。（廿八年五月）

詩想と詩形

『帝國文學』第十號に林癸太といへる人『吾邦將來の詩形と外山博士の新體詩』と題し、滔々萬餘言を費して、詩形は詩想（內容）の自ら擇び自ら造るべきものにして、外山氏の新躰詩の如きも、また詩と稱するに足るべきを論ぜり。吾人は敢て詩に先天的形式ありと信ずるものにあらずといへども、然れども、既に之を詩といふ、或形式を具へざるも猶以て詩といふを得べき乎。想の先にして而して重むずべきは吾人と雖も之を知る。然れども想を重んずる爲めに、全く形式を蔑するを得べき乎。詩的內容を詩的形式に調へたるもの即ち詩にあらざるべき乎。詩とは單に思想を發洩すべきのみにして、其用了れるものにあらず、詩は美的の思想を發洩して、其美的の印象を他に感せしめざる可らず。若し此事なくば詩に形式は勿論無用なるべし。然れども詩の第一要件が美的詩想を言語に發洩するにあると共に、詩は第二の要件として、此美的詩想を他人に美的に感せしむべきやうに發洩せざる可らずとせば、詩は必ず或形式を具へざるべきに非ずや。詩は必ずや或形式を具へて、單に思想を發洩するのみにして能事畢

れる散文と躰を別たざる可らざるや明けし。而して其形式に於て要するは何ぞ、調これのみ。調とは何ぞ、リズムこれのみ。詩に於ける調は自然のリズムより來りたる人爲のリズムなり。故に詩に調なきは猶樂に譜なきが如し。樂にして譜なければ樂なきなり、詩にして調なければ詩なきなり。吾人は敢て吾邦從來の五七七五の形が唯一の先天的形式なりとはいはず。然れども吾邦の言語に於ては、五七若くば七五の調自然に耳にきゝよきものあるを知るのみ、然れども後來の詩が必ず五七若くは七五の調によらざる可らずとはいはず、五七七五は調にして形にあらず。然れども或調を具ふる形式なからざる可らざるを信ず。吾人は斷じて之をいはんとす、形式も亦想と共に詩に於ける必然の要件なりと。論者はいふ『諧調音律は人の好む所、所謂詩歌のみ何の因緣ありて之を專にするを得たりや』と。吾人は却ての語を以て論者に呈して論者の一省を請はむと欲するなり。詩歌の諧調音律を專にするに至りたるを自然の變遷なりとせば、諧調音律はこれ詩歌に必然の要件にあらずして何ぞ、論者はまた詩に反するものは、散文にあらずして科學なりといふ。是れ妥當の見に非ず、詩に對するは記實の文のみ、科學的叙述に要する文はもとより記實の文なり、然れども直ちに科學そのものを以て詩に對していふ可らず、若し科學の智に本つくが爲めに情に發する詩に反

すといはば、寧ろ何ぞ意に作る行動を相對せしめざる。科學そのものを詩に對していふを得ば、人間實際の所作も亦詩に對していふ可からざらんや。然れどもこれ妥當なる比擬にはあらず。且論者の言は科學的の文と詩とを對するにありとするも、然らば歷史的事實の記載は之を詩といふべき乎、損益勘定の大福帳は之を科學の文とすべき乎。吾人は寧ろ詩的の美文に對するに記實的の散文を以てするの當れるを信ず。論の枝葉は措之、今一歩を讓りて、詩に於て其形は問ふ所にあらずとするも、外山博士の新體詩は果して詩的價値を有すべき乎。（同上）

俳句は主觀詩か

吾人は芭蕉以前の俳句が主觀詩なるを疑はず、然れども芭蕉にしてまた此舊圈套中に陷れりとせば、所謂正風なる者の從來の俳句に比して一轉化せし所果して何くにか存せる。檀林一輩の俳は其主觀詩なればこそ理窟に陷りて、支考が所謂『情を運べる』ものなれ。（支考が情とは心情の情にあらず、情由の情なり、事の所由なり、推理なり、）芭蕉は此道に古人なしと絶叫して、新たに正風の一派を建立するや、寧ろ重きを客觀に置けり。天然と人事とを以て主觀を發顯するの材料となさずして、寧ろ天地の美中

に自己を埋沒して、自然そのまゝを歌はんとはせるなり。芭蕉は支考が所謂『たゞ今の眼界にたゞ今の姿浮びてそれをそのまゝに作れる』なり。芭蕉が詩の天地は寧ろ自然にありて自己に非ず、彼が如何に其弟子に『私意を離れよ』と敎へたるを知らずや、私意を離れよとは偏小なる自己の一箇想をすてゝ、天地の大理想に融化せよといふなり。支考が『俳諧の門に入るものゝ、第一に意の鹽梅をはなれ、第二に耳の學問をすてよ』といへるも、亦此意に外ならず。假令芭蕉が俳諧は老後の樂なりといひたりとて、それによりて俳が必ずしも客觀詩に非ずと斷ずるを得むや、客觀詩なりとて之を作るものゝ主觀に愉樂の感を生せざらむや、主觀の詩に非ずんば主觀の快感を主せずといはゞ、天下亦此の如き不合理の言あらむや。よし客觀詩なりとも、客觀が主觀を經過せずして詩として現れ出づべきや、客觀詩に於ける主觀の快感は、その客觀が主觀を經過するの時にあり、戲曲の作者はいつも快味を感ずるとなくして之をなすべきや。吾人は帝國文學子が『短歌と俳句』に於て、その『新らしき玉を取らむとして既に有するの金ヶ擲つものは予輩の事に非ず』といふは吾人之に服す。唯短歌と俳句と共に是れ主觀詩なりといふに至ては吾人敢て首肯する能はず、天下何の處にか主觀に出でざるの詩あらむ、而して其詩に主觀と客觀とを別つ必要その發揮する所の客象に存すると主觀に存するとの差異による而已。（同上）

輕浮と沈着

當世は勿體振りたるを沈着と心得、直言するを輕浮といふ。聞きかじりの哲學論、急にヤレ氣韻で候の、審美觀念で候のと、七六ヶ敷文句を並べ、シヤに構へての御說法、口賢う仰せらるれど、それで自家獨得の領解があるといふではなし、書物の文句其儘を受賣する目先學問、知たか振りの潛上は鼻につく、コンナ事が沈着ならば吾等は沈着とやらは嫌ひなり。直言讜語吾人は唯その信ずる所をいふのみ、矯飾は仕らず、持て生れた虛僞つき嫌ひ、表に言を飾りて黨同伐異の私心を逞ふするとはキツイ疑ぐり哉。人間もとより一個の定識本領無かる可からず、吾等は或者流の如く骨なく筋なき海鼠樣の記實とか申すものは知らず、吾人は唯吾本領とする所、定見とする所に從て批評の筆を執る、もとより吾に同じさに黨し、吾に異なるを伐つは當然のみ、されども決して秋毫の私心を懷抱は仕らず。但し盲人が公平の色の見分手なりといはば吾人はもとより私心を抱くものなるべし、否吾人は甘んじて其名をうけん、盲目滅方に玉石の分ちもなく紹介と申す事をするが公平とかなれば、吾人は公平とか申すものは嫌ひなり。

されども吾人は可及丈同情の眼を以て天下を視んと欲するものなり、敢て輕々しく人の褒貶は仕らず、吾人は痛罵すべきは之を痛罵し、冷嘲すべきは之を冷嘲す、然れども吾人はまた眞摯の涙を灑いで大息痛哭するなり。吾人は果して眞に文を讀むの眼識なく、徒に字句の末を捉へて云々するか、吾人は之を知らず。然れどもかの冷嘲の文字を執つて之を以て直に眞摯の言なりとなす者流、果して眞に文を讀むの眼識あり、徒らに字句の末を執つて云々せざるもの乎。吾人は茲に至て哄然として大笑するを禁ずる能はず。嗚呼天下熱血の人少なく、故らに冷靜沈着を飾りて隱々の裡に他を毀傷せんとするの徒滔々是れなり、吾人は寧ろ大言壯語の人たらむ哉。（廿八年七月）

達者の言

一藝の士以て語るに足る、古人之をいへり。夫れ解牛の徒、承蜩のもの、猶其技に於て至れるものなり、至れるの技必ず入神の所あり、入神の所もと之を内に得て而して外に通ず、自得の妙ありて然るもの。此妙や之を師に受けず、之を人に承けず、自ら天分の然らしむるものありて自悟自得す。而して其自得自悟の境、假令技に大小あり藝に高卑の別ありといへども、而かも自から道に通ずるものなくむばあらず。彼等目

に一丁の文字なきも、其極致に至れる者に在ては、尋常凡庸の蠹魚學者の到り得ざる所を知る。何ぞや、極致の所之を文字の皮相に得可からず、言句の末葉に知る可からず、唯天分のもの自ら之を得るあるのみなればなり。故に彼等一藝の士と雖も、其達せる者と語る、必ずしも一日打坐の讀書に勝らざるものなしとせず。吾人は頃日新聞雜誌の類に技藝のものゝ談を掲載するを見るを喜ぶ。『日本宗教』には毎號必ずこれに一欄を割き、『報知』には團洲、『毎日』には梅幸の談あり、『速記彙報』『名家談叢』の類また時に此等の士の談を叙す、彼等が自得實踐の境皆共に頗る聞くに足るものあり。而して彼等が藝道に於ける工夫や、覺悟や、豈に亦推して以て吾人文士の訓戒となすに足らざらむや。咀嚼玩索其不盡の意を味へ。（二十八年八月）

如何にして大文學者を得ん乎

近時評論家として、意氣稜々字に風霜を挾み當世を痛罵大叱する者を内村鑑三氏となす。氏の文は信に文界の防腐藥たり、而して又興奮劑たるに足る。氏さきに『國民之友』に、大文學何の時にか出づべきと絶叫して、大に今日の文界の狀態に慷慨し、頃日また同誌上に『如何にして大文學者を得むか』と題して文學者の修養を論ず。實に

吾人の志を得たり。その文躰を論じて『思惟を養ふの術是れ根本的修文術なり』といひ、世界文學の攻究を說きて『高からむと欲せば希伯來聖書にゆき、深からむと欲せばダンテの跡を踐み、廣からむと欲せば沙翁の眼に賴り、英氣をゥーメルに汲み、包格をゲーテに覓めよ』といひ、更に自然の觀察を說きて『未來の大文學者は敬虔を以てする自然の密察より來る』といひ、品性の修養を說きて『インスピレーション』、神來の思想天意は電氣の如く理化的工夫を以て招く可らず、是に接するに、惟淸淨潔白天地に恥ぢざる心あるものゝみ之を得べし』といふ、嗚呼今日の文界腐敗し、敗德敗行、小才氣小利口の徒を以てみたさる、氏の言の如きまゝ矯激に過ぐるなき能はざるも、また以て瞑眩の良藥たるに足るべき乎。而して氏もし吾人をして一語を加へしむるを許さば、吾人はまさに云はん、大文學者は大狂熱なかる可らずと。(二十八年八月)

詩想の涵養

所謂大作とは心よりも其形の長きをいはず、鉅なるをいはず、唯其想の高且大あるをいふのみ。今日の事長篇なきを憂へず、大篇なきを憂へず、唯高且大なるの想に缺くる所あるを憂ふ。吾人は今日に於て、大文豪の何の時にか出でんを絕叫するもの多きをきく。然れども知らずや、一升の袋は常に一升を容れ得可きのみ、素養なきの徒に向つて徒に大作をしと責む、これ猶氷上に鐵塊を載せよといはむが如けんのみ、到底出來ぬ相談なり。今日の所謂文學者中露伴の外一二の輩を除きては、眞に根柢より素養あるもの果して幾人ぞ、摸倣か、剽竊か、否らずむば器用のみ。吾人は敢て詩人は生るゝものに非ずといはず、天才は天品ならずといはず。然れども樸は玉に非ず、樸の玉たるに琢磨を要す可くむば、生れたるの詩人と雖も、其詩人たるに於て豈に涵養を要せざらむや。今日の文學者既に素養あし、根柢なし、故に其打出の花々しきに似ず、久しからずして便ち氣耗き力索く、一二年より長きも四五年に出でず。或は之を社會の厭き易きに歸すれども、然れども其實文士の素養根柢なきが爲めに、常に千篇一律に陷りて社會に厭かるゝなり。社會の厭き易きには非ず、文士の壓かれ易きものを作るなり。罪、作る者にありて讀む者に非ず。嗚呼文士の厭かれ易きこと當に此の如くならば、何の時にか、不磨の名を有すべき大文豪と、不朽の命を有すべき大作を出ださむや。吾人は敢て今日の文士に忠告す、素養あれよ、根柢あれよ、詩想を涵養せよと。素養なく根柢なければ摸倣に流れざるを得ず、剽竊に陷らざるを得ず、器用にまかせざるを得ず。源泉涸る流れの奔逸望む可からず、千篇一律に失せざるを得ず。

吾人は今日の文士を數へて一々に此等の弊あるを指摘するをなさじ。唯吾人は此等の文士に向て、奮て詩想を涵養せんことを望むものなり。然らば詩想の涵養如何せば即ち可ならむ、二法あり曰く讀書と旅行と。古人既に未讀の書を讀み、未見の山水を見るを以て二大快心の事となす。吾人は寧ろ此等の事の詩想を涵養するに於て二大有益の事として之を今の文士に推薦せんとす。（廿八年十月）

『禪學と俳句』

『太陽』の文學記者、禪學と俳句とを以て國民の小量と懶惰とを示すものなりといふ。果して然る乎。もとより我國民の輕浮にして、忽ちに流行し忽ちに倦むを知る。然れども禪學と俳句そのもの果して國民の小量と懶惰を示すべきものなりや。吾人の意を以てすれば、禪學なるものは一種の實行的哲學なり。哲學が論證の方法によりて究竟の原理を窮めんとするの傍に在りて、禪なるものは結跏趺座の方法によりて、直覺的に究竟絶對の本躰を觀んとするものなり。論者は禪に於て論證の法を假らず、頓悟直覺の法によらんとするを以て、當さに爲すべき必要なる條件と準備とを忘るゝものとなす。然れども人の智は必ず論證の法を假らざれば或見地に達するを得ざる可き乎。

頓悟一躍して直下に其源頭に到るを得ざる可き乎。必ず或必要なる條件と準備とを具へ、階を躡み級を拾ふて上る、これ寧ろ庸者の事にあらざる可き乎。論者は禪を以て、必至の手段として當事者のなさに爲すべきの勞資を吝むものなりといふ。吝むにあらず、之を待つを要せざるなり。猶之を以て懶惰なりといふ可き乎。禪學そのものは堅忍精進の實行を主とす。猶之を懶惰といふべき乎。禪は宗教として最も迷信なき宗教なり、而してまた直覺的に究竟の哲學的本躰を認識せしむ。吾人は此種のもの、普く人心に浸漸するを以て、國民を懶惰たらしむべしとは信せず。唯禪の本旨を誤り直指人心、教外別傳を以て、勞せずして功果を收め得べきの說なりとして、懶惰の民心之に乘ずるあるのみ。懶惰たらしむるにあらず、懶惰のもの之に就けるのみ。枯寂冥目の態、いふ莫れ懶惰人の事と。其理、瀝血殫精大死するの事あるを知らざる可らず。懶惰なる國民が之をなせしを以て、禪學は懶惰のものなりといふ可らず、國民の懶惰は其國民の過のみ、此禍を以て直ちに禪に嫁せんとするは大に不可なり。又俳句の流行も、其詩躰の短くして入り易きより來せるもの、其流行は以て國民の小量を示すものならむ歟。然れども俳句なるものが直ちに國民の小量の反映なりとはいふを得じ。俳句は寧ろ從來の詩が抒情に偏せるより、進んで更に廣く材を重に自然の間に求めた

るものなり。材に於て啻に然るのみならず、其用語に於ても、漢語、雅語、俗語等、廣く一切の語を用ゐて憚る所なかりしにあらずや。其想に於てもまた老莊儒佛に出入せるを見る。論者は何の見る所あつてか、俳句を以て直ちに國民の小量を示すものとなせし乎。論者は句躰の小を以ての故にいふまと此の如くなりしにはあらざる乎。果して然らば論者は形に拘して事を斷せんとするの弊に陷れるものといはざる可らず。それ俳句は直下に美の中心を攫み、禪は直下に究竟の本躰を捉ふ。直截なると二者相似たり。然れども二者等しく決して懶惰と小量とを示すものにあらず。知らずや俳は最も寛濶の風ありし元祿に盛に、禪は剛毅の風ありし鎌倉時代に盛なりしを。(廿九年六月)

文學と民心

民友記者文學と民心とを說く、吾人の所見と異なるあり。今日の文士、民友記者の所謂一代の才人が頭を富兒俗漢の前に屈するは、彼等に確乎たる所信なく本領あければなり。彼等は知己を百代の後に待つと能はずして、當世の趨勢に媚びんとす。故に彼等は書肆に奴隷して書肆の要求に聽く。而して彼れ書肆たるものは、唯利を見るのみ。

書の賣高多からんを欲するのみ、從て所謂俗受ならんと欲す。庸衆は愚俗のみ、國民多數の嗜好に投せんとするは、即ち愚俗の好に應せんとするのみ。夫れ詩は永久を謠ふべし、一時を歌はず。大才は朽ちず、必ずしも當世と與にせず。而して彼の所謂愚衆の嗜好あるものは一時の流行のみ、之を謠ふ詩は時と共に朽ちん。詩人は必ず一時に阿ねるを要せず、永久の生命を觀ざる可らず。必ずしも國民の心胸に宿るを要せず、人間なるものの最奥琴線に觸接するを要す。個人をみることを要せず、人生をみざる可らず、大才の作の朽ちざるは一時に媚びざればなり、彼の一語一句悉く人間內奥の琴線に觸る、故に人生のあらん限り、人間の盡きざらん限り、其作は千古に活きてよく人を聳動す。若し一時に媚び當世に阿ねらん乎、時好は朝夕に即ち變ず。彼の作よく一時の喝采を博するとあらん、而かも彼等は當世の詩人としてやまん、一代にして其名即ち滅びん而已。總ての心の中に潛める無數の感慨、無限の情緒を調和して鏘々の響をなすの詩人の心たる、實に民友記者の言の如し。然れども總ての心の中に秘める無數の感慨、無限の情緒なるものは、即ち既に一國民の心胸にあらず。早くこれ人生の情緒感慨のみ。詩人にして涙あり之を濺ぐべき客觀の存在なかるべからざること、また民友記者の言の如し。然れども其對象は必ずしも一國民の心胸にあらずんば以て涙

を濺ぐに足らざるの理なきなり。人生なるものは、以て其對象たるに足らざるべき乎。一國民たるもよし、個人たるもよし、唯詩人は此裡に人生を認むるのみ、一人を描くも人生を描くなり。一國民を寫すも、人生を描くなり。既に人生を描く故に、一人を描き一國民を寫すも、其作よく不朽に、よく不磨たるを得。民友記者が作家を國民に觸接せしめよといふは、寧ろ作家を人生に觸接せしめよといふの妥當なるに若かざるなり。偶然に邂逅する途上の一人にも、猶其中に無限の感慨と絶大の教訓とを認むるを得るものは、其一人に人生を認めたればなり、人間普徧の生命を認めたればあり。其一人ははやくこれ一人ゐあらずして、一の人間普徧の生命のみ、人生あるものゝみ。嗚呼文士一時と相渉らざる何ぞ憾みん、古來大才のもの多く當世と容れず。蓋し大才愚衆の眼孔に映ずる能はざればなり。愚衆の嗜好何ぞ以て大才の眞價を品隲するに足らんや。直前にして勇往せよ、頭を書肆の前に屈して當時の嗜好に阿ねるが如きの文士は、何ぞこれと共に文學をいふに足らんや、詩を語るに足らんや。彼等の才の銷磨吾人は憂へず。此の如きの徒は寧ろ亡きに如かざればなり。（同上）

偉人の追想

今の日本の社會、彼の蠢々たる小才子小利口を以て滿たさる。彼等の爲す所は巧詐に非されは權謀、己れを利するに非されは即ち他を擠す、利を見て動き、義を見て爲さず、節操なく廉耻なく、滑脫自ら喜び、輕薄自ら得、皮相に驚せ、浮靡に趨むく。紳士と稱するもの此れのみ、紳商と稱するもの此れのみ、政治家と稱し實業家と稱するまた此れのみ、大臣これのみ、屬吏これのみ、博士これのみ、學者これのみ、滔々たる天下を擧けて皆これのみ。今に於て刷新せすんば、社會の腐敗遂に極まる所なからむ、革新の事業は至難なり、諸々諂笑の間になし得へきに非ず、浮華輕薄兒のよくし得る所に非す。豫言者的の透徹せる眼光を有し、宗教者的の摯實ある熱意を有し、溢るゝ如きの同情を有する沈痛熱誠眞摯多涙の人のみよく之を爲すへし。是に於て乎人漸く此種の人を懷うて、而して今の世終に此種の人物なし。今に求めて得ず、之を古に想ふ。今日『偉人史叢』の如き『阪本龍馬』傳の如き、偉人の傳記の世に行はるゝもの、豈に天下か今日の蠕々たる小才子小利口に飽き、偉人を得て沈滯せる氣運の一刷新を欲するに非ざらんや。嗚呼偉人の追想は天下今の小才子小利口に厭けるの響なり、天下漸く一大刷新を懷ふの響なり。（廿九年九月）

罵時嘲俗の風

巖石屹として動かず、故に流れ激す。社會の裏面を暴露するは去年文界の風潮たりき。之を暴露して社會の敗德依然、此に於て乎激して罵時嘲俗の絶叫となる。嘲罵もとより美德に非ずと雖ども、鈍馬は鞭を以てこれに臨まざる可らず。諷して聽かれずんば、鞭撻これに次く、嘲罵またやむ可らず。嘲罵するもの罪なし、罪は社會の敗德者にあり。嘲罵するものたゞ罪なきのみならむや、彼等は寧ろ眞摯の人のみ、熱情の人のみ、燃ゆるか如き同情之を社會に注いで、社會面を背くれば、此燃るか如きの同情は激して熱罵の猛焰たらずんはあらず。『國民之友』夏期附錄所載の內村氏の『時勢の觀察』の一篇の如き豈に矯激する所なくして然らんや。社會の輕佻、內村氏の如き熱誠の人を容るゝ能はず、狷介の人の流俗に容れられざる古よりして然り、壁を抱て不遇に哭く、天下豈に獨り卞和のみならんや。鬱勃たる才抑塞せられて、時と遇はず、之れを哭するに次くに憤を以てす、淋漓たる滿腔の不平を以て之を紙墨の間に發す、八面の鋒を揮つて縱橫に奮迅す。官吏を罵り、政治家を罵り、學者を罵り、終に延ひて同胞を罵り、祖國を罵る、其言や矯激に過ぐるも、氏をして此言を發せしめたる所以を思へば、

吾人悚然として襟を正うせざる能はず。嗚呼社會の敗德今にして矯正の術を施さずんば、天下後世を如何せん。羅馬は一日にして亡びず、邦家百年の憂はそれ國民の腐敗にある哉。吾人は內村氏の言を悲み、而して內村氏をして此言あらしめたる所以を思うて痛哭長大息せずんばあらざるなり。罵時嘲俗の絶叫今日に在てまた社會の病毒を撲滅するの消毒劑たらずんばあらず。(同上)

批評家と作家

批評家と作家と相敵視す。吾人は今日文士の狹量を慨せずばあらず。評家同情なく、作家寛容なし。作家評家の言を以て採るに足らずとし、評家作家を一勾抹に貶し去る。評家は作家の苦心をみる能はざるなり、作家は評家の忠言を容るゝ能はざるなり。作家は評者の言によつて三省するを要す、評家は作家の惡所を指適すると共に、また美所を發揮するを忘る可らず。相敵視し相嫉視す、文界は終に罵詈の場たらむ。此の如きは文學に忠といふ可からず。野夫の言また聽くべきものありとせば、評家の言豈に容るゝに足るものなからむや。蟾蜍にも珠ありとせば、作家の作豈にまた美ある所莫らんや。而るに今の評家と作家と相反目し、相疾視するもの、要之するに寛恕の心な

く、同情なきに座せすんばあらず。今の評家や作家や、局量終に芥子粒にだも若かざらむ。作家たるもの胸襟を披け評家たるもの赤心を推せよ。此の如くにして相親み、相睦む、洵に文界の祥事たり。敵をだも猶愛せよといふに非ずや、況んや敵たらざるものに於てをや。作家と評家とは相輔け、相扶けて、以て進まざる可らざるなり。作家の瀘機の如くならざる可らざるなり。（同上）

俳句の題詠

詩は眞情を吐露するもの、題咏なるものは詩の本意に非ず。歌は萬葉の調より古今に至りて變ず、眞情を吐露するものよりして題咏に移りたるあり、古今に至りて詩の本旨失す。眞情を吐露するものに非ざるに至ては、詩は一の游戯文字のみ。吾人か俳句を稱して游戯文字なりといふは、俳句が題咏となりたるをいふなり。吾人がまた俳を即興即題なりといふも、また此義に外ならず。即興即題のものたるが故に、吾人は彼の俳を視ると專業の如くなるを不可とす。專業の如くする猶可なり、題咏を以てするに至ては大に不可なり。吾人は頃日俳壇に切りに題咏の風行はれんとするを見て、俳の本旨失はれんことを憂ふ。吾人は遣の資として短かき十七文字の俳句を最良の詩なりと信ず。敢て題の奇を弄し、其才を衒はんとする、吾人與みせず。（同上）

餘韻と印象の明瞭と

『日本人』の虚子氏、其『曼珠沙華』に於て、印象の明瞭と餘韻と相伴はざるとなしと論ず。然れども餘韻とは氏が自ら言へる如く、連想に基くものたり、然り餘韻あるものは、詩の讀者が、其の語の語句によりて其語句以外に其自己の想像を馳するの上に於て存するものなり。既に然らば、其語句の與ふる情景の印象明白なるだけ想像を馳す餘べき餘地は減ぜられて、終に連想すべき情景あるに至るべきに非らずや。もし詩の語句にして情景を叙述して委曲精細ならしめば、所謂餘情といひ餘韻といふもの、何の處にか存せんや。餘韻あり、餘情あるが故に、吾人は或語句を指して詩的なりといふなり。叙述し得て委曲ならしめば、其語句は既に詩にあらずして散文的ならんのみ。假令韻を押み調を整へしむるも、餘韻なく餘情なきものは、斷々として詩にあらざるなり、押韻整調の散文たらんのみ。故によく讀者の感興を惹起さんには、其詩に語句以外に讀者の想像をして自在に馳騁せしむるを得べき閑地を留むるを要す。委曲精細叙述して遺漏なきは詩の妙にあらず。然れども詩は言語によりて讀者に想像上の

情景を感興せしむるものなり。故に詩に於て餘韻饒からんを欲せば、叙述の委曲精細ならざるを要すると共に、主なる情景を說くことを重くして、その印象を特に讀者に明白にせんとを要す。俳句に於て、氏等が美の中心を捉ふるといふもの、實にこれのみ。此捉へ得たる中心の印象を特に明白にして、その之に伴ふ情景を讀者の想像に訴ふるが故に、十七字の短文字、猶よく宇宙の美を描寫して餘りあるなり。一々仔細に情景を叙述して、其情景悉くの印象を明白にせんと欲せば、三十一文字猶足らざるべし、況んや十七文字の短をや。故に俳に於て印象の明白を要するは、所謂捉へ得たる美の中心にあり。これにして印象明白なるほど、讀者の連想を惹起すと多きは勿論なれども。此主なる印象を明白にせんとするだけ、之に伴ふ情景はます〳〵朦朧の中に葬られざるを得ず。十七字の短詩形に於ては、餘韻は主なる印象の明白なる度によるべし。虛子氏は單に印象の朦朧を排せど、之を客觀の實物についていへば、日沒せんとして、餘紅猶西天を染めて、晩靄蒼く、暮山紫なるの風色の、午晝の景色に比して吾人の美を感すること饒きを想はゞ、朦朧の餘韻に於ける力の大なるを認めむ。唯詩に在ては、言語を假りて情景を寫す。故に力を極めて主なる現象を寫して、其印象を明白ならしむるは、則ち其之に伴ふ情景を朦朧にして、讀者の想像を馳するの餘地を饒からしむるものにして、所謂餘情なるものは此朦朧の境に存せるなることを知らざる可らず。主なる印象の明白は餘情にあらず、之に伴へる朦朧即ち餘情のみ。虛子氏の單に印象の明瞭と餘情とを兩立せしめんとするは、語の足らざる乎。抑もまた意猶至らざる乎。餘情は朦朧にあり、俳句の要は主なる印象を彌々明白ならしめて、餘情の彌々饒からんを欲するのみ、（二十九年十一月）

漢字廢止を排す

ユートピヤ眞に到り得べくば、漢字廢止の說或は行はれん。ユートピヤ境佳ならざるに非ず、漢字の廢止得べくんば甚可也。然れどもユートピヤと同じく、此も亦一種の空想也。言ふ可くして行ふ可らざるの說也。吾人は頑迷に舊を株守するの愚を爲さんとするものに非ずと雖ども、然れども事に由來あり、來歷あり、即ち歷史あり。總て改良なるもの、歷史を離れて成立し得べきに非ず。夫れ漢字は吾國固有の文字に非ざるや論なし、然れども漢字に由て表されたる漢語は、千年來襲用せられて吾國語と融化せられ、吾國語の性質を有するに至れり。今や漢語の使用は、歐洲の各國語に希臘拉丁の語が、其國語化して使用せらるゝが如く、既に其性質、其國語と化せるもの

なれは、之が使用を廢せんことは決して爲し能ふ可きの事に非ず。漢語の使用既に廢す可らずとせば、此漢語を表はすに漢字に非ざるものを以てせんことは能ふ可らず、固より泰西諸國に於ては希拉の語が其國字によつて表はさるゝと雖ども、是れ共に韻音文字にして性質を同ふすれば也。

漢字の如き形象文字の、一語にして數音を有するものを、假名若しくは羅馬字の如き音韻字を以て表はさんとせば、音の上に複雜を來たして、難解難讀のものとなるは、源氏一部の書明かに之を證するに足るべきに非ずや。且夫れ文字ある者は耳に訴ふるものに非らざる也、目に訴ふるに於ては形象文字と、音韻文字と便不便徑庭する無き也。否寧ろ形象字の一語一字に約せられたるものゝ、意義の解せられ得て速なるを知る也。蓋し形象文字は形を表する也、見て直に其音を察す可し。音韻字は音を表する也、之を口に上せ耳に傳ふるに由て、初めて意を解すべきもの也、吾人は文字として形象文字の不便を認めず、從て漢字の不便を認めず、但漢字の字畫複雜、字數夥多、學び易からざるの故を以て漢字廢止の一大理由となすべきに似たれども、字畫の複雜は之を音に表はせる上の複雜と孰れなるべく、字數の夥多將た專門の漢古文學者以外の者の口にすべき謂れなき事也。猶漢語が國語と混じて用ゐらるゝの間は、漢語と漢字を用ゐたるものを學ぶと、漢語を音韻に表したるものを學ぶと、寧ろ何れか難かるべき、論を待たざる可き也。四十七文字若くは五十字は、數に於て固より漢字より夐かに少し、然れども既に語をなせる上に於ては何の相違かある。假名に由て綴られたる語も、一字即一語の漢字も、語數に於て何の相違かあるべき。畢竟するに漢字廢止は先づ漢語廢止の後に之をいふべき而已。今日の漢字廢止論者の如きは、昔日歐化主義の迷夢猶未だ全く醒めざるもの、西歐諸邦の文字が音韻なるに惑うて我を以て彼を模せんとするもの也。事に歷史と境遇とあるを忘れたる皮相の見解也。

世に又漢字多き文を非難するものあり笑ふ可き哉。字を使ふは作者の權利也、作者己が識と學とを以て字を使ふ。平易なるも、佶屈なるも、流暢なるも、贅牙なるも、畢竟するに作者の意の欲する所にあり。決して讀者の喙を容るゝを許さゞる也。作者又讀者の爲めに意を枉げて己を下だすを要せざる也。（三十一年九月）

古學を學ぶの要

吾人嘗て之を一武人に聞けることあり、今の士官校に入り來る者、形而下の學に於て智

識足らざるに非ず、細節に於て通せざるに非ず。唯彼等士たるの品位と器量とを欠き、大體に通せず、人に長たる所以の器なし。是れ彼等に漢學の素養乏しければ也と。是ある哉。夫れ古學は人の氣品を作る所以の者也。故に泰西の學校、今猶兒童に希拉の古學を課するをやめず。若し學問するものをして單に字を識り事を解するのみにして足らば、古學は固より無用也。然れども學問の目的は全く形而下の蒙を啓くのみにあらざる也。別に精神の修養を目的とする也。今の學は智識を作り。古の學は識見を養ふ。今の學は形而下唯物の智識を啓く也、古の學は精神に糧を與ふる也。今の學は機械を作る也、古の學は人を作る也。古學は此點に於て大益ある也。今の古學を無用といふものは、功利唯物より打算せる慣々の徒の論なるのみ。（二十一年九月）

一葉女史の『にごりえ』

境遇は人をつくるといふ、然り、人の境遇に制せらるゝと洵に大事と雖も、されども人また其の内奥一點の靈性、之を熱して融けず、之を鑄て而して變せざるものあつて存せずんばあらず。故に人を觀るに境遇によれる習性のみを以て之を斷すべからず。境遇のなす所は、己欲して之を爲すに非らず、己の罪にあらず、境遇の罪のみ。境遇の罪を以て人に責むるは、鑛中にあるを以て黄金をすつるものなし。人病的にあらざるよりは、何等狼戾の徒と雖も、またその裡自ら隱約藏し得ざるの靈性なるものなくんばあらず。此の靈性や智の謂にあらず、意の謂にあらず、純なるの情これのみ、智や、意や、眞僞あり、是非あり、善惡あり。唯情や、眞僞なし、是非なし、善惡なし、ありのまゝの本体也、智や辨ず、故に眞僞あり、是非あり、意や欲す故に善惡分る。既に善惡と是非と眞僞とあり、乃ち古今を以て同じからず、東西を以て善あり、唯眞僞なし、是非なし、善惡なし、故に古より今に渉り、東と西とを該ねて、情に二致なし、唯智之に加はり、意之に加はるに於て、善惡こゝに生じ、是非こゝに生じ、眞僞こゝに生じ、純なるの情は裸裸々、赤條々、本質を露呈す。唯人や意あり、智あり、情を包圍して存ず、智情を飾つて僞となり、意、情に加はつて欲となる。此欲や此僞や念々刻々事に觸れ物に應じて心に發す。純なるの情は之がために掩はれて其の眞光を洩す能はず。而も洩す能はずと雖も、内に伏し内に隱れて猶ほ潛勢の力を滅せず、物に觸れて時に一閃す、電光石火捕捉し易からず、唯瞥見すべき而已、故に之を察すると甚た難。於是乎彼の慣々たる庸者、唯皮相をみるのみ、習性は現はれて日常動作の上に出づ、之を見るは易し、既にみるは易し、便

ち此の習性を捕へて、直に人を斷ず、其精神を問はず、其本領を問はず、其行の迹を以て直ちに之を斷ず。嗚呼何ぞ其の怨酷にして恩少きや。人を觀るには寛恕を要す、同情を要す、皮相を徹して奥底のみ、之を庇護するの心を以て之にのぞまざる可からず、所謂ヒューマニチーなるもの此に存ず。かのユーゴーの如何に其の同情の憐れみを以てジャンヴァルジャンを描きたるか、ユーゴーをヒューマニチーの人といふはこれが爲め而已。

唯に尋常人が人を觀るに寛恕之にのそまざる可からさるのみならず、殊に小説家として人間を活寫せんとするもの、最も彼の慈悲眼を要す。成心を以て之をみる可からず、善惡無差別にして之に對せざる可からず、始めより惡を惡み善をよみする意ありて筆を下すならむ乎、善者は常に善、惡者は常に惡、惡と善と劃然として別あらむ。然れども人情は微妙なり、人心は隱秘也、惡者必しも常に惡ならず、善者必ずしも常に善ならず、欲の動く、僞の生ずる、人たるもの輙ち免れず。善者豈常に善ならんや。本心の醒むる、良心の閃く、人これなきはあらず、惡者豈常に惡ならんや。たゞそれ迹を見て、故に善は常に善に、惡は常に惡、而も一たび深く内奥の琴線にきかば、人心の波動或は高或は低、相錯綜す。小説家たるもの果して人間を活寫せんとす、善惡美醜並べ描

かざる可からず。其皮相を描くものは、是れ人間の半面をうつす而已、人間を死寫するのみ、昔は俳人晋其角猿簑の序に芭蕉の猿に魂を入れたるをいふ。今小説家にして如此に、人間をうつすものあらば、これ靈あるの人間より其の靈を拔去つて之をうつす也。豈よく人間をうつしたりといはんや。小説家の眼光は深きに徹して惡者の爲めにも泣かざるべからず、惡の惡たる所以に泣くにあらず、惡の惡たらざるを得ざりしに泣くなり、其の境遇を罰して其良心の爲めに泣くなり。其の匪行を描くと共にかの靈性一瞥の閃光を捉へ來つて之を明々地に顯示せざる可からず。認め難きの閃光を捉へて、これを繫住して之を彼の之を看得ざる尋常庸者に看せしむ。既に所謂惡者なるもの丶、常に惡にあらずして、境遇の然らしむる所、習性の然らしむる所を曉知し得、豈所謂彼の惡者の惡者たらざるを得ざりし心情を酌んで一滴の涙を灑がざらむや。所謂法律なるものは行の迹を罰するのみ、所謂社會の制裁なるものは業の本を咎むるのみ。法律は精神を問はず、制裁は心術に拘はらず。嗚呼社會や、法律や、匪行は法律之を牢獄に投じ、社會は之を鄕黨に齒せず。此間に在て其の心術に入り、精神を問ひ、これが爲めに同情を表して慰籍の涙をそゝぐものは獨り小説家あるのみ、小説家なるものは此等のものが軈て以て活路を有するの一縷たるのみ。此小説家にしてまた

皮相をみるのみならしめば、此等のものは何の處にか其眞情を發露せむ、誰か其の靈性を顯はさん。ア、天地は蒼々茫々、社會は冷々淡々、法律は慘々酷々、小說家たるもの豈此間に抽んで、燃ゆるが如き熱情をそゝぎ、寬恕同情を表して此等に慈悲眼を垂るゝなくして可ならむや。

小說家たるもの　眼力は實に其美中醜を認め、醜中美を認むるの邊に在つて存ず。一瞥の閃光を捉へて之を其の眼前に繫住し得るものは。其の天才也。其人物を描くや、內よりし外よりし、表よりし裏よりし、正より側よりし、縱よりし、橫よりし、毫を剖き釐を拆ち、微に入り妙に出で、四方八面より之を描き、其人物を其人物の內奧を透して讀者の前に露呈し來らざる可からず。小說家は秦鏡の如く心肝臟腑をも照し來らざる可らず。然らざれば是れ傀儡の人間を寫すのみ、所作は則ち有り、精神はなし、此の如くにして活描といはんや、活寫といはんや。

吾人は一葉女史が『濁江』一篇を讀みて深く作者が犀利の眼光と、溢るゝ如き同情とに服す。女史は小說家として優に其の伎倆滔々たる當世に抽んづ。濁江一篇は賣春の女を主人公としたるもの、作者はこの厭惡すべき女性に向つて無量の同情をそゝぎ、細やかにその同情をうつし來る。

嗚呼かの賣春の女なるもの唯一の女德たる貞操をうるもの、醜陋の極、卑猥の極、士君子たるものゝ、口にするだに猶之を恥づべし。而も賣春の女彼れも女兒なり。その嘗て處女たりしの時、彼また豈處女の羞恥と純潔とあらざりしならんや。而して色を賣り貞操を賣るの人間の最大恥辱たるを知らざりしならむや。而かも色を賣り貞操を賣り、其の純潔を汚し其の羞恥を破らざる可からざりしの時に於て、その心情果して何にか似たる可き。その女性の最大の汚點たり、最大恥辱たりと知りながら其の最大汚點、最大恥辱を甘んじて受けざるを得ざるとせば、其の心胸の苦痛と煩悶と豈に言語のつくす所ならんや。而も彼等は猶ほ其の中心の苦悶と悲痛とを巧諛と笑語との下に隱して、此の最大恥辱最大汚辱とを喜んで受くるが如くせざる可からずとせば、誰か之を憐むべきの運命にあらずといはざらむ。其の皮相よりして之をみる、彼等はこの大恥辱のと、大汚辱の事を戲謔笑語の間に平然として之を爲す、信に惡むべく、賤しむべく大醜陋、大卑猥のものたるに似たり。而も知らずや、彼は活かんとして笑ふものたり哭せんとして謔るものなり。泣かんとして泣くを得ずして却て笑ひ、哭せんとして哭するを得ずして却て謔る、人間寧ろ之より悲慘のことあらんや。

嗚呼々々心中無限の悶々を將つて、却て他の弄するに資して粉黛を粧ひ媚を呈す賣春

の女其の行迹や惡むべし。而かも其の心術寧ろ一滴の涙をそゝぐべきもの莫からんや。嗚呼彼は人を迷はし、人を詐むく、人の心を蕩かし、人の財を絞るといふか。彼等と雖ども豈人を迷はし、人を欺き、人の心を蕩かし、人の財を絞るを以て而して快とし、潔とせんや。たゞ彼等は、さかせざる可からざるの運命に陷れるなり、さかせざるべからざるの境遇に落ちたるなり。境遇の罪なり、人の罪にあらざるなり。而して習の性となるや、或はそを以て快とし、之を以て潔とするに至ることなからむ乎。而も猶これ境遇の其の之を然らしめたるもの、彼等は是に至て寧ろ自らの罪の罪たるを知らむや、自ら罪を犯して自らその罪の罪たるを知らざるに至る、豈寧ろ人生憐むべきの境にはあらずや。その人を欺むき、人を詐はるとはもとより罪也、而れどもこれ其罪に罪あるのみ、無邪氣可憐花蕾の如きの少女を自ら罪を犯しながらも其罪たるを知らざる迄に、墮落せしむるに至ては、境遇の罪豈少々なりとせんや。且つ夫れ貞操は女德の最重なるもの、既に之を忍んで之をしも破る、彼等何の行をか爲し得ざらむ。その道德の觀念に欠くるに至るもとよりその所。嗚呼天下賣春の女を指して禽獸といふ、而も此憐むべき女兒の貞操を破らしむる境遇の罪の更に惡むべきを知らざる也、噫。

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく、景色づくり、何處にからく

りのあるとも見ねねど、逆さ落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物とさくに。寄つてお出でよと甘へる聲も、蛇くふ雉子と恐しくなりぬ。さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃は、手打〳〵あわゝの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはお乳をれ吳れと手を出したるものなれば、今の稼業に誠はなくとも、百人の中の一人に眞からの涙こぼして（中略）常は人をも欺す口で人の愁らきを恨みの言葉頭痛を押へて思案にくれるものあり。今日は盆の十六日だ、お閻魔樣へのお詣りに連れ立つて通る子供達の、奇麗な着物さて小遣もらつて嬉しさうな顔してゆくは、定めて〳〵二人揃つて甲斐性のある親を持つて爲るのであろ。私の息子の與たのは今日の休みに御主人から暇が出て何處往つて何な事して遊ばうとも定めし人が羨しかる、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母はこんな身になつて恥かしいは紅白粉（中略）悲しさは女の身の寸燐の箱はりして一人に過しかたく、さりとて人の臺所を這ふも柔弱の身躰なれば、勤めがたく同じ憂き中にも身の樂なれば此んなとして日を送る夢さら浮いた心ではなけれど、言甲斐のないお袋と彼の子は定めし爪彈するのであらう。常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥しい、と夕ぐれの鏡の前に涙じむもあるべし。

看よ作者が如何に萬斛の同情を運むで彼等の心情を描き來れるかを、惻々として人をして泣かしめんとす、『今の稼業に誠はなくとも、百人の中の一人に眞からの涙こぼして』といひ、『此樣事して日を送る、夢さら浮いた心ではなけれど』といふ。嗚呼彼等を醜陋なり、卑猥なりと唾斥する、天下方正の君子、之を讀んでまた彼等か爲めに一滴の涙をそゝき給はずや。彼等が所業は素より淫猥なり、彼等が行跡はもとより放縱なり、而れどもまた一片憐むべきの心情、かくの如きものあるを忘る可からず。滔々たる天下僞善のみ、虛禮のみ、僞善ならざれば天下之を不德あり、不道なり、放恣なりと罵る、而るに今求めて此醜陋を表とし卑猥を銘打たるものゝ間に入る。叱罵せられ、唾斥せらるゝはもとよりその所なるを知りて、其の叱罵せられ唾斥せるゝ境に入る彼等と雖も其の叱罵せられ唾斥せらるゝを欲せんや、欲せずして之を爲さゞる可からず、其の心情また憐むべからずや、ア、天下の眼は皮一枚の上を見るのみ。孔雀を眞似る七面鳥を貴び、簑虫の形を惡むで父よとなく哀れを知らざるものの

更に進んで作者が一篇の主人公たるお力を寫し來るを見よ。彼が動作は如何にも放縱なり、所業はいかにも野卑なり。

頭もこの白粉も榮なく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろけて、煙草すば〳〵長烟管に立膝、作る

その無作法人をして面をそむけしむるに足るあらずや。

馴染はざら一面手紙のやりとりは反古の取かへツこ書けと仰しやれば起証でも誓紙でもお好み次第さし上げませう女夫やくそくなどゞ言つても、此方で破るよりは先方樣の性根なし、主人もちなら主人が怕く、親もちなら親のいゝなり、振向ひて見てくれねば、此方も追ひかけて袖をとらへるにも及ばず、夫ら廢せとて夫れ限りになりまする。

何ぞその浮薄にして定操なきや、其の面に唾せんとす。而れども其の浮薄や野卑なるの間更に深く其の心情を問へばまた人をして泣かしむるに足るものあり。

菊の井のお力とても惡魔の生れ替りにはあるまじ、さる仔細あればこそ、此處の流れに落ちこんで嘘のありたけ串談に其日を送つて、情は吉野紙の薄物に螢の光びつかりとする斗り、人の涙は百年も我慢して我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他處目も養ひつらめさりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゞまつて泣くにも人目を耻づれば二階坐敷の床の間に身を投じて忍び音の憂さ涙これ

をば友朋輩にも洩さじと包むに。根性の太つかりしたお氣の强い子といふものあれど。障ればたゆる蛛の糸のはかない所は知る人はなかりさ。

果然、作者は其はかなき所をみ得たり、如何に此放縱なるお力のはかなく哀れなる處を描き出さんとつとめたるを見よ。お力が

人間ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締よしだ、苦勞といふ事は太るまいといふれ客樣もござります、ほんに因果とでもいふものか、私が身位かなしいものはあるまいと思ひます。

と嘆じ、其の胸中の鬱々酒を以て僅に之を遣るのみ、

れ力が無理にも商賣してゐられるは、此力と思し召さぬか、私に酒氣が離れたら坐敷も三昧堂のやうになりませう。

嗚呼彼も人の子のみ。綾羅につゝまれ、錦裪に坐し、寶鼎香濃に、繡簾風細ゐに、東閣の上閨門深く鎖して空しく東風を怨むの人、これも亦人の子のみ。彼が粉を裝ひ媚を賣り其の色を賣り其操を賣らざるを得ざるの大恥辱大汚辱をうけて、而も悲痛訴ふるに處なく、僅かに酒に托して其悶を排するのみとせば、其の境涯また悲慘のものにあらざらむや。

悲慘々々、彼は强て之を笑謔に紛らし酒に托せんとするも、猶ほ時に悲慘の情に堪ゑざる所あり。作者がその客中にありて喧鬧の場にたゑず急に坐を逃れたるを寫すを看よ。

お力は一散に家を出で、行かれるものなら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ、〳〵、何うしたら人の聲も聞ゑない、物の音もしない靜かな〳〵自分の心も何もぼうつとして物思いのない處へ行かれるであろうつまらぬ、くだらぬ、面白くない情ない、悲しい、心細い中に何時まで私は止められてゐるのかしら、

これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ〳〵（中略）情ないとても誰も哀れと思うてくれる人はあるまじく、悲しいといへば商賣がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞ふゑゝ何うなりとも勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば分らぬなりに菊の井のお力を通して行かう、人情知らず義理知らずか、其樣な事も思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ此樣な身で此樣な行体で、此樣な宿世で、何うしたからとて人並では無には相違なければ人並の事を考へて苦勞する丈間違である。

此一節誰か之を讀んで襟を沾ほさゞるものぞ、境遇はお力を悲慘の深谷に擠れたり、

而かもその父祖遺傳の氣象はかくの如き醜陋卑猥の間に在つても猶銷し得ざる也、彼は『色の黑い、背の高い、人の好い斗りで、取得とては皆無』なる源七に彼は猶綿々たる一縷の情の、斷たんと欲して斷ち得ざるものあるなり、忘れんとして忘るゝ能はず、而かも彼は猶此の如き醜陋の境卑猥の境にいつまでも安んずるを欲せず、彼はお高にいはれたるが如く『氣位高』きなり、結城にいはれたる如く『出世を望』めるなり、忘られぬ乍らも『見るかげもなく貧乏』せる源七を忘れざるを得ざるなり、捨てられぬ乍らも『八百家の裏の小さな家にまい〳〵つぶらの樣になつて』住せる源七を捨てざるを得ざるなり。されども榮枯によりて其の愛を渝ゆるはその氣象にして忍んでなし得る所にあらざるなり。彼はまた結城に對して情なきにもあらず。

そも〳〵の最初から、私は貴方が好き好きで、一日お目にかゝらねば、戀しいほとなれども、奥樣にと言ふて下されたら、何うでござんしようか、持たれるは嫌なり他所なからは忌はしう。

然り、彼は結城に情なきに非ず而も其の遺傳なる豪放の性は屈して人の妻たるを屑とせざるなり。彼は猶一片の自尊あり、屈して榮達するを欲せず、而してまた其一片の氣象源七をも捨つるに忍びざるなり。

あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ計の彼子が先刻の人のでござんす。あの小さな子心にも、よく〳〵憎いと思ふと見ゑて、私の事をば鬼々といひまする、まあ其樣な惡者にも見ゑまするかとて空を見上げてホット息をつくさま、堪へかねたる樣子は五音の調子にあらはれぬ。

人は輕薄といへ、鬼といへ、蛇といへ、自らは鬼となり、蛇となり、輕佻となり、浮薄となる能はざるなり。結城に就かんか、源七を捨てんか、捨てんとして捨て得ず、就かんとして就き得ず、結城に對するの情も有無の間に迷ひ、源七に對するの情も有無の間に迷ひ、就かんか、去らんか、去らんか、就かんか、迷また迷、悶また悶。彼はこの胸底の迷と悶とを齎らして源七が刄に死しぬ、彼は捨てずまた就かず、彼は死によつて永く其の迷を離れ、悶を斷てり。知らずして殺されたるか、相約して死したるか。はたまた故らに其の手に死せる歟、嗚呼これも亦有無の間に存ず。

吾人は敢て此の篇を以て些の瑕疵なしといはず、而れども作者がお力に向つて無量の同情をそゝぎ、其の醜陋卑猥に包まれたる一點憐むべきの心情を、彼に代はつて發露し來りたるに向つて十二分の賞贊を作者に呈するを躊躇せず。近時有髯の作家中、猶よく此作に駕して遜色なきを得るものありや、作者が新進として優に其伎倆を先輩に

抽づると、其の筆致の輕妙、着眼の奇警、觀察の精緻、大に天外と相似たるものなきに非らず。吾人は後進中に在つて男作者には天外を推し、女流に在つては此作者を推す。二人は實に今日文壇の麒麟兒なる哉。

此作者が筆致のこまやかにあはれに神采の躍動せる試みに左の一節を見よ。

あゝ陰氣らしい、何だとて此處な處に立つて居るのか、何しに此樣な處へ出て來たのか、馬鹿らしい、氣違ぢみた、我身ながら分らぬ、もう〳〵歸りませうとて橫町の闇をば出はなれて、夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぼら〳〵歩るけば、行かよふ人の顏少さくすれ違ふ人の顏さへも遙かとほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一寸も上にあがり居る如く、がや〳〵といふ聲は聞ゆれど、井の底に物を落したる如き響に聞さなされて人の聲は人の聲、我が考は考と別々になりて更に何事にも氣のまぎれるものなく云々

豈に是れ神助の文にはあらずや、神來の詩にはあらずや、入神の筆にはあらずや。

（廿九年十二月）

其二

露伴

天才は一種の狂熱を有す、今の小說家中に在て此狂熱あるもの獨り露伴あるのみ。諸他碌々の者に至ては悉く是れ小才子のみ、小利口のみ、小利口なり、故に眞摯ならす、小才子なり、故に熱誠なし、眞摯ならす、故に浮薄あり、故に輕佻なり、彼等胸中眞に鬱勃抑壓すへからさるものあつて而後之を筆端に發するに非す。彼等或は名の爲めに、或は利の爲めに、涸れたる腦漿を絞り、餒えたる心氣を驅つて字を駢へ句を聯ぬるのみ、既に自ら抑塞す可らさるものありて發するに非すして、名の爲めにし、利の爲めにす。故に時好に投し、流行を趁はんと欲す。於是乎、彼等の胸裡唯所謂當りをとらんとするの一念あるのみ。書を名山に藏して知己を千載に待つが如きは豈に渠等の知る所ならんや、故に渠等紅葉盛んなれは匆々として之に奔り、鏡花名を博すれはまた趁せてこれに赴く、主張なく本領なし、彼等今や所謂悲慘小說なるもの、流行を追うて、故らに悲慘の語を弄し深酷の文をなさんとする也。而かも彼等の眼底一滴の涙ありて然るにあらさるなり。彼等の胸中一點の同情ありて然るに非さるなり。同情

なし、涙なし、故に皮相に、故に膚淺。彼等幾度監獄を巡り、幾度癲狂院に視るも、これか爲め彼等か經驗を加へて寫實の筆を緻密にするとは則ち之あらむ。以て眞によく人を驚かすの文を作らんと欲せはよく他の肺肝を徹するの眼光なかる可らす、而して同情なきものは以て此眼光を具するに足らす。

それ同情は我を以て彼とするなり、彼を以て我とするなり。彼を以て我とす、故に我よく渠か肺腑に入るべし、我を以て渠とす、故に我能く彼と一体となるべし。主觀を以て客象に對し、而して唯に其客象の表現をみるのみならす、更によく其内層に徹するを得る所以の者は、唯主觀に同情なるものあり、自ら内に省み己を以て人に及ほせはなり。故に同情によりて描寫せられさるの性格は皮相のみ活躍せす。

皮相のものは熱せす、輕佻の者は狂せす、狂せす熱せす。今の小説家これ而已。而して彼等に狂熱なきは即ち彼等か眞の天才ならさるを證するものにして、吾人預言者に非さるも、今の小説家は彼等の死と共に時代の記憶より磨滅し去るものあるを斷言するを憚らす、其名よく不朽に、其作よく不磨なる唯眞の天才者これあるのみ。碌々たる小作家之を譬へは猶流星の如き歟、忽ち消へて闇黑に葬らる、彼等の生命は一時のみ、瞬息のみ。

露伴の諸作を讀むものは、必ず其性格の一種の狂熱を有せるものたるを見ん。彼の性格は即ち彼の影のみ、彼の表現のみ。男たるを問はす、女たるを問はす、露伴の性格には必ず露伴を瞥見するを得ん。蓋し狂熱あるものは熱情あるなり、熱中するものなり。一方に驚せて他を顧みさるものなり、故に執す、故に偏す。故に普通なる能はす。

露伴の性格か掌に自己に偏する洵にこれか爲め而已。

沒理想と云ふ勿れ、大詩人何ぞ必ずしも理想なからむ。理想とは世界に對する一種の觀相なり、直覺の見地なり。大詩人は唯之を現すに具象を以てして抽象を以てせず故に渾然として痕なし、無縫の衣の如く然り。故に理想なきには非ず、理想を現はさず、現はさゝるに非ず。現はれざるなり。説明は哲學者の事なり、詩人の事に非ず。詩人は理想あれども是を個象に寓す、寓せんとするに非ず、自からにして寓る。それ詩人は想化す、想化とは何ぞ、詩人は哲學者と等しく或直覺の見地あり、觀想あり。而して其直覺的なるや自己に在ては自ら識らず。唯其或個象に對するや、よく其見地を有し、觀想を有するの眼を以て之を觀る。故に自ら識らずと雖、その個象や想化せらる、個象や既に個象としての個象に非ず、想化されたるの個象なり、詩化されたるの個象なり。想化とは個象に寓するに想を以てせるものなり、否寧ろ想の個象に寓れるなり、

故に既に個象を描き來る必ずや其裡其詩人の想を認む、また其詩人を認め得ずんば非ず。

唯平易の人、平穩の人、我日常にして之に熟す。故に裏面に其詩人の髣髴を見るも、我文に對して之を覺ゑず、唯奇矯の人峭拔の人、凡人と夐異、故に此の如きの詩人の作に於ては、吾人特に其詩人の其詩中に躍々たるを覺ゆるのみ。唯覺ゆると覺へざるのみ、何れの詩にか其詩人の髣髴を認めざるものあらむ。

露伴の作る露伴の面手の生躍する、會々以て露伴の尋常作家と夐異するを見るへきのみ、平易ならざるを見るべし、平穩ならざるを見るへし。以て其の奇矯の狂熱を見るへきのみ。然れとも吾人か露伴の作に憾むる所は、彼の作中所々に彼か作中の人物を假りて、或理想を說明せんと試むるの個所あると之れなり。之れ彼か思を佛書に潛ましむるの深さ、彼か直覺の觀相の時に抽象に傾かんとするを示せるものにして、詩人としての露伴に於ては、これ寧ろ憾むへきことに非さらんや。

然れとも今日の作家の、拘々たる小才氣を弄し、一時の場當りを求むるに汲々するの間に在て、卓然讀書錬思其想を養ひ、其神を養ひ、素養を作り、根蔕を牢うするの一事に於ては吾人特に露伴に服せさるを得す。彼か超然として群を拔くもこゝにあり、

而して多く世好に容れられさるも亦こゝにあり。

それ紅葉露伴と其名を爲せるの日を同うし、而して又其西鶴に私淑せると相似たり。而して却て露伴の寂寞たる此の如きは何そ。露伴の天才、紅葉に劣れる爲め乎。否寂寞たる寧ろ以て露伴か高きを示すに足るのみ。時好なるものは寧ろ俗好なり。時によりて即ち變す、一時の流行長しと雖とも十年を保たす。今日に在て紅葉か是非の議論漸く囂しく毀譽の聲漸く高き者、以て彼か一時の流行兒たるに過ぎさりしを證するに足るへきに非す耶。露伴に至ては一時の盛名紅葉に遜らんと或はこれあらん。然れとも今日に在て猶往日の名を保つと依然。これ洵に彼か世俗嗜好の外に超然たるにより るものにして、之を以て見るも吾人は露伴の紅葉に贏つと一籌なるを信す。

それ紅葉は西鶴を學んて其才を得たり、其寫實の筆西鶴か文に得て而して之れに纖麗巧緻を加ふ。露伴に至ては則ち西鶴の氣を得たり、其覇氣稜々逸氣橫生の所よく西鶴の想に得て而して之れに幽遠の見識を加ふ。天分の然らしむ所と雖も、未た知らす西鶴を地下に喚起し來らは果して何れにか其衣鉢を傳ゑんとするを。

西鶴を學ひたるもの今日猶一人あり、一葉となす。彼は西鶴か趣を得たり、而してこれにあはれにやさしき女人情致を加ふ。而して其奇矯逸氣大に露伴に類する所あり、

又一種の狂熱あるを見る。

三人者の中に就て此狂熱最も少きものは紅葉なり、最も多きものは露伴なり。紅葉は彼か描き來る得意の性格の如き又一種の當世才子なり。才氣は天才に非す、才氣者よく變通す、才氣は淺くして天才は深し。淺きは狂熱なければなり、深きはこれを存すればなり。狂熱なければ熱中なし、熱中なければ心則ち浮散。紅葉か得意の性格にやゝ輕薄の氣味を帶ふるは蓋しこれが爲めなり。必すしも當世の寫實なりと云ふ莫れ、寧ろ此性格は紅葉の化身にして、而して紅葉か實に當世秀才の標品たるに近きなるのみ。

紅葉猶此の如し、當世炎々たる熱誠を内に懷き矯々たる奇氣横に溢るゝもの唯露伴あるのみ。一時の名を博せんか爲めに書かす、利を貪らんが爲めに書かす、自ら持し自ら重んし、多く作らすして多く讀み、根抵あり素養あるもの唯露伴あるを見るのみ。嗚呼明治の文壇も亦人なき哉。

露伴を除きて狂熱、奇矯露伴に近きもの一葉あり。此二人者を除きては吾人明治の文壇に天才らしき詩人を見出す能はす。嗚呼眞に人なき乎、將た吾人の眼矇せる乎、吾人の眼昧き爲めならば則ち幸也、眞に人なくんは嗚呼々々之を如何せんや。

吾人小說家に向て卿等天才なしと廣言す、彼等必す吾人に嘲むあらん乎、彼等の自尊を損し自信を挫く必すそれ然らむ。然れとも吾人は敢て信する所を枉くる能はす、卿等若し吾言に激し、我言に憤り、奮勵發憤つとめてやますんは或は進んて第二流の詩人たると則ち得へし、到底進んて第一流たる能はす。第一流たるの桂冕は唯天才者之を戴くを得へきのみ、生れたるものゝみこれに達すへく、學ひて而して得らるへきに非す。學ひて達せらるへきは第二流のみ。第一流に至ては則ち截然として鴻溝あり、天才者唯よく之を飛超す。第一流たるへきものは天にして人に非す、當世に所謂才と云ひ智と云ふ。世智のみ世才のみ、人間の才と智とのみ。以て天たるものに屆るに足らす。然れとも卿等落膽するをやめよ、失望するをやめよ。第一流は則ち千百年にして一人あるのみ。卿等これたる能はさるもまた人たるものゝ最高を究むるだも得は則ち可ならすや。人間たるものゝ最高は學んて之を得へし、勉めて之を得べし、卿等當さに奮勵發憤、精をつくし神をつくし、其素養をつくり、其根抵を牢うし、以て爲すあらはこれを得るとまた難きに非す。嗚呼天位は覬覦すへからす、人臣の榮を極むるを得は卿等に於てまた無上の光榮たらさらんや。勉旃よや。

嗚呼第一流たるもの明治の聖世終に之を出す能はすしてやむへき乎。噫。(廿九年五月)

鷗外と逍遙

鷗外と逍遙、一は千駄木に、一は早稲田に、各一方に雄視して文界の二大鎭たり。評家たり、作家たり、之に兼ねるに譯文者たる、二人相若く、鷗外の專ら職とする所は醫にあり、逍遙の素と學ふ所は政治にありて、而して却て文名を以て世に知られたる、二人また相似たり。學ふ所政治なりしが故に、逍遙は英語より入り、醫なるか故に、鷗外は獨語を能くす。是を以て鷗外は文界の獨逸派たり、逍遙は英派たり。逍遙は其門下生を統へて早稻田文學に據り、鷗外は曩きに其一門を率ゐて柵草紙に據る。鷗外は具象理想論を唱へてハルトマンを祖述し、逍遙は沒理想を唱へてシェクスピアーに渴仰す。源頭既に異なり、涇渭豈に流を同うせんや。逍遙は沒理想を唱ふるが故に評家にてもまた記實を以て其標識とし、鷗外は哲學說を奉するが故に談理を以て其記號とす。鷗外は理の人なり、故に理窟に流る。逍遙は寧ろ情の人なり、故に常識に失す。其性情の然らしむる所と雖とも、また其學ふ所に化せられたるものなくんばあらす。英の民は由來實行的なり、從て常識的なり、形而下を知て形而上を知らす、實を知て虛を知らす、具体を見て抽象を見す、故に唯物質をみるのみ、功利を見るのみ、鈎玄

闡幽はその敢てせんとする所に非す、樗腹にして空理を談する彼等は爲さす、本体、實相、彼等に在て風馬牛のみ、彼等は目覩實感の事を知れは則ち足る。故に英には哲學と稱するに足るものなし、僅にこれあるも乃ちヒュームの懷疑說、バーケレーの主觀說、ミル、ベンザムの功利說、蘇國學派の心理論に過きす。畢竟皆これ常識的、物質的、實驗的、功利的を脫する能はす、唯極めて常識的に、極めて實行的に、極めて物質的、功利的なる政治に於て其發達をみる。シェクスピアーも詮するに大常識を有する大天才に過ぎさるのみ。逍遙素と英語によりて政治の學を修む、彼化せられて常識の人とならさる能はす、シェクスピアーに渴仰するに至らさる能はす、於是乎沒理想の說あり。

獨の民に至ては即ち大に英に異なり。彼等は理想的なり、推理的なり。寧ろ抽象を尙んて、具体を忽にし、虛を重んして實を輕んす。其眼は形而上に向ひ、其心は幽玄に遊ふ。哲學の趨向之を証して餘あり。カントの本体論、ヘーケルの辯証論、ショッペンハウァーの意志論、概するに皆唯心的にして實驗的ならす、演繹的にして歸納的ならす、故に獨逸に在ては哲學最も發達す、ギョエテの如きまた是れ一大理想を粉粧するに一大詩的の筆を用ひたるに過ぎさるのみ、此國語を修め、此國土に留學せし鷗

外か、此風に化せられて談理を喜ふに至れる怪しむべきに非す、既に談理を喜ふ、乃ち師奉するに足るものを求めて、ハルトマンの審美論に獲て之を祖述す。於是乎具体理想の論あり。

具体理想といひ、沒理想といふ、各之を其仰く所、奉する所より得て、而してよつて以て各其旗色を鮮明にす。然れども具体理想といひ、沒理想といひ、其名を二にすと雖ども、其實や一、要之するに其名を執して相爭ふに過ぎざるのみ、其實を同うして而して其名に爭ふものは、其命名の既に獨派と英派とを別つものあればなり、之を沒理想といふは其名を命ずるの英國的たるなり、常識的たるなり。之を具体理想といふは、獨逸的たるなり、哲理的たるなり。具体理想といふの名既に理想的にして、沒理想といふ既に沒理想的たり。沒理想的なるが故に逍遙は沒理想の名を以て當れりとするなり、而して理想的なる鷗外は其沒理想なるを以て其名を肯んせず、具体理想の名を以て之に當てんとするなり、名に失して實を爭ふ、辯を好むに似たりといへども、理を談ずるを喜ぶもの往々にして皆然るを免るゝ能はず。

畢竟するに大詩人は大理想を直覺す。推理の階を拾うて達するにはあらざるなり。其心直に是れ一大理想、興に觸れ感に應じて即ち發して詩に寓す、而かも其理想既に推

理のものに非ず、故に寓して詩にある渾然として抽象の痕をとゞめず、而かも是れ故らに理想を以て具体とせるに非ず、理想自ら具体して現す、又是れ理想なきに非ず、具体即ち理想なり、之を沒理想といふは爲されたる物にみて之をいふなり。是を具体理想といふは爲す者に見て之を云ふなり、詮ずるに理想なきに非ず、理想見れざるなり、理想見れざるは具体の裡に存ずればなり、具体せる理想は即ち沒理想のみ。

古より說を立つるもの何そ限らん、各其說を持して相諍ふ、究竟するに、其語と其名を執て、異を立つるに非さるもの少なし、達して之を觀れは、一歸にして異趣、同致にして別途、唯これに過ぎさるのみ。具体理想といひ、沒理想といふ、豈に亦これに他ならんや。

然れとも具体理想といひ沒理想といふ、其諍や鑽末の上にあるに似たりと雖とも、これ實に我文界に於ける英派と獨派の衝突に外ならす。文界啻に此爭あるのみならんや、政界にも亦これあり、從來の自由黨は其氣風の上よりいふも、其主義の上よりいふも、佛國的にしてその夢想する所は佛國的の民主的政治にありき。今や乃ち節を折つて政府に媚從すと雖とも、當年の意氣それ此の如きものありき。改進黨は英國的なり、其黨の氣風の一般に實利に傾きたる、扶序的の立憲政を建てんとしたる、その摸範とせ

し所は英國にあり。而して今の伊藤内閣が制を採りしものゝ獨逸にあり。今日の朝野の爭や進歩黨と伊藤内閣の衝突にありと雖とも、其實は一種の國粹黨を加味せる英國派と、屈從せる佛國派を率ゆる獨逸派の爭にして、主動は則ち英派と獨派とに外ならす、文界の爭もと之を政界に比すへきに非すと雖とも、逍遙か曾て讀賣に操觚し、今專門學校の教職として改進黨に緣あるに、鷗外か陸軍の軍醫正として官邊に因みある、偶合また妙なるを覺ゆ。

鷗外は醫なり醫は死生の術たり、頗る細心を要す。且近世の醫術は科學の上に建てらる。故に醫はまた一種の科學者たり、其觀察の精緻と推理の確正とを少くへからす鷗外は醫たる所以の者を以て之を文學に及ぼすあり。彼の文を評する精覈、肅整なるもの實に之が爲なり。逍遙は素と政治を學ふものたり、政治は一國の經倫なり、その之を爲すや寧ろ放膽を要す。逍遙の細心翼々たる之に當るに足らすと雖、滑脫の才子たる所、科學者たるよりは寧ろ政治家的なり、故に評家としての逍遙は紆餘曲折也、鷗外は既に是れ元一種の科學者故に術語を用ゆ理義の明晰を欲す一語を下すゝらも猶忽にせす、逍遙は寧ろ才人なり、語を下すに趣の多からんを欲す、故に多く嚼蠟の術語を用ゐす、故に逍遙の文は詩的他。鷗外は寧ろ科學的也、鷗外は文學を科學とするも

のなり、逍遙は理論を詩とせんと欲するものなり、故に艱澁佶倔の議論も一たひ逍遙の筆に入れは流麗平易の話說となる、而して尋常茶飯の常套事も鷗外の筆に入れは深遠難解の理窟となる。鷗外は佛門中の講師の如し、愈々說いて愈々遠し。逍遙は風流の秀才、流利よく談す。故に此は流暢都雅なりと雖とも淵渟沈冥の致に乏しく、彼は蒼古玄奧なりと雖も偉麗高華の觀少く、到底鷗外は談理の筆なり、解說的なり、逍遙は記實の筆なり、叙述的なり、逍遙は談理にも叙述し、鷗外は記實にも解說す、解說的なり故に冷酷、叙述的なり故に温潤。冷酷故に鷗外苟くも合はす、姑くも假さす。温潤故に逍遙人にゆるし名を成さしむ、故に謙虛滿を戒めて人に遜り、彼は矜尙自ら持し人を容れす、鷗外は秋の霜に似て沍へたり、逍遙は春の雨の如くしめやかなり、温顏下氣、春風の柳の糸を吹くも亂れぬ者は逍遙なり、辞氣凜々早瀨の水の巖に碎くるものは鷗外なり。甲兵百万肅然枚を啣んて霜夜に發するか如きものは鷗外の文なり、駒の足ゆるやかに埒を巡くるに似たるものは逍遙の文なり。逍遙の文、鷗外の文、共に巧みに和漢洋の三素を渾融し得たるもの、而して二者を較し來れば、鷗外は漢の素逍遙にかち、逍遙は和の素鷗外に優る。獨文の佶倔漢文と相似たるものあり、英文の平易、和文と相近きものあるによつて然る乎。抑も亦鷗外漢文の素養多

く逍遙國文に長せる乎。將たまた各性の近きによつて然るもの乎。

逍遙は政治家たらんと欲して得すして文士と爲り、鷗外は醫にして而して文士を兼ぬ。鷗外は文士たるには科學者的たるに過きたり、逍遙は政治家たるには詩人的に過きたり。逍遙は政治家たる能はさりしも以て史劇の作家たるに適すべし。科學者的に過きたる鷗外は作家たるに適せすと雖以て評家たるべし。鷗外は作家たるの資に非す、逍遙は評家たるの材に非す、故に逍遙の率ゆる早稲田文學は記實を主とす、記實はまた是れ一個の史的觀察の敍述に非すや、鷗外の統ふる柵草紙。めさまし草は談理を主とす、談論は是れ科學的研鑽の推論に非すや。鷗外の批評眼は鋭利なり、ランセットを揮うて肉を剜り、骨を刺すに似たり。逍遙の史眼は周到なり、緒をさぐり端を繹ねて糸理整齊。逍遙の巢林子が作を論ずるは一個の史的觀察に非すや。鷗外の鷄翮搔は記實にして而してまた審美論に非ずや、人の才限りあり相兼ぬる能はず。逍遙は力を其長とする所の史劇に盡せ。『桐の一葉』よし、『牧の方』可なり。唯益直前せよ。鷗外は益談論せよ、而かも『鷄翮搔』の如きその長を揮ふべきに非ず、柵往日の意氣に還れ。譯家としての二氏をみる、また各其長とする所あり。鷗外の筆は悽惋なり、さびしくして、其庵の名おふ時雨の空の雲の絶間片破月の呑まれつ吐かれつせらるに似たり『埋木』の如きもの彼が筆力を見るべし。逍遙の筆は輕妙なり、やさしくして、春の夜の月の朧ろに匂へるが如し。よく『マクベス』悽愴を寫し得て、成るべきや否や。要之するに、逍遙が明治の小說界に新紀元を開き、鷗外が我國の文壇に哲理的評論の緒を創めたる、共に其功や沒すべからず。然れども、また二氏は、今日の讀書界の、既に當年の書生氣質に非ず、往日の柵時代にも非ざるを知らざるべからず。(二十九年九月)

篁　村

篁村氏の作常に千篇一律、いつも趣向は江島屋、八文字屋の窠臼中より超脫する能はず。舞臺が明治と改まりたるだけ、若旦那も散髮に香水を匂はすれども、オホンと濟す所ではどうしても明和の型なり。裏屋に零落の萬更ならぬ娘に、頭圓めて口先きまでもよく滑る幇間宗匠、それに邪險の繼母、贅辯の口入婆など、型の如くズラリと列びて、百年の昔をそのまゝ、只衣を新にし粧をあらためたりといふまでのみ。一篇を讀み了りて何の變化も、何の委曲もなく、サラ〳〵として胸に支へぬは妙なれども、奈良茶三石の風雅の寂はなくて、貧乏世帶せん方なしの湯漬と澤庵に何の趣きのある

べきや。かく一篇の小説として全體の上より評すれば何の價もなけれど、一回一回の端物としてみれば、一篇中の人物をかりて口を突きて出づる冷嘲諷罵、よく人心世情の弱點を穿ちて、戯而不レ謔、覺ゑず人をして破顔せしむるの妙、之を他の諸作家に求めて得可からず。得知や新二や彼等も亦滑稽の才に富むもの、然れども、二氏の滑稽は强ゐて人を笑はしめんとす、腋の下をこそぐりて、是でもか〳〵と迫るが如し。其洒落れも幼稚にして、赤ンベェに小兒を笑はせんとするに似たるのみ。未だ篁村が機警の才の縱横なる、時に臨み事に應じて口をついて出で來り、自然に人の頤を解くには如かず。疑ふものは氏が『輪柳』一篇を讀め。氏が輕妙なる諷刺に對して、深刻なる熱罵を逞うするものを正直正太夫なりとす。（二十八年六月稿）

正直正太夫

篁村と正直太夫と、彼は怡々として優容迫らず徐に口を開きて迂曲に評し去り、此は忿然として腕を扼し口頭唾を飛ばして面折かさず。彼は虛を以て實をうち、此い單刀直入す。彼の口氣は幇間醫者に似、此の意氣は常に窮措大に近し。彼の冷評は其許せらるゝ者も共に笑ふ、此の熱罵は罵らるゝもの必ず憤る。此は村正の劍に似たり、鞘

を脫すれば血を見ずむばやまず、彼は醫家用の放膿刀に似たり、切らるゝもの快味を感じて痛を覺ゑず。彼は洒々、此は忿々。彼は圓滑、此は狷介。彼は飽くまでも世事に長けたり、此は寧ろ正直なり。彼は冷々たれども、此は稜々たり。稜々たり故に世と背く、冷々たり故に能く人を容る。篁村は何處までも愛嬌者あり、正太夫はどうしても惡太郎なり。彼は世に愛せられ、此は人に憎まる。正太夫固より世を容るゝ能はず、然れども世も亦正太夫を容るゝ能はず、彼が主角は到る處に撞着牴觸す。その口は空世辭をいふ能はず、その膝は虛辭義に屈する能はず、其眼はそら涙に泣く能はず。正太夫は世を憤るが故に世を罵るなり、篁村は人間を茶にして之を嘲るなり。正太夫は寧ろ多感に過ぐ故に激し易し。激し易し、故に鋒鋩常に見はる、正太夫は寧ろ多恨なり故に涙多し、涙多し故に嘲り終れば即ち痛哭す。人は正太夫が皮相を見て皮肉ありといふ、彼が兩眼の血涙を見ずや、彼が胸中の煩悶を知らずや。その冷嘲は寧ろ冷かならず、內に萬斛の熱血あり、知らざるものは彼を恐る、慣々たる小作家彼等の徒何ぞ之を知るに足らむや。彼等は罵られて怒り、嘲けられて憤る。それ罵嘲もと美德にあらず、正太夫なるもの之を知らざらむや、而して彼をして痛罵せざるの已むを得ざらしむるの罪寧ろ何くにかある。彼の多感、彼の多恨、彼は矯僞する能はず、彼は

矯飾する能はず、故にその感ずる所をいふて露骨、露骨なり故に人は之を皮肉といふ。正太夫の坎軻偃蹇は其多感なるによる、其激し易きに根す。正太夫一度『國會』に在り、三味と相爭うて去りて、後久しく出でず。頃日『二六』に入りて席未だ暖ならずして亦辭し去る。彼は到底世を容るゝ能はず、世も亦彼を容るゝ能はず。アゝ彼は寧ろ潔癖に過ぐ、沐浴して更に其冠を彈き、其衣をふるふものは當世向に非ず、滄浪之水濁兮可三以濯二吾足一、滄浪之水清兮可三以濯二吾纓一と汨羅に漁夫の申したりき、以て正太夫氏に寄せん哉。（同上）

紅葉

紅葉の全盛、まさに過去の夢たらむとす。それ今の作家にありて寫實の筆致の細かなるもの紅葉に過ぐるものなしと雖も、而かも創作の才に至ては決して富贍なりといふを得ず。實に紅葉が今日の名をなしたるものは、その寫實の筆にありて創作の才にあらず。蓋し逍遙の書生氣質出でゝ舊小說家の中堅たる勸善懲惡の迷想を打壞してより氣運一變、寫實を以て小說の極致となすに至り、紅葉其間に出でゝ其精緻なる筆趣と、周到なる觀察とよく當時の氣運に投合し、遂に當時の全盛をなして小說界の泰斗と仰

がるるに至れり。人或は稱して『朧舟』以來紅葉に創作なしといふ、吾人はその果して眞に然るや否を知らずと雖も、二三年來紅葉が專ら翻案を事とするに至りたるは事實なり、殊に去年頃より其創作と稱すべきもの悉く門下生の作を添削したものたるは既に世上の知る所。然れども紅葉に創作の才の乏しきは今日に始まりたるに非ず、唯當時寫實の氣運に投合したると、及び紅葉の富贍なる文藻の平々凡々の想をもよく有趣味としたるに欺かれて、その實に想に於て缺け創作の才に乏しきを觀破する能はざりしのみ。紅葉は一場の茶話をもよく之を翻し來りて、奇趣湧くが如きの文とおすの伎倆を有せり。深く紅葉の作を味ひ來れば、其想に至ては實に小新聞の一雜報種に過ぎざるのみ、而して紅葉はこれによりて波瀾あり抑揚ある數十回の文を爲り得。此點に於て吾人は紅葉の奇才たるに服せざるにあらず、然れども是れ一奇才の寫實紀文家たるに過ぎざるのみ、想像に富める詩人的のものとしてこれに許す能はず。寫實の氣運が盛んなりし當時に在りてこそ、よく文界の泰斗たるを得たれ、文界の氣運一變し、想を尙び創作の才を重むずること今日の如きにありては、彼は到底小說作家として彼が一門下生とも角逐するに難かるべし。見よや、彼は曾て硯友社諸作家の師たり、兄たるの地步を占めたりき、而かも今日に在ては彼が弟子視し、弟視したる眉山、水蔭、

柳浪の輩皆彼を駕して上らんとするに非ずや。吾人は必ずしも寫實を擯斥するには非ず、必ずしも想を重ずるには非ず。然れども徒らに寫實に巧にして想に乏しきものは、必ずや其意匠に於て窮すること早し。かの紅葉が今日に於て早く翻案と、添削したる門下生の作との外、一創作をも出だす能はざるもの、豈に職としてこれに由るにあらざらむや。嗚呼紅葉汝が大面を下げて先生風を吹かすの間に於て、氣運は人を待たず、汝が全盛の時代は早く既に去れり、榮華の夢永からず、今に於て覺醒奮勵一番するに非ずんば汝が額上の月桂冠はまさに汝が有たらざらんとす。我れ紅葉が燕居の狀をきく、人はいふ彼は傲然として自ら尊び、來り見ゆるものに對する甚だ不遜なりと。またその『五調子』の序と跋とを讀む、彼が硯友諸子の師兄を以て高く自ら標置するあるをみる。嗚呼々々、紅葉幸運の神は既に汝を護らざるを知らずや、汝が名聲は頓に地に墜ちつゝあるを知らずや、今にして悛めずんば文星永く汝が頭上に宿らじ。硯友社の鼎重は既に眉山、水蔭、柳浪の輩のために問はれんとす、顧みよや、紅葉、彼等はまた吳下の舊阿蒙にあらず。（二十九年九月）

柳浪

陰森悽愴之を讀みて暗憺の氣の人に逼るを覺ゆるものは柳浪の作なり。今や柳浪は其悽愴の筆を以て心理的觀察に指を染めんとす。彼は此點に於て他の諸作家に比して着眼の一段高きを證するに足るなり。彼の『黑蜥蜴』は當時に在て猶傑作たるを得たり、而かも之を今日の進境よりいふ、此等の作またいふに足らざるものあらむ。もし署名なかりせば誰れか今日『五調子』に於て『龜さん』を描寫したるものゝ、嘗て『四の緒』に於て『白百合』を作りたると同一作家たるを信せんや。『白百合』はもとより柳浪としては至極の拙作たりき、『龜さん』はその傑作たるべきもの、もとより之を同日に論ずる能はずと雖も以て、その今日に在て着想の一大飛躍を以て進歩したるを見るに足るべし。彼が『龜さん』に於て癡呆兒の無意識の罪惡を犯すを寫さんとする、今日滔々たる作家に於て思のこゝに及びたるもの果して幾許かある。鏡花また一種不健全の人物を描く。然れどもその人物や確乎たる意志を有するものにして、また辨別的智能の常識を具へ得たるもの、而してその罪惡を犯すや却て此意志を遂げんが爲めにし、從て辨別力を失はずして然るなり。その人間たるの情熱に於て缺けたるが爲めに、冷刻なる一不健全の性格たるに相違なしと雖ども、世間果して此の如く心裡一點情感の温まりを有せざるものあり得べきや。よし之を有り得べしとするも、此の如く意志に强

く此の如く常識を具へたるものが、果して鏡花が描く如く一種發作的の狂に近きの所行をなすことあるべきや。鏡花の人物が罪惡を犯すや、必至の境遇に逼迫せらるゝにもあらず、無意識に然るものにあらず。自ら辨じ、自ら信じ、其信ずる所を遂げんが爲めに一の罪惡を構成し來る。其境遇は自ら造るなり、其罪惡たるを意識せるなり。自ら其罪惡たるを意識し、而して必至の境遇にも逼迫せらるるにあらずして、而して常識ある人間の爲し能はざる慘刻の行をなす、其行ふ所や却て常識を缺ける狂的一時の發作に類するなり。嗚呼世間また此の如き不自然のことあらむや。其『夜行巡査』は斷々として傑作たり、其『外科室』また今日有數の作たるを得。然れども彼が『海城發電』、『琵琶傳』とに至てはまたいふに足らず。これ彼が猶少壯世故を嘗め盡さゞるが爲めに觀察の精細ならざると、其素養の足らざるが爲めに筆致の猶幼稚なるとによるものにして、之を柳浪が一癡呆を捉へ來り、其罪惡を犯すに至る徑行を描き、境遇を寫し、其心裡を解剖するに彼が得意暗憺の筆を以てするに比す天壤雲ならず。假令吾人は此作の結構に關し二三の點に於て服せざる所ありと雖も、之を鏡花等の作に比すれば其性格の自然なる、筆致の圓熟なる、觀察の周到なる、同日の論に非ず。且吾人が鏡花に慊焉たらざる第一の點は、其作中の人物の如く、鏡花自らもまた其作中の

人物に向つて一點同情の涙をそゝがざるなり、相憐の意を表せざるなり、故に描き來りて讀者の同感を惹き得ること多からず。此點に至ては現今の作家中一葉を除きて同情を有するもの柳浪の如きはなかるべく、これ即ち柳浪の諸作のよく人を動かすに足る所以にして、『龜さん』を讀むものはこの畸形なる龜さんの愚鈍なる行にも笑を催すことなくして却て之を憐むの情を生じ、其不法なる行にも憤るよりも寧ろ之をいたむの心を生ず。これ柳浪が既に十二分の涙を以て龜さんにそゝぎたるによらずんばあらず。吾人は此作の末段の毒婦お辰が、此龜さんの癡呆を利とし、之を使嗾して家を燒かしめ、却て其火に焚死するの、餘りにわざとめき、因果づくめに出來上り、餘韻の搖曳に於て缺くる所あるを惜むに關はらず、吾人は柳浪が一進歩を喜ぶと共に、此作を江湖に推薦するを憚らず。柳浪は其想に於て、其文に於て、之を水蔭に比す、猶一日の長あり。まず〳〵其特長を發達して、その背後に落つる勿れ。（同上）

水蔭

硯友社中にありて進捗の度特に著しきものを水蔭となす。吾人は嘗て彼が叙景に長せるをきけり、今や彼の文は情景兼ね到れるを見る。嘗て彼が作は多く一篇の小品たるに

過ぎざりき、今や彼は專ら筆を長篇に着く。吾人は從來水蔭の作を以て見るに足るものなしとせりき、今や却て多くその諸作に心服す。その想に富める以て眉山と轡を駢ぶるに足るべく、その言文一致の文字の玲瓏誦すべき、夐かに美妙一輩の徒を凌がんとす。彼の作は『女房殺し』に於て確かに一進歩をなせり。見よや『炭燒の煙』は多少の批難は免れ得ざるにもせよ、確かに『國民之友』春期附錄中の壓卷たるにはあらずや。『五調子』に於ける彼が『海獵船』は假令僅々たる數頁の端物たるにもせよ、之をかの『水車』の諸篇に比す、其着想其風神雲泥の差を見るに非ずや。彼が前途は多望なり、勉めてやまずんば眉山柳浪と馳騁して中原の鹿を爭ふまた難きに非ず。然れども多作は徒らに汝が才思を荒らすのみにして、大成を期する所以にあらず。蘊蓄せよ、素養せよ、鬱勃の氣抑へんと欲して抑ふる能はず、口を衝きて迸發せんとするに當りて始めて其筆をとれよ。暫く汝が片々たる小品の筆を輟めて、長篇を作るを期せよ。賣らんが爲めに作る莫れ、作らんが爲めに作れ、多作する莫れ、大作せよ。（同上）

一葉

花圃は夕月夜に櫻の散りかゝるに似たり、華やかなれども靜かなる趣あり。若松賤子は苦むせる巖間に湧き返る眞清水の如し、氣味よく涼し氣なり。小金井きみ子は桔梗の一本やさしけれども氣高き所あり。而して一葉は風の吹あるゝ中を落ち殘りたる三日月にも似て、あはれなれどもつよみあり。四閨秀いづれはあれど、吾は最も一葉を推す。小金井及び若松兩女史は重に翻譯を事とし、創作少ければ姑くいはず、花圃女史を以てするも其想に至ては一葉に一歩を讓らざるを得ざるべし。一葉が諸作を讀めば隱約の間に女史は一個の人生觀を有するを認め得。蓋し女史は人生の缺陷を觀たり、從て缺陷によりて生ずる人生の悲慘を觀たり、缺陷の世界、不如意の人生、人は常に運命の羈絆する所となり、境遇の繫縛する所となる、必至なり、必然なり、あせれども脫し得可からず、もがけばます〳〵繩目を堅くするのみ。人は靜かに此悲慘の運命に堪へ、苦酸の境遇に處らざる可からず。平かならざるも平ならざる可からず、安むずる能はざるも安むぜざる可からず。愚庸なる者は識る所なし、平然として此世に處す。奸譎なる者は翩々として却て之に乘ず。共に此缺陷なる世界と、不如意なる人生に於て一の不平と跌躓とあるなきなり。唯感情の人感じ易く、激し易し、世と共に濁りて順風に駕する能はず、强て獨り醒めて逆流に立つ。彼はあまりに感じ易し、人生の不如意に堪ふる能はず。あまりに激し易し、冷々として世を弄ぶ能はず。あまりに正直

なり、世と共に濁る能はず。於是乎世にすてられて世をすね、世を背きて世に容れられず、すねにすね、そむきにそむき、遂に絶望の闇黑に葬らる。人、望あるが爲めに生く、絶望は即ち死なり、彼の形骸は猶存して飲み且食ふも、其人は實に精神的には死せるなり。彼は何の事としてなさざらむや、死したる彼には毀譽褒貶何の耳をかすに足らむや。是れ人生悲絶慘絶の境遇なり。一葉はよく此絶望の人物を捉へ、これが性行を描くに當りて、これにそゝぐに溢るゝの同情と、湧くが如きの熱涙を以てす。その『濁江』のお力を見ずや、『十三夜』の高阪錄之助を見ずや、『別れ道』のお京を見ずや、いづれも人生に絶望し、世をすね世を背きたるものにあらずや、而かもいづれも涙多く情ふかき感情の人に非ずや。吾人は此點に於て一葉が人生を觀徹するの眼光に感じ、而してまたよく之を拈し來りてあはれにかなしき一篇の話柄を脚色し來るの伎倆に服せずんばあらず。眉山想に富めりと稱す、而かも其『うらおもて』はあまりに露骨なるが爲めに、世人の一笑を買ひたるに非ずや。吾人は女史が一閨秀として此くまでの伎倆あるを歎賞するを禁ずる能はず。女史が筆を執れるや既に久しかるべしと雖も、女史が一年間に於ける進歩を見ば、誰か一驚を喫せざらむや。吾人は女史が『文學界』に掲げたる『暗夜』には猶服する能はざりき、『大晦日』にも猶服する能はざ

りき、吾人はその『たけくらべ』に於て、初めて女史の筆のよく圓熟し、想も亦奇峭にして、凡庸作家の亞流にあらざるべきを見たり。而して『たけくらべ』の稿猶未だ完を告げざるに女史の名は今や文界に喧傳して鬚髯作家をして顏色無からしめんとす。吾人の今に於て女史に望む所は、小成に安むせず、虛名に慢せず、殫思研精、勉めてやまざらんことこれなり。吾人は『十三夜』に於けるれ關に配して高阪錄之助を點し出し來りたるのわざとらしきに服せず、また錄之助のあまりに執念ねくして男性の如からざるに服せず、また女史の諸作のあまりに神韻を餘さんが爲めに、時に晦澁に陷るの失あるに服せざるに關はらず、吾人は女史を以て當時新進作家中の錚々とするを憚らず。見よ鏡花は奇峭なりと雖ども、猶圓熟を缺けり、天外は遒勁なりと雖とも猶遠神に乏し、一葉に至てはよく鏡花が奇峭と、天外が遒勁とを兼ねて、而して其筆致早く蔗境に入り、其風神既に化境に達す。其觀察の肺腑に徹し、其やさしき同情の溢る、洵に有望の作家たる哉。（同上）

弦齋

盲目蛇に畏ぢずとはそれ弦齋の謂ひ乎。弦齋の作眞に之を審美の眼光より見る、小說

として果して幾文の價値かあるべき。人は彼の文の平易なるを稱すれども彼の文は絢爛より入りたる平淡にもあらず、彫琢を惡んで故らに平易なるにもあらず、彼は此より以上の文を作る能はざるなり、此より以外の文辭に富まざるなり。彼は已むを得ずして此の如きの文を爲るのみ。澹泊といふ莫れ、奈良茶一石には風流の寂あれども、白湯三杯に何の趣あるべき。天下の庸衆は即ち愚衆なり、彼が作の俗受けよきは即ち彼が着眼着想共に卑きを證するものにして、作家としては寧ろ愧づべきの事たり。然るに何事ぞ、彼れ弦齋、靦然却て自得の色あり。その『譽の兜』や、その『朝日櫻』やの自序にその抱負を誇る、他人の吾人すら冷汗の背に浹きを覺ゆ。果然彼は盲目蛇に畏ぢざるもの。彼れ『朝日櫻』の下卷に序していふ、余が此篇を草せしもの、聊か人心の嚮ふ所を後世に傳へんと欲せしなり。然るに事、心と違ふ、徒に人をして快を小說中の幻影に呼ぶに至らしむ云々と。知らずや汝が小說中の幻影に快を呼ぶものは、天下愚衆の沒趣味漢のみ。汝の小說に快を呼ぶものある間は、日本の讀書界の低きを知るべく、到底大作家を出すに至らざるなり。よし之を出すも、到底之を咀嚼する能はざるべし。吾人は弦齋の小說の賣行き宜きを聞く毎に、喟然として長大息せずんばあらず。然れども弦齋の作は此の如くなるが故に、且彼が所謂徼衷なるものゝ存するが故に、其記する所純潔にして勸善懲惡的の意を寓し、之を天下愚衆に讀ましむるも其毒を流すこと、探偵小說の如くならず。藥にもならぬ代りに毒にもならねば、吾國讀書界の程度にありては、慘酷冷峭の氣を養成すべき探偵小說の流行せんよりは、寧ろ弦齋の勢力を占めん方望ましかるべき歟。（同上）

泉鏡花

新進の功を收め難きや天下何の途か然らざらむ。先達のものは傲然として他を蔑視して其の齒牙にかけざるに非ずんば、即ち自家の地位を保つに汲々として敢て他を顧るに遑あらず。而して世俗は慣々として、眞の具眼の徒あるなし。宜なり新進の容易に進み難きや。吾人は此點に於て紅葉を高しとなす、鏡花を誘掖擁護してその今日の地歩をなさしめたるは實に紅葉の効なり、鏡花は實に一個の天品たるに相違なし、然れども、紅葉なくんばかくまで早く我文壇に名を成すを得たりや、否や、疑ふべし、而して吾人はこれと共に、鏡花が時機の好運に乘じたるを祝せざる可からず。天下が輕浮なる戀愛小說に飽き、淺薄なる俠客小說に飽き、殘忍なる探偵小說に飽きて、漸く沈着なる、深峭なるものをもとむるの時に於て出でゝ、峭拔の想に富み、深酷の筆

を揮ひ、其觀察は人間の皮相を徹して複雜なる人情の機微に達し、着眼は奇警にして能く、舊思想の窠臼を出で、別に小說界に一生面を開きたる、鏡花が時運の潮流に乘じたるに非ずして何ぞ。其『夜行巡査』既に有數の作也、『外科室』趣向亦奇拔、殊に其末句『語を寄す天下の宗敎家、渠等二人は罪惡ありて天に行くことを得ざる可きか』の一語、何等峭絕の言ぞ。唯、氏に憾むところは筆を着くる淡きに過ぎて、作者の理想の悽惋に似ず、比較的に讀者を悚然たらしむる能はざるの嫌なき能はず。寄語す氏よ、その單禪的の筆をすてゝ、長篇大作に於て複雜亂糾せる人情の秘密を闡明し、併せて十分に其の懷抱の理想を發揮せよ。氏にして勉めてやまずんば紅葉、露伴をして瞠若たらしむる、或は難からず。勉旃よや。（廿八年七月）

德富蘇峰

『新日本の青年』出で尋で『國民の友』の始めて世に出づるや、德富氏の文調一時を風靡して少壯青年の間に持囃され、吾國の文體爲めに一變化を受け、今日文士の文、所謂民友調なるものゝ痕跡多少印せられざるはなし、多少害を今日に遺したるものなきにあらざるも氏の功は沒す可からず。蓋し氏の文平淡にして譬喩に富み、婉曲にして

流暢。簡勁の趣なしと雖ども、前に應じ後に伏し、斷ては續き々々ては斷ち、其間多少の波瀾、多少の頓挫に致をとる。假令へば春の川一筋若草の野を流るゝにも似たり、湍に激し巖に咽ぶの奇觀なしと雖とも、紆徐曲折また趣なくんばあらず、また以て當世の能文たるを失はず。然れども文才餘りありて見識足らず、卑近俗を懌ばすに足れども深刻の人を動かすに足るものなし。氏の才は其文の如く婉曲なり、百事に應じて澁滯するなし、故に奇警の着眼はあり、然れども潛思默想、玄に鉤り微を拆くが如きは氏の長所にあらず。其才既に婉曲なり、機を見て即ち變ず、故によく機先を制することはあり、然れども熱誠眞摯一を執て渝らざるが如きは、氏のよくする所にあらず。其才既に能く百事に應じ、またよく機を見て變ず、其思想從て世俗的ならざる能はず、既に世俗的なり從て功利的ならざる能はず。氏が多面なる政治の說も、經濟の說も、乃至美術文學宗敎の說までも、悉く此世俗的功利的思想の發展にあらざるはなきなり。既に其の人物世俗的なり功利的なり、故に宗敎的の人物たる能はず、又た詩的たる能はず。氏の人物は新島たるよりも、寧ろ福澤に近し。福澤に近さの人物を以て、而して新島の薰陶を受く、功利的人物に於ける淸敎的薰陶、茲に於て乎氏の胸中に二者の衝突起らずんばあらず。既に向上して献身的たる能はず、又俗に混じて錙

銖を爭ふこと能はず。其衝突決する能はずして、氏は猶矛盾の霧中に彷徨す。氏が文學上の諸小品を讀めば此矛盾は明かに之を認むるを得べく、一篇の中にして猶首尾の貫徹せざるを見ること少きに非ず。氏は功利の說を其本尊としながら、猶神來を論せんとするなり、高潔を論せんとするなり、献身を說かんとするなり。而して氏の神來をとく、唯語によりて之をいふのみ、氏敬虔熱誠の人に非ず、如何ぞ眞に神來の何物たるを解せんや。高潔をとく。然れども氏の胸中は、あまりに世俗的なり、何ぞ眞に高潔を知らんや。献身を說く、而かも氏はあまりに利己的なり、何ぞ献身の實を躬にするを得んや。献身や、高潔や、神來や、氏は口に之をいふのみ、語によりて之をいふのみ、內によく之を悟得し、外によく之を躬行するにはあらざるなり。氏或は此矛盾を自ら知らざらむ、知らずして而して自ら迷へることあらむ。然れども半夜人定まる時、靜に其胸底に向ひ、而して其口にする高潔、献身、神來等の語を味へよ、此等の語に對する一點の疑雲散せるに似て而して猶散せざるものあらむ。然れども、雜誌記者として氏の文は當代屈指なり、政論家としてまた敢て人後に落ちず。氏の天職蓋し政論雜誌の記者たるにあらず歟。而して唯一言の氏に寄すべきあり、曰く一片の眞骨頭を有てよ、說を變ずるはよし、節を變ずる莫れと。（二十九年三月）

多憾の詩人故中野逍遙

古より才人夭折多し、天其才を嫉む乎、抑もまた其長く地上に謫落するを惜む乎、李長吉二十六、キーツ二十七、壽を享くると何ぞそれ短き、蘭挫け玉折る、洵に東西歎を同ふす、逍遙子逝くの歳また二十又七。

逍遙姓は中野、名は重太郎、字は成卿、伊豫宇和島の人、大學に在て漢學を專攻し、明治二十七年業を卒へ、未た幾ならずして病むて山龍堂醫院に沒す、志を抱て施すに及はず、鬱憂疾をなして而して遂に逝く、洵に悲しむべき夫。

予もと逍遙と窓を同ふす、而かも其初め未た相知らざるあり、蓋し彼れ大學にありと雖とも、藻思ある彼の如きもの彼の無味なる日課に堪ゆる能はざりし乎、將た碌々たる鷄群に伍するを欲せざりし乎、常に講筵に出てず、故に窓を仝ふする三年、僅に一面の識あるに過ぎざりしなり、而して其逝きしの年七月、同人相會して、小西湖上の長酡亭に飲む、予か彼と親しく語を交へたるは實に此時にあり、而も一見傾蓋、他日の拆肩把袖の歡會を約して相別る、既にして彼は京を去て故國に歸省し久く來らず、予も亦八月一たび國に歸り再ひ京に入て彼を訪へとも、彼時に猶未た京に來らず、後彼か

歸京をき〻幾度か之を訪ふ、而して彼も亦幾度か予が寓を叩けり、而かも吾行くの時彼在らず、彼來るの時吾在らす、此の如くにして久しく相會するの期を得ず、十月の末一夜天澄みて月明かなり、彼飄然一壺を提へて吾寓を叩く、屐を倒にして迎へ入れ、相與に對酌、壺倒れ耳熱し、更を盡して相別るゝに忍ひす、即ち相送つて共に月に步す、戀々として袂を分ち難し、徘徊久之、彼時に太白か詩を高誦していふ、桃花潭水深千尺、不及王倫送吾情と、其後數日彼また來る、共に相携へて東台山下の一小旗亭に酎む、醉步蹌跟月を踏むて不忍池畔を逍遙す、淡靄東台の樹を抹して池畔の燈影星の如く、四顧閒然として人なく天を仰いて相共に高吟、意氣頗る昂る、其翌彼書を寄せていふ、與未た盡さず相期して復相飲まむと、而して予彼を待つと連夕、彼遂に來らず依て彼か寓をとへば彼まさに病むて牀にあり、熱氣頗る高し、微かに眼を睜て予を視、語ると數言にして昏々としてまた睡に入る、嗚呼人世如電といふといへとも當時誰れか彼れか遂に逝て再ひ歸らさるを知らむや、匆〻辭し歸る而して彼遂に復みる可らさるなり、迷明路異に重壞永く隔つ、また彼と一夕の歡を罄すに由なし、青燈の下彼か遺稿に對すれば、窓外寒風淅瀝落葉雨の如く、燈光明滅壁上朦朧髣髴たる音容を睹る、起て戸を推せば殘月軒にあり、冷霧縹緲として有るあるが如く、之れを呼ど

も應ずるものなし、忽ち見る一行の過鴈悲鳴雝々人の腹を斷つ。

逍遙遺稿一部字々悉く是れ涙、句々悉く是れ血、彼れの詩や文や悉く是れ彼が淋漓たる滿肚の不平の迸り出でたるに非ざるはなし、彼は世の浮薄を憤り、人の輕佻を慨す、彼は多情多感熱して而して激せり、彼は世の爲めに泣けり、而して世は冷々として彼を顧みざるなり。彼は人の爲めに憤れり、而して人は冷々として彼に酬ひざるなり、彼は憤らざる可らず、彼は激せざるを得ず、

世の人に向てわが思ふ如き熱情を望むことゆめ〳〵かたかるべく、寧ろ超然主義、に身を置て、動物の如き世人の眠をさまさんこと詩人の職分ならむ、

と、彼は激するの餘り、憤るの餘り超然として、冷然として、この汝々たる世と相涉らす相交はらざらんとせり、而かも彼の多情彼の多恨、彼は到底冷々水の如くなる能はず、超然として高擧する能はず、激して而して激し、憤りて而して憤る、胸中の鬱勃抑へんと欲して抑ゆる能はず、發して詩となり文となる宜なり其詩や文や悲愴激越にして沈痛峭拔なるや、

千篇詩就李長吉、嘔血夜來似杜鵑、春夢凄凉紀州月、秋琴寂寞武城煙、天憎才俊投窮苦、世妬良緣阻秀妍、寶劍斬姦用無處、匣中共泣廿餘年

と嗚呼其情洵に悲しからずや。

彼常に予に謂ていふ、我常に悲む而かも未た悲を去らむことを欲せず、我は悲を以て悲を遣るのみと、その胸中一塊欝結の情常に懐に去る能はざるや、彼は僅に酒を被つて強て一時を破らんとせしなり、而もその共に飲むで醉氣拂々たるの時猶いふ、醉中猶予の懐結むで而して解ざるものありと、嘗て酒間予に示すに枉和醉中春の一句を以てしたることありき、試みに彼が小照に對す、猶一片の憂愁其眉宇を壓するものあるをみる、嗚呼彼が無限の憂愁、酒によつて消し難く、詩に發して猶悲む、彼は僅に悲むによりて其悲みを遣らむとせしのみ。而して彼が本領實に此悲泣にあつて存す、彼嘗て其詩卷に題して悲鳴餘響といへり。

醉唱一篇行路難、雲山渺々水漫々、平生不解人間樂、百代遠違世上歡、夢過南湘絶關塞、筆招北斗近闌干、夜如何巴天將曉、痛感向吾風露寒、

平生不解人間樂、百代遠違世上歡と、何ぞ其語の悽にして愴なる。

莫作至明鏡、々至明則生眩光、莫抱過鋭才、々過鋭則多感傷、君不見賈誼氏、千年呑恨長沙地、又不見揚太眞、馬嵬碧血猶未乾、人世安途在碌々、臨事休狂競奇節、弱柳待風全嬌條、勁松撲雪見摧折、高才遭逢多可悲、生女莫願絶代姿、嗚呼驪龍亡身猶因頷下三寸玉。

何ぞ其語の矯して而して激せる。

十年家山不容吾、又抱狂骨上征途、美人泣訴百年恨、雲慘憺兮離亭晚、玉蕭吹起滿眼愁、長江之水自天流、英雄劒下傷心地、悲子歌邊感慨淚、秋風明月白人鬢、嗚呼人世莫作讀書子、

何ぞ其調の悲にして而して壯なる

嗚呼天之窘文人詞士、一何如此之虐而慘也、裂其親子之愛、裂其兄弟之情、裂其朋友之信、裂其夫妻之歡、有子者奪其子、有孫者、奪其孫、使之現世未來無相逢相樂之期、褫其居室、褫其衣服、褫其飲食、使之使飢而瘦渴而瘁、猶未足焉、則疾病其身躰狂亂其精神驅之于幽暗不明之谷、投之于永寒無温之淵、使之忍而傷、怨而慕、故泣者聲入于九地、哭者響動于九天、前則貫千古、後則達百代、誠使聽者心駭而神迷也、雖然其爲聲不發于口而發于筆、不泄于言語、而泄于文辭(中略)雖託辭于怨天、非逆天之心、雖借筆于咎人、無憎人之意、自悲而自痛、無關世之笑與罵也、嗚呼讀書而知感慨、百年不解人生之樂、紅顏倏忽而白髮暗催、花月俄滅而灰燼立、隨加之得喪動其心、離合破其腸、變幸榮多望之身、頓成數奇失意之客

乃以凄絶終世、豈不重而可愴乎哉

嗚呼これ逍遙自らいへるのみ、何ぞ沈にして痛なる。

逍遙子鬱々、無心于觀浮世之花、無心于賞浮世之月、無心于翫浮世之春、無心于飲浮世之酒、而又無心于趁浮世之富貴、出舍而彷徨東台之丘、惆悵于落紅之樹下焉、有客訝曰、工厰之傭夫乎、權門之奴僕乎、私塾之書客乎、病乎、窮乎、何者焉其心之若喪、愴然其容之似憂也、三月花開、四月花熟、何不笑而歌乎、答曰、非病非窮、迷失於人生之道路、願使我一見青天之白焉、客啞然曰、太陽在西、青天將暮、何苦而迷于帝都之大路、子殆狂乎、逍遙子不能答客亦拂袂而去、

彼は鬱して常に病めるか如く、彼は悲んで殆ど狂せるものあり、

缺蹈世界、事々無不不平、塲々無不銷魂、潘郎之朱顏、宋子之文心、徒增感招慨而已、則活々古今、落々宇宙、寧不如木石之默々無識耳、嗚呼佛氏已說之西哲亦演之、而多血青矜尙不能解恨于彈鋏之間、淋漓關山、匹馬長鳴、文章經國、禿筆山積、乃畫策未就、空向鳳闕而致志、露華三更、鐵笛一曲、情塞難逾、愛關遮斷、欲見而不可見、欲逢而不可逢、錦絃全絕、而鴛夢俄驚、血淚共揮、而神骨凋瘁、吁是爲誰而然邪(中路)積万種之愁情、而化一夕之風露、玉碎而不惜、珠穴而甘心、

百骸散、而三魂飛、吊之無人、風雨鬼哭、嗚呼有故而來界矣、奚爲乎去世哉、待不以其處世之罪也、盡不以其心友之罪也、裂不可裂之緣親眷之罪也、然而皇天無情、神恩極冷、及乎駑馬躑躅驥之髓、烏鵲打丹鳳之頂、貞松種俗夫之苑、梅花上痴漢之臺、則凄凉歲月、黯淡乾坤、何處爲生、誰共終歡者、

滿肚の不平、滿腔の鬱憤。

嗚呼逍遙、彼れは滿腔の怨を胎して世を去り、滿肚の憂を抱いて墓に入れり。彼か憂や、彼か怨や、印して彼か異篇にあり。讀み去り、讀み來れば、我も亦聲を放て慟哭せんとす。彼か稜々たる氣骨に加ふるに多情多恨の詩才を以てす、花に泣き、月に哭し、佳人にも泣き、家國の爲めにも哭す、彼は憤ると共にまた泣き、激すると共にまた哭す、彼の世に憤るは彼の世の爲に哭すれはなり、彼の人に激するは彼の人の爲めに泣けはなり、其多情多恨なるは乃ち骯髒不平なる所以。彼か嘗て一天風露四更月、哭罷百花靈我身、といへるは洵に信然なり。其多情多恨を知らんと要せば、試みに彼が狂殘銷魂錄に於ける數詩にみよ。

雲斷心魂月引愁、思君一日度千秋、但將窓底千絲淚、灑入墨江晝夜流、墨江之水流不休、遲上之月千古浮、水月兩情各個恨、渾鐘秋思八南樓。

樓頭明月照相憐、樓下鏡鴛比翅眠、生憎一陣狂飈起、蕩漾水波夢不圓。
天開毛國秀姝出、地啓帝京才士來、南氏之君品第一、何人伊得傍瑤臺。
此君只合住瑤臺、何向人間謫落來、惱殺海南狂杜牧、風姿高倚月前梅。

若しくは我所思行の數詩にみよ

我所思兮上毛人、欲往從之天道屯、城帶山河風光瞻、地均寒熱氣候遵、一家令敎
修風儀、廿歲淑德養性純、比君芳山香櫻樹、嫩雲滯枝地無塵、路通紅霧仙源峽、
影蘸碧波漁郎津、情關情塞千萬里、感慨人對繁花穗、天漠々兮斗茫々、一夜何堪
斷腸曲。

我所思兮駿臺家、欲往從之人事差、東臺南去萬世橋、一樓風幕蒸絳霞、初訝天妃
出蓬萊、忽見瑤階降名花、比君太液白蓮蕚、仙莖亭々捧香葩、休說張氏好容儀、
却使六郎羞粉華、情開情塞千萬里、
我所思兮南氏姝、欲往從之我裳濡、風露滿天人不見、微聞琴聲洩籬隅、行雲忽過
鳴鴈下、十三弦上迸氷珠、比君琶湖秋月輪、百里粉色在平壺、影橫紅奩濕胭脂、
露落碧落涵珊瑚、
我所思兮貞卿々、欲往從之我馬驚、淨几朝倚人如玉、歌詠秀調拂太清、煙霞忽飛

薛濤箋、一枝彤管碎水晶、比君富嶽晴雪色、白扇無際立東瀛、雲逗冷影迫豹窟、
花發寒光壓鳳城、

更に思君の數首にみよ

思君我心傷、思君我容瘁、中夜坐松蔭、露華多似淚、思君我心悄、思君我腹裂、
昨夜涕淚流、今朝盡成血、示君錦字詩、寄君鴻文册、忽覺筆端香、窓外梅花白、
贈君名香篋、應記韓壽恩、休將秋扇捲、明月照眉痕、贈君双臂環、寶玉價千金、
一鐫不乖約、一題勿變心、

或は道情にいふ

擲我百年命、換君一片情、仙階人不見、唯聽玉琴聲、長安市中水、總是卓姬香、
染上相如筆、文章爲丈光、與君住瑤臺、與君分鏡面、欲共白年春、階前花片々、
我有菱花鏡、贈君示意濃、猶向夜夢裡、分明得相逢、

或は長相思にいふ

帶國寬幾尺、思君瘦如此、九月木葉下、萬里霜露墜、對之誰不悲、花燭揮涕淚、
秋風驚我夢、金氣沁吾髓、征衣破不補、孤衾薄於紙、思君寂不寐、中宵三四起、
怜見孤窓影、愁對寒花穗、願托秋天月、片々訴幽思、願借曉空鴈、行々寄錦字、

願爲黃金環、一生付玉指、願爲綺羅衣、百年纏紅臂、願爲卷髮梳、願爲洗膚水、願爲照影鏡、願爲分溫被、佳人不自夸、蘊德隱巷里、微風明月夜、琴聲自遠至、聽之魂共銷、下庭空歔欷、思彼可憐妹、思彼可憐子。

嗚呼此可憐妹、此可憐子、何人ぞ、何者ぞ。予嘗て之を以て消遙にたゝく、消遙笑て答へず、而かも其哭花詩による、彼か相思の人、此の可憐の妹、彼を捐して逝き、彼に先たつて去れるなり。埋香瘞玉、多感の彼か憾知るべきのみ。

去者蕩々不可留、由來歲月水東流、誤收絕艷美人淚、枉作俊才奇士愁、木葉應知天地慘、鴈聲始駭海湖秋、幽魂漠々迷何處、白雨黑風滿綺樓。

十里悲風吹白楊、遺調猶憶鼓琴堂、意中人去燈無影、恨裏身銷夢有香、楓葉曾題三世誓、梅花忽亂九迴腸、灑來還是昨朝淚、一掬何堪向故墻。

一夜鴈鳴魂亦驚、千金身命爲君輕、窮呼訴感衝天響、絕叫伸哀動地聲、烟月傷心渾幻夢、花風入思半痴情、青々猶繁李門柳、寄吊當年貞麗卿。

可憐一點梅心負、僅見開花輒落花、廿四春風吹恨長、十三鴈柱惹愁加、乾坤有淚翻江雨、天地無情捲寒沙、病裡蕭郎喉忽破、破蕭吹徹王姬家。

品批曾推月裏梅、名枝欲安托春魁、冽香經雨崇朝散、寒粉逐風中夜推、長松猶記斷琴譜、强柳漫牽殘鏡埃、縱使威卿詞筆在、一生不賦茗溪臺、

又其茗溪怨にいふことをきかすや、

茗溪怨兮茗溪怨、茗溪之怨人不知、有鵑中宵哭、有蝶半夜悲、憶昔佳人在瑤閣、天女夜降授琴曲、六律鏗鏘諧宮徵、十指攏撥合羽角、萬松風起鶴驚秋、半輪月落鴈忽遏、洋々伯牙千年音、誰哉聽得感尤深、高山流水有人矣、我是風流今鍾子、佇立斂襟獨蕭然、離外停馬暗揮淚、一曲想夫憐、二曲趙飛燕、三曲春鶯囀、四曲九重春、五曲六曲不可聽、只有婉聲斷續迸徽絃、佳人年廿四、凄々入雲閣、芳魂不復回、狂飈吹花蕋、花萎春盡曾迢々、遺曲猶迷萬世橋、君不知天遠地而月邈々、茗溪之怨永不滅、

彼れ嘗て相如と文君とを論じていふ。

幸而才色相逢矣、故其患也止于相如多病之嘆、其恨也終于文君白頭之吟、若使之不相逢乎、則必木鷄之驚鶴、烏鶉之打鳳、不嘔血破心、則摧肝傷項、不泣則病、不病則狂。

而して文君遂に相如に相逢ふなくして逝けり、相如たるもの豈に泣かざらむや、豈に病まざらむや、病むで而して狂に及ばずして、彼も亦逝けるなり。彼が哭花錄に序し

ていふ所をみよ。

嗚呼人世之事不忍言、又不忍記矣、九天降碧血之雨、天地漲紅淚之浪、飛鴻飛而寒雀迷、丈夫感慨寧不意氣淒然乎哉、杜牧叙恨于綠葉、韓翃發憤于章臺、尙有所慰也、非烟終誓于不言、彥直感形于未來、此則甚矣。

既に泣く、また病まざらむや。

哭花之一日、逍遙于沈々血病、暗々而傷、口不解味、耳不聽聲、目不視色、擲書而展轉于愁痛之蓐、不謀於醫、不飲藥、以待命之所至焉、

彼が鬱結解けず疲面癯骨、沈默呻吟の狀睹るが如きを覺ゆ。而して彼れは幸にして癒ゑ去て上毛に游べり、上毛はこれ彼か相思の人の生れしの地、彼れが特にこゝに游びし所以の意、豈に解し難からむや。

四日上毛之行、豈漫託詩文之興于佳山水者哉、誠有思于睽焉、而泣于血矣、血半竭而身殆死、

彼が意中の人を生せる上毛の山水、彼が眼に入り來る、既に彼が眼に入る其山水豈に彼に對して幾倍の重きを加へざらむや、上毛漫筆の叙する所をみよ。

蓋謂上州之山水峻峭奇拔、猶秦漢以前之文、而以溫泉評之、亦可以各當諸子矣、

伊香保之恬澹如老子、草津之嚴烈、似韓非子、而四萬之奇韻、其在於莊荀之間乎、妙義之峻爽、當孟子、赤城之偉麗、如左氏傳、而利根之浩々滔々波瀾不盡者、馬遷之史記乎。

彼れ常に文は秦漢以前を推す、今上毛の山水を將て秦漢以前の文に比す、その上毛の山水を重むせる知るべきのみ。彼は之を以て西都の風色に比していふ。

世人評神州之山水、必先屈指于西都之勝、々々々々非不佳、而華靡雕飾如都人之容貌與氣質焉、以吾視之、盆池之假山水耳、見榛名山之幽邃、則嵐峽失色、見吾妻川之清冽則鴨川失色、而見上州之美人、則祇園之名姬失色矣、

嗚呼上州之美人、上州之美人、これあるか爲めに上州の山水は逍遙の眼に映して一段の光彩ありしにはあらすや、彼れまた後其歲八月九州に遊ふ、九州の山水を以て此に比していふ。

夫九州之景不以奇峭勝、而以優雅、勝試以信毛之景比之、耶馬之溪第一可爭勝于妙義之峰、耶馬有河沿岸而上、岸樹鬱蒼、水流潺湲、板橋石門、意遠心杳、不覺身入于畫圖之中也、而無妙義之危石怪巖、半落而纔支、白雲縹緲神骨欲仙之奇、山國川之韻致有桃花流水之概、而無吾妻川之清冽如碎碧琉璃之觀、筑後川之奔瀉

淙々有烈士叫義之風、而無利根之浩流蕩々英雄指麾之態、

またいふ

九州多山而路必坦夷、無如碓氷之山腹迂曲成逕、下方已暮、而頂樹尙掛夕陽之觀、魚悉清鮮、而酒不及于上毛之純洌、人皆質實而或過于感情、乏于關東貞堅剛恐之氣、熊本悲歌之風、今半銷磨、所謂風俗與時移者歟、吾却慕于上毛館林不華不野之俗也。

その何れを揚げ、何れを抑へたる、看るもの便ち知らむ。想起す、去年十一月天長の佳節を、期し同人相議つて東亞說林を初刊す、逍遙か九州漫筆實に載せて當時の紙上にあり。予の逍遙と會するの夕、醉餘吾彼にたゝくにその鬱憂の所凶を以てす、彼れ無言机邊の東亞說林をとり來り、朱を以て其上毛を揚げたるの句に至る每に之を圈し微笑以て予に示しゝを、嗚呼〻〻、逍遙の意の在る所知るに難からざる哉。

而して彼の上毛の山水を愛するの極終に

他日月水有緣得託生于上州之人、死則埋骨於碓氷妙義之麓、百年志願吁又何加焉、而此願茫々何時遂哉、

といふに至る、而かも其上毛羈旅の詩十律、悉く感傷の句沈痛の辭にあらざるはなし。

相見而誓百年之諸、忽而隔雲閣萬里之天、北斗明星、風露夜深、湘廉半鎖、琴曲低奏、一天狂飈、長笛落梅、吁是何緣乎、吁是何夢乎、是所以消遙子、歲回春來而紅巾之淚未乾也、感傷之筆所綴一千言、悲蠶吐糸、怨鵑叫血、斷非咏花鳥風月者、其感傷十律、起筆于入上州、而結于館林之一語、匹馬未歸、忽感茗溪之舊恨、意長而辭短、心迫而句澁、極不盡所欲言、道學之人讀之、應笑其喪心、法敎之士誦之、當罵其迷溺、或以爲愚、或以爲痴、以爲狂、以爲亂也、而消遙子無眼無耳無口矣、

嗚呼哀の極、痛の極、消遙子無眼無耳無口矣の一句、これ悲痛の極、人の喪心を笑ひ迷溺を罵り、愚となし、痴となし、狂となし、亂となす、あす、則ちそのなすに任ず、而かも逍遙の眼無く、耳無く、口なき所以を知れる乎。

歲之甲午春三月、吾憶佳人入上州、縱憶佳人人不見、巉嵒寒石水空流、千年紫鳳飛無跡、終古白雲去杳悠、忽捲驚沙天咫尺、長風鬢髮半峰愁、

赤城矗立幾千仞、看到山巔天亦盡、鳥道極眸絕塞關、猿蹤一路入雲漢、日銜群馬旅思長、花落館林春景短、猶有双襟沾未乾、百年此淚白吾鬢、

百年此淚白吾鬢、嗚呼此淚これ何の淚ぞ、嗚呼これ何の淚ぞ。下野より上總に入り古

河關宿を過ぎ、千葉を經て京に歸る、歸り來れば東台の花散じ盡し、茗溪の烟月舊に似て更に人の愁を添ゆ、

半月出都春盡摧、番々風雨事堪哀、欲問紅梅落多少、怕人說及茗溪臺、

半月の行游、彼の鬱幽を解くに足らず、却て碓氷嶺の厄に死せざりしを憾む。

碓氷嶺之厄、一夜懸於絕壑之樹枝、不見月、不見星、不聽人語、天明幸而蘇矣、而再歸于京焉、吁使之病而復癒、陷之危而不殺、癒者幸乎、不癒者幸乎、蘇者幸乎、不蘇者幸乎、悲歡苦樂、離合遭逢、竟傷神于缺陷之人生而不已、則誠知癒而蘇之終不幸也、嗚呼不願富、不願壽矣、共挽鹿車、不願陰麗之妻矣、經理天下、不顧伸謀之子矣、隱夫青山而采薇、臨清泉而洗耳焉、不然踏彼滄江而葬魚腹焉、抑再陷于絕壑而終于所慕之上州之土乎、飢之者天乎、渴之者地乎、使之叫者絕世之美人乎。

ア、何等絕望の叫びぞ、彼は七月業を卒へて豫州に歸り、八月九州に入りたり。而して、

熊街之膾、崎陽之酒、奈未能解吾鬱懷之萬一何哉、夕陽西沒、晚舍待客、勞脚輕濯、樓窓呼杯、人生之快莫過乎此時者、猶且沈々感情海之波、滴々不禁双袖之沾者、江湖天涯其果思誰之涙乎、

といふに至る九州よりまた京に上る、上りて幾くならず彼は遂に意中の人を追ふて去れり、噫嘻彼れ今地下に其手を把つて而して情を訴ふる邪、將たまた天上に去て相與に帝の側に翺翔する乎。

言ふ莫れ、逍遙一個多情の才人に過ぎずと、彼れぞ相思の情は即ちまた其親を思ふの情なり、孝友の情なり。即ちまた國を憂ふるの情なり、忠愛の情なり。彼か相思に熱し相思に羸れたるの時に於ても、未た嘗て其親を忘れざりしなり、功名の雄心落々として猶存せしなり、彼か上州に游ひしの時、まさに是れ駐韓の大鳥公使歸朝せんとせしの時、その上州漫筆中にいふを見すや。

若大鳥公使、引我許共到淸國、天又使我中道不誤身、則北窮長城之窟、南踏安南之境、叩燕趙之酒市、訪巴蜀之雲棧、往探焉、歸而學焉、未爲晚矣、而奉母再浴上州之温泉、其在何日也、噫天已付裂枝之恨而使我百年有風樹之嘆也

といひ、

公使卒然浮海去、壯游九國歎無期、天扶東學焰猖獗、地啓西淸勢崛崎、悲士丹心摧落莫、英雄紅涙滴淋漓、神州同胞四千萬、堯舜致君當屬誰、

といふ彼は自ら詩にいへる如く、

不死濟時死留績、看他青史策鴻名、竝行無悖要相及、豪俠氣兼兒女情

豪俠の氣を以て兒女の情を兼ねたるもの非邪、

嗚呼乎、噫嘻乎、思國思家、思身思人、百年倏忽、紅顏破碎、花月匆々、逐之何及、悲夫吾生之孤寂、累々乎其憐于無處適歸矣、東憶武城佳人似夢、風露宇銷、殘月在軒、傷舊會之無績、而悲聚散之莫定、況茫々浮世、人情之險甚于峻阪、世風之澆過于薄氷者、嗚呼人已不可賴、我亦不可倚、朽者下而混土芥乎、不朽者上而從星辰乎、知我者其唯天耳、昔仲尼刪春秋、遂絶筆于獲麟、其志亦可哀矣、逍遙子感惻、泣于游者三回、于上州、于豆州、于九州而悲鳴之稿當終于此篇、然而淚華之漣々猶如舊者、他年化爲雲乎、爲雨乎、以救世乎、以亂俗乎、其沈鬱抑悲之氣、雷發霆裂而面代之萬之日、則逍遙子朗呼大笑于九地之下之時也、

逍遙子國を思ひ家を思ひ、人を思ひ身を思ふ、逍遙の逍遙たる所以實に其悲鳴にあり、而して彼れいふ悲鳴の稿當さに此篇に終るべしと、此言讖をなして逍遙の悲鳴復たきく可らず、嗚呼逍遙が沈鬱抑悲の氣、雷發霆裂してその九地の下に朗呼大笑する果して何の日ぞ噫。

嗚呼逍遙李白が才を有して之に兼ぬるに杜甫が情を以てす、其才や飄逸其情や而かも沈痛、

我前星是長庚星、太白少陵安在哉、千年地下起二士、與君欲較八斗才、

今や較し得て如何々々。

第二嶺雲搖曳 終

明治三十二年十一月十八日印刷
明治三十二年十一月二十日發行

定價金二十錢

編輯兼發行人　佐藤儀助　東京神田錦町二丁目六番地
印刷人　藤澤外吉　東京神田區仲猿樂町四番地
印刷所　日本印刷株式會社　東京神田區仲猿樂町四番地

發行所　東京神田錦町二丁目六番地　新聲社

新聲社出版書籍要目

青年機關　新聲

特別寄稿家——大町文學士　笹川文學士　田岡嶺雲君　與謝野鐵幹君
土井文學士　內海文學士　久保天隨君　外三十六名家

毎月一回十五日發行
定價金六錢郵稅五厘
六ヶ月前金四十八錢
但し內臨時增刊（一部十三錢）を含む。

今の世青年雜誌と稱するもの極めて多し。而も其の內容を看れば、學術の講究を事として、滿紙乾燥無味の文字を以て埋め、宛然中學校の科外講義の如きもの、滔々として皆然り。此間に在りて青年の志氣の發揚を勉め、優雅高潔の趣味の涵養に盡くすものは只一の『新聲』あるのみ。『新聲』の出てしは、實に二十九年の夏にして、爾來歲を閱すること四、其間一日も改善進歩を怠ることなかりしも、今年に至りて、大に紙面を刷新し、組織を一變し、新に社內に青年革風會あるものを設け、風氣の革新に盡くして、天下に充つる腐氣汚俗の打掃を期し、一面に於いては益々文學趣味の鼓吹に勉め、大に年少文士の投稿を歡迎して、之が爲に誌面の大半を割く。本誌の所期や固より遼遠、未だ之を以て滿足せざると雖も、滔々たる今の青年雜誌社會に在りては、慥に萬綠叢中の一點紅なるを信ず。

評釋叢書

批評的研究は目下の急務也、和漢英三文學の精髓に付て其特色と趣味とを解するに非ずんば廿世紀の文壇に立ちて覇を爭ふと能はざる也

漢詩評釋

文學士　久保天隨君著

漢詩は東洋文學の大產物也、雄渾悽愴の氣格、高遠幽玄の趣味、他に比を求む可からざるものにして、二千年の長き、連續今日に至り、文星燦爛手を擧くれは捫するに堪へんとす亦盛ならずや。これを以て生命とする者は勿論、例令五字を列ね七字を並ぶるを欲せざる者と雖も、苟くも趣味を文字を有する者はこれが攻究を怠る可からず。これ我社が漢詩に於いて縱橫の伎倆を有し、支那文學に於いて深邃の學識を蓄ふる久保先生に請うて此書を出版する所以也。

定價金廿錢　郵稅二錢

全部六冊　一部讀切　毎月又は隔月一回發行　明年五月にて完成す
一部定價金貳拾錢　郵稅金四錢　六部前金壹圓拾錢とす

漢詩評釋
漢文評釋
國文評釋
和歌評釋
第二國文評釋
英文評釋

各編皆斯道著名の大家の筆に成る

青年文士之師友

青年文學叢書

第壹編　文學攻究法　文學士　久保天隨君序　米文學士　江藤桂華君著

本書は多年歐米に留學して、東西の文學に精通せる、米國文學士江藤專三氏の著述せるものにして、定價僅に十錢の片々たる小冊子なりと雖、綱を文學の定義、文學攻究法、文學大綱、學校、攻究書籍、現時の文壇の七つに分ち、丁寧周密に、初學者の爲に指南の勞を執れるは、多とすべきなり。(女子の友批評)

目次
三編……美學大要◉四編……韻文作法　定價　一部拾錢郵稅二錢
五編……青年文學◉六編……論文作法　全部五十二錢とす

第貳編　美文作法　米文學士　江藤桂華君著　製本出來弘く發賣す

今日新聞に雜誌に見ざるとなく、文士の筆にせざるとなきものは實に美文也。蓋し韻文の拘束を脫して、縱橫に天地の妙を謳ひ、自然の美を叙する美文の如きは、今の時に最も適應せる文躰なる也。本書は斯くの如き美文の作法を丁寧に說きたるの書、年少文學に志す人の寶典たること論なし。

大町文學士序
笹川文學士序

嶺雲搖曳

田岡嶺雲君著

田岡嶺雲子、滿腔悲憤の氣抑ゆる能はず、一管の毛錐に托して、今の文壇と社會とを罵殺し盡くす。一卷の『嶺雲搖曳』眞個腐敗せる社會の興奮劑也、混沌たる文壇の斬魔劍也。宜なる哉暮春刻成りて世に出づるや、五千部旬日にしてつき、再版參版四版亦忽ちにして、市に絕ちしとを。今ま、に第五版を發市して靑年諸子に頒つ。

增訂　定價貳拾錢
五版　郵稅四錢

ふる郷

田山花袋君著（再版發賣）

全一冊　定價廿錢
洋裝美本　郵稅四錢

ふる郷は好箇の題目なり、ふる郷は人生に於ける最も淸く最も美しき舞臺なり。ふる郷は人間が最後に至るまでの長き追懷なり、著者今詩的幽艶の筆を揮つて、芦荻風にそよげる沼と、殘濠水枯れたる古城趾と、雲影低く垂れたる平原とを有せる追懷の情深き其おつかしきふる郷を寫す。さかも著者の之れを寫すや、半は正面より半は側面よりし、奇正縱橫殆ど端睨す可からざるの概あり、正に是冊二年文壇後半の一佳作。

文學士　戸澤姑射君
文學士　久保天隨君
文學士　淺野馮虛君　著

中村不折君畫
下村爲山君畫

白露集（再版）

總クロース　定價參拾錢
洋裝頗美本　郵稅四錢

金風衣を吹き、白露秋に橫はる。そも觸れなば碎けん白玉のうちに淸き淚をつゝみて天地の萬象をうつすものは露にあらずや。白露を以て名とせる此集は、やがて戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を、あらはして剩すなし。人生の運命を知らんとする者は此集を見よ、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙け。若しそれ其文に至りては、誠に當代の絕品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、渙然目を奪ふ。美文に志を寄する者の机上、殊に此集なかる可からず。寫眞銅版に刷して卷中に挿める不折爲山二子の畫は、雕心鏤肝の餘に成りて、錦上花を添ふる者。

萬朝報評　大學出身の文士姑射、天隨、馮虛三子の小品文を集めたるものなり、姑射の想は神秘に興を發し、天隨の文は稜爽の氣を帶び馮虛の詞は切々の情禁しがたき者あり。姑射の文五篇、尼寺の鐘、獄屋の月、富士見地藏、殊に讀むべし。天隨の文三篇、大鳴門の跳、雨龍川源の一夜、蝦夷嵐の中、前二者は壯涼沈痛にして、稟て難きの味あり。例へば大鳴門のながめ、一節「まとに瀨戸海の潮の息たゝ、半里の喉元にせまりてあへぐかれば」云々の如きは、則ち是也。馮虛の文三篇、血くもり、谷川の水、吹雪の中、三篇共に軒輊あるを見す。皆詩的にして人情の秘に觸る。蓋し姑射は好んで心機の變を描かんとし、天隨は人間悲憤の消息を傳へんとし、馮虛は果敢なき運命を觀ぜんとするものならん。讀過聊か飽き足らざるの感なきに非るも、餘韻の嫋々たるを寧ろ此の輯の長所とせむ。

河東碧梧桐君著（再版發賣）

俳句評釋

全一冊 定價郵稅共
頗美本 金貳拾錢

俳句を作るもの甚だ多きも、俳句を解釋して、その趣味を知らしむるものは、殆んどあるなし。此著は新派の河東碧梧桐氏が、元祿俳句の粹をぬきたる猿簑の中、名吟と稱せらるゝ者百七十八句を選び、審美的標準に據り、其の趣味文法言語を詳しく評し、細かに釋きたるものにして、文章極めて平易なれば、俳句を研究せんとする者の一讀すべき好著なり（靜岡民友新聞評）

河東碧梧桐君著

續俳句評釋

全一冊 定價郵稅共
洋裝美本 金貳拾錢

『俳句評釋』の一卷を公にするや、初學の士趨走して是を求め、壹版數千部、忽ち盡きて再版も亦將に市に絕えんとす、著者江湖囑望の厚きに激し、勵精更に筆を續卷に執り正編に洩れたる秋春の二季を評釋し、以て完璧缺くるなきものとなす。其評論の嚴正にして痛快なる、實に快刀一閃、亂麻を斷つの趣あり。試に讀一過せば其俳句を鑑識する上に於て、其作法の妙機を知るに於て、少なからざる利益を得るべし。

小島烏水君著

扇頭小景

増訂 定價貳拾錢
三版 郵稅四錢

本書は青年文壇に嘖々の名ある小島烏水君が自然の美を謳ひて長虹の氣を吐ける者收むる所の美文、皆苦吟鏤琢の餘に成りて、艶麗、瀟洒、豪宕の美、共に一卷のうちに在り。刻成りて世に出づるや、江湖の視線一に此書に集り、初版旬日にして盡きしを以て著者に屬するに嚴密なる校訂と、新作の增加とを以てし、再版を發售せしに亦忽にしつく。今回更に增訂三版を公にして文事に志を寄する青年諸君の伴侶とす

妖堂居士著

文壇風聞記

全一冊 定價拾五錢
再版 郵稅二錢

菊五郎敦盛に扮す、紅顏幼態、眞個三五の少年。而してこれを樂屋に窺へば、白髮皺面の一老爺のみ、文壇風聞記は文壇樂屋觀也。小說家、評論家、新聞記者等百餘の女士を捉へ來りて、其冠を去り、其衣を脫き、赤裸々の面目を紙上にあらはす。蓋し其文を讀んで其人を想ひ、其人を想うて其風采を知り、逸話を知り、性情を知らんとするは一般の常とする所、此書は即ち讀書社會の渴望を滿たさんが爲に出でたる也。

□美文韻文

紅葉舟

定價郵税共金拾參錢

掲載要目

瀧まくら…大町桂月
穿雲記…戸澤姑射
金曜日の述懷…島崎藤村
翠虹萬丈…久保天隨
荒磯物語…江見水蔭
冬ごもり…小杉天外
おぼろ影…淺野馮虚
京の紅葉…河東碧梧桐
大雄山紀行…内海月杖
吟風咳唾…大沼鶴林

本書は當代一流の名家の作と、青年文壇に噴々の名ある人々の作とを掲げたるもの、詩文百篇一として諷誦に値せざるはなし。

再版發賣

田山花袋君
小栗風葉君
泉鏡花君合著

花吹雪

定價廿五錢
郵税四錢

新聲記者編　中村不折畫

春風秋聲

定價廿錢
郵税四錢

新聲記者編

若葉集

定價拾五錢
郵税二錢

大沼鶴林君著

雅正軒詩話

定價廿錢
郵税二錢

爲替拂込『一橋通』郵券代用一割增

發行所　東京神田錦町二丁目六番地　新聲社